

こにまづ平群女郎の家持に贈つた歌を載せる。これは一時に送つたのでなくして、度々に送つたのである。平群女郎の傳は、詳でない。

【口譯】 世に在り經て後にも、逢ひませうと思へばこそ、はかない命も繼いで、生きながらへて居ります。

【釋義】 ありさりて アリは、存在してゐる意。サリテは、行きて、時を経て生きて行つて。生存して時を経て。

思へこそ 思へばこそ。露の命も 露のやうな脆い命も。譬喩の階梯を越えて、直に露の命と云つたので、近代的な感じが出てゐる。繼ぎつつ渡れ 命を繼續しつつ、世に存在する。ワタレは、コソを受けた終止で、世に生存する意。

なかなか 死なば安けむ 君が目を 見ず久ならば 術なかるべし

【原文】 奈可奈可爾 之奈婆夜須家牟 伎美我目乎 美受比佐奈良婆 須敝奈可流倍思

【口譯】 却つて死んだら安らかでございませう。あなたのお顔を見ないで久しいならば、どうしてよいかかわらないでございませう。

【釋義】 なかなかに なまなかに、却つて。君が目を メは容色。術なかるべし 手段がないであらう。何とも致し方が無いであらう。

【参考】 類句、なか／＼に死なば安けむ

なか／＼に死なば安けむ、出づる日の入る別知らぬ吾し苦しも(卷十三、二九四〇)

里近く 君がなりなば 戀ひめやと もとな思ひし 吾ぞ悔しき

【原文】 佐刀知加久 伎美我奈里那婆 古非米也等 母登奈於毛比此 安連曾久夜思伎

【口譯】 あなたがわたくしの住む里近くおいになつたら、戀ひませうやと、理由もなく思つてゐた、わたくしは悔しうございます。

【釋義】 里近く君がなりなば 君が里近くなりなばで、里は平群女郎の住む里である。戀ひめやと 戀ひむや戀ひはせじと。もとな思ひし モトナは、理由なく根據なく。

萬代と 心は解けて 我が夫子が 拊みし手見つつ 忍びかねつも

【原文】 餘呂豆代等 許己呂波刀氣底 和我世古我 都美之手見都追 志乃備加禰都母

【口譯】 末長くと心は解けて、あなた様の抓つた手を見ながら、堪へかねたこととでございました。

【釋義】 萬代と 末長くいつまでも契は變らじと。心は解けて 心がうち解けて。拊みし手見つつ つねつた手を見ながら。忍びかねつも 感情に堪へきれなかつた。忍びは、この時代にはシヌビと書くべきであるが、この歌には志乃備と書いてある。新しい形である。

【餘論】 すねて口説をしたあとで、却つて末長くと約束して、心が満足して、つねられた手を見て、萬感が抑へ切れなかつたといふ、近代の文藝に多い材料を取り扱つてゐる。複雑な内容を、巧に短詩形に盛つてゐるのは作者の技倆であるが、世界がよほど都會人としての習性を養つて來てゐることを思はせる。拊みし手の語が、いかにも肉感的で効果が多い。

三九四
一三九四
久良多爾
宇知波
米良元
曆校本等
による

鶯の 鳴くくら谷に うちはめて 焼けは死ぬとも 君をし待たむ

【原文】 鶯能 奈久久良多爾々 宇知波米氏 夜氣波之奴等母 伎美乎之麻多武

【口譯】 鶯の鳴く深い谷に投げ入れて焼け死んでも、あなた様を待つて居りませう。

【釋義】 鳴くくら谷に クラは、諸國に地名の一部となれるものが多い。鎌倉、底倉、赤倉など。それで、クラも谷のことをいふと思はれる。くら谷は、同意の語を重ねて、印象を強くしてゐる。うちはめて ウチは、ハメの意を強調するもの。ハメテは、穿らせて。うち入れさせて。この身を投げ込んで。焼けは死ぬとも 谷の火氣によつて焼けて死ぬとも。火山の谷を想像してゐる。

【餘論】 火山の底に焼死しても君を待たうと、婦人の戀のひたすらなることを歌つてゐる。さういふ恐い谷の形容として、鶯の鳴くといふは、あまりに悠長に過ぎてゐるやうである。しかし、もともと婦人の作であるから、死の谷の恐しさなどは、人傳に聞いたことでもあらう。これに、山野には鶯の鳴くものとする自分の體驗とが結合して、かゝる句をも生じたのであらう。

松の花 花數にしも 我が夫子が 思へらなくに もとな咲きつつ

右件の歌は 時時に便使に寄せて來贈れり 一度に送りし所にあらざるなり

【原文】 麻都能波奈 花可受爾之毛 和我勢故我 於母敵良奈久爾 母登奈佐吉都追

右件歌者 時々寄便使來贈 非在二一度所送也

三九四
二三九四
右件歌者
は元曆校
本による

【口譯】 松の花は、花の數とも、あなた様が思つて居られないのに、よしなく咲いて居ります。

【釋義】 松の花 花として目立たず注目されない物を舉げて、作者自身の象徴としてゐる。なほ集中、松を擧げて、人を待つ意を表したものが多く、この歌も、松の花が咲くといふに、君を待つ心の盛なるよしを託してゐるものと思はれる。花數にしも 花の數にもで、シも助辭。思へらなくに 思つて居ないことであるに。花の數とも思つてゐないのに、花の内にも數へられぬに。もとな咲きつつ よしなく咲いてゐる。

【參考】 松に待つを懸けた例の二三。

梅の花咲きて散りなば吾妹子を來むか來じかと吾が松の木ぞ(卷十、一九二二)

君來ずは形見にせむと我が二人植ゑし松の木君を待ち出でむ(卷十一、二四八四)

わが宿の松の葉見つつ吾待たむ、はや歸りませ戀ひ死なぬとに(卷十五、三七四七)

○八月七日の夜 守大伴宿禰家持の館に集ひて宴する歌

今朝の朝明 秋風寒し 遠つ人 雁が來鳴かむ 時近みかも

右の二首は(一首略)守大伴宿禰家持の作

【原文】 八月七日夜 集于守大伴宿禰家持館宴歌

家佐能安佐氣 秋風左牟之 登保都比等 加里我來鳴牟 等伎知可美香物

右二首 守大伴宿禰家持作

【題意】 同年八月七日の夜、大伴家持の越中の官舎に開いた宴の歌。十三首ある中に、この一首を載せる。

三九四
七三九四

家佐は元
曆校本等
による

【口譯】今朝の朝明に、秋風が寒く吹いてゐる。遠方の人なる雁が来て鳴くべき時が近い故であらうか。

【釋義】今朝の朝明 今朝の夜の明け方に。アサケはアサアケで、朝になる時をいふ。遠つ人 遠方の人ので、雁は遠くから来るから云ふ。時近みかも 時が近き故か。雁の鳴くべき時が近づいたからかの意。

【餘論】雁を、遠い人と、人のやうに云つてゐるのがおもしろい。霍公鳥を、もつ人といふのと、相對すべき語である。もつ人は、舊人、むかしなじみの人の意。もつ人ほとときすをやめづらしみ今や汝が来る戀ひつつ居れば」(卷十、一九六二) なほ次の歌によれば、もつ人といふは、霍公鳥の鳴く聲によつたものであらう。「ほととぎすなほも鳴かなむ、もつ人かけつつもとな吾を哭し泣くも」(卷二十、四四三七)

○大目秦忌寸八千島の館に宴する歌一首

奈吳の海人の 釣する船は 今こそは 船柁打ちて あへて榜ぎ出ぬ

右館の客屋は 居ながら蒼波を望む 仍りて主人 この歌を作れり

【原文】大目秦忌寸八千島の館宴歌一首

奈吳能安麻能 都里須流布禰波 伊麻許曾婆 敷奈太那宇知氏 安倍氏許藝泥米

右館之客屋居望蒼波 仍主人作此歌也

【題意】同じころ、越中大目秦八千島の館に宴した時の、主人八千島の歌。大目は、國の役人中、守、介、椽、目の順で、上から四番目に當る。

【口譯】奈吳の海人の釣をする船は、今こそは、船柁を取りつけて、進んで榜ぎ出るであらう。

六三九五
宇知氏、
安倍氏、
蒼波、主
人並に
元曆本校

【釋義】奈吳の海人の 奈吳は、越中の國府に近き海邊の地名。船柁打ちて フナダナは、船の舷の上に、更に取り付ける板。船を丈夫にし、浪のうち入るを防ぎ、又舟子どもの歩行に便にする板。これをうちては、船を堅固にしての意。これの無い舟を、棚無し小舟といふ。あへて榜ぎ出ぬ 押して榜ぎ出るであらう。上にコンがあるから、出めと受けてゐる。

○放逸せる鷹を思ひ 夢に見て感悦して作れる歌一首并に短歌

大君の 遠の御門ぞ み雪降る 越と名に負へる 天さかる 鄙にしあれば 山高
み 河とほじろし 野を廣み 草こそ茂き 鮎走る 夏の盛と 鳥つ鳥 鶉養が伴
は 行く河の 清き瀬ごとに 簞さし なづさひ上る 露霜の 秋に至れば 野も
多に 鳥多集けりと ますらをの 伴誘ひて 鷹はしも 數多あれども 矢形尾の
我が大黒に大黒は蒼鷹の名なり 白塗の 鈴取り附けて 朝鴉に 五百つ鳥立て 夕鴉に 千
鳥踏み立て 追ふ毎に 免すことなく 手放れも 還來もか易き これを除きて
又はあり難し さ竝べる 鷹は無けむと 情には 思ひ誇りて 笑ひつつ 渡る間
に 狂れたる 醜つ翁の 言だにも 吾には告げず との曇り 雨の降る目を 鳥
狩すと 名のみを告りて 三島野を 背向に見つつ 二山の 上飛び越えて 雲隠
り 翔り去にきと 歸り來て 咳れ告ぐれ 招くよしの そこに無ければ 言ふす
べの たどきを知らに 心には 火さへ燃えつつ 思ひ戀ひ 息衝き餘り けだし

いては、又と有るまい、竝ぶべき鷹はないであらうと、心中には思ひ誇つて、喜んで日を送る間に、氣違ひの馬鹿親爺が、一言も自分には告げないで、空かき曇つて雨の降る日を、鷹狩をする、名ばかり云ひ出して、その鷹は、三島野を斜に見ながら、二山の上を飛び越えて、雲に隠れて飛んで行つたと、歸つて来て、咳をしつつ申したので、招く手段が無いから、云ひ出づべき方も無く、心には火さへ燃えて、その鷹を思ひ戀ひ、嘆息してもなほ足らず、若しも逢ふこともあるかと、山のあちらこちらに、鳥網を張り番人を据えて、神の社に、鏡を倭文布に取り添へて、祈誓をして待つてゐる時に、嬢子が夢に告げることには、あなたの戀ふるその優れた鷹は、松田江の濱を暮し、鯛を取る氷見の江を過ぎて、多古の島を飛び廻り、葦鴨の群居してゐる舊江に、一昨日も昨日も居ました。近いならば今日二日許、遠いにしても七日のうちは過ぎますまい。歸つて來ませうから、わが君よ、懇切にお慕ひなされますなど、この時しも告げたことである。

【釋義】大君の遠の御門ぞ 天皇陛下の遠國の御門戸であるぞ。(一八一頁参照)。み雪降る ミは接頭語。雪の降ると、越の國の習性を叙して枕詞としてゐる。越と名に負へる コシは、北國の總稱。越と名に負ひ、持つてゐる。天ざる 枕詞。夷にしあれば ヒナは田舎。シは助辭。山高み 山が高さに。山高き故に。河とほじろし トホジロシは偉大、壯大、著明の意の形容詞。野を廣み 野が廣さに。草こそ茂き 草が茂くある。形容詞が、コソの結びにキ活を用ゐるのは古格である。段落。「おのが妻こそ常愛しき」(卷十一、二六五)。鳥つ鳥 鳥に居る鳥の意で、鶉の枕詞。鶉養が伴は 鶉養は、鶉を飼うて魚を漁する職のもの。伴は同類。簾さし 簾火をつけて。なづさひ上る。ナツサフは、強ひて行く意。水を涉つて難澁しつ上つて行く。段落。露霜の秋の景物を以つて、秋の形容としてゐる。野も多に 野も澤山に。鳥多集けりと スダクは、群聚すること。

ますらをの伴いざなひて 丈夫の友を誘つて。鷹はしも 鷹はの意を強く表してゐる。矢形尾の 尾の羽が矢の形をしてゐるのであらう。屋形尾、屋棟の形の羽となす説もある。吾が大黒に 本註に大黒は蒼鷹の名なりとある如く、大黒は鷹の名である。白塗の 銀を塗つた意で、鍍銀である。朝獲に 朝夕に獵することを、句を分つて、朝獵夕獵と叙してゐる。五百つ鳥立て イホツは鳥の数の多い形容。立ては、追ひ立てて鷹に捕らしめる意である。千鳥踏み立て 千鳥は、こゝでは、鳥の数の多いこと、朝夕の獵に、澤山の鳥を追ひ立てるといふことを、以上句を分つて記してゐる。免すことなく 鷹が、追ひ立てた鳥を免すことなく捕へるのである。手放れも 鷹が、鳥を見て、飼主の手を放れて攻撃に行くをいふ。還來もか易き ヲチは、もとの所、すなはち主人の手に還り來ること。もとに返る意の動詞ヲツの名詞法。か易きのカは接頭語。たやすいに同じ。手放れも還來も容易であるの意である。さ並べる サは接頭語。匹敵する。狂れたる たわけた、ふざけた、正氣でない。醜つ翁の ショツは、翁を罵つていふ。醜つ翁がの意。との疊り 天が一面にかき曇つて。鳥狩すと トガリは鷹狩。名のみを告りて 名ばかり云つて。名は鳥狩といふが、ろくなことも出來まい、名前ばかりのことだらうと、嘲る語氣である。三島野を 以下歸つて來て云ふ詞。射水郡の地名。背向に見つツ ガヒは、後方、斜の方。二山の上飛び越えて 原文もと二山登妣古要底とあつて、フタカミノヤマトビコエテと訓じ、越中の國の二上を飛び越えての意としてゐた。今、古本に二山上登妣古要底とあるに従ふ。二つの山の上を飛び越えてである。咳れ告ぐれ シハブレは、咳きをする。この句は、條件法で、咳れ告ぐれば云々と、下の句に續く意であつて、段落では無い。源氏物語明石の卷に「しはぶる人」招くよしの ヲクは招く。「月立ちし日より招きつづらぬび待てど來鳴かぬ雀公鳥かも」(卷十九、四一九六)。招く由縁の、招く手段

の。鷹を招く手だてである。たどきを知らに。タドキは、手の著けどころ。知らには、知らないの。火さへ燃えつつ。腹立たしさに心が燃え立つやうなのをいふ。息衝き餘り。イキツキは、太息をつくこと。餘りは、太息をついても、なほ遺憾とする念の餘るをいふ。嘆息すれども足らずに。けだしくも。若しや、推量するに。あしひきの。本來山の枕詞であるが、こゝでは、直に山の意に用ゐてゐる。アシヒキが、山が足を引いてゐる意で、山容の描寫であることを語つてゐるものかも知れない。さすれば裾山とでも譯すべきか。彼面此面に。ヲテモはヲチオモで、あちらの面。コノモはこちらの面。足柄の彼面此面にさす羅のなる間しづみ兒ろ我紐解く(卷十四、三三六一)。「筑波嶺の彼面此面に守部すゑ母い守れども魂ぞ逢ひにける」(同、三三九三)。鳥網張り。トナミは、鳥を捕る網。守部を居ゑて。モリベは番人。番人を居させて。ちはやぶる。神の枕詞。照る鏡。明に磨いである鏡。倭文に取り添へ。シヅは日本風の織物。鏡を倭文に添へて神に奉るのである。夢に告ぐらく。夢に嬢子が見えて告げることは。汝が戀ふる。以下夢の嬢子の言。汝は家持をさす。その秀つ鷹は。その優れた鷹は。松田江の。入江の名。鰯漁る。ツナシは魚の名。コノシロの類といふ。氷見の江過ぎて。氷見の入江。射水郡。多古の島。布勢の湖の中にある島の名であらう。葦鴨の。鴨は葦邊に居る習性のものであるからいふ。鶴を葦鶴といふやうなものである、多集く舊江に。舊江は地名。入江の名。近くあらば。日が近いならば。今二日だめ。ダメは、原文もと太末とあつてダミと讀んでゐた。ダミは、眞淵、北國の俗言で、二日ばかりの意だと云つてゐる。今元曆校本等に太米とせるに従ふ。留む、溜むの意の動詞の命令法で、連濁となつたものであらうか。今二日猶豫せよ、待ての意かと思はれるが、なほ後考を俟つべきである。以下の數句は「久にあらば今七日ばかり、早くあらば今二日ばかり、あらむとぞ君は聞しし、勿戀ひそ吾妹」(卷十三、

三三一八)によつて歌つてゐる。過ぎめやも。反語法。過ぎようや過ぎはしないの意。懇に。切に。ひたふるに。いまに告げける。原文、伊麻爾都氣都流とあるが、考に、麻は米の誤として、夢に告げつるとし、以來これに従つてゐる。しかしイマといふ語も別にあるので、必しも誤とするには及ぶまい。そは、「向つ尾の若楓の木下枚取り花待つい間に咲きつるかも」(卷七、一三五九)、「青柳の糸のくはしさ、春風に亂れぬい間に見せむ兒もがも」(卷十、一八五二)の歌の如きイマである。このイマは、イは接頭語、マは間であらうが、イマと熟して、唯この時、今の間の意に用ゐてゐるによれば、用言の連體形を受けないものも存して然るべきである。而してこれすなはち、「今」の語原を爲すものであらう。然らば正しく今の時に告げたことぞと結んだのである。

二四〇一

矢形尾の 鷹を手に据ゑ 三島野に 獵らぬ日普く 月ぞ經にける

【原文】 矢形尾能 多加乎手爾須惠 美之麻野爾 可良奴日麻爾久 都奇曾倍爾家流

【題意】 前の歌の反歌であるが、特に反歌とは、ことわつてゐない。

【口譯】 矢形尾の鷹を手に据ゑて、三島野に獵をしない日のみであつて、月を経たことである。

【釋義】 鷹を手に居ゑ 鷹を拳に居させる。鷹狩に際しての行動である。獵らぬ日普く マネクは、あまねくに

同じ。獵らぬ日のみで、獵の日とは無いことをいふ。

七四〇一

二上の 彼面此面に 網さして 吾が待つ鷹を 夢に告げつも

【原文】 二上能 乎氏母許能母爾 安美佐之豆 安我麻都多可乎 伊米爾都氣通母

一六 大伴 家持

佐之豆は
元曆校本
等による

【口譯】 二上山のあちらこちらに網を張つて、自分の待つ鷹を夢に告げたことである。
【釋義】 二上の 二上は山の名。網として 鳥網を張りわたして。

四〇一
之比爾豆
は元曆校
本等によ

松反り しひにてあれかも さ山田の 翁が其の目に 求め逢はずけむ

【原文】 麻追我弊里 之比爾豆安禮可母 佐夜麻太乃 乎治我其日爾 母等米安波受家牟

【口譯】 鷹が松反りで、悩んでゐるからか、山田の老人が、その日に求め逢はずかつたのであらう。

【釋義】 松反りしひにてあれかも 古來諸説のあるところである。鷹の、鳥屋に居て、夏の末から冬の初にかけ、羽毛の抜けかはそのを、鳥屋がへりといひ、山にゐてこれをするを山がへりといふから、松に居て羽毛の抜け代りをするのを、松がへりといふのであらう。シヒは、目しひ、耳しひのシヒに同じで、故障のあるの意であらう。(橋本進吉氏談)。シヒニテアレカモは、故障が起つてあればにやの意。松反りしひてあれやは、三粟の中上り來ぬ麻呂といふ奴(卷九、一七八三)。さ山田の サは接頭語で、鷹飼の山田君麻呂をいふ。求め逢はずけむ 逸した鷹を求めて逢はずかつたのであらうと、推量する語法。

五〇一

情には ゆるぶことなく 須加の山 すがなくのみや 戀ひ渡りなむ

右 射水の郡古江の村に 蒼鷹を取り獵たり 形容美麗にして 雉を驚ること 群に秀でたり 時に養吏山田史君麻呂 調試節を失ひ 野獵候に乖く 搏風の 翅高く翔りて雲に匿れ 腐鼠の餌呼び留むるに驗靡し 是に羅網を張り設けて

翹、特は
元曆校本
等による
等略解
に神は元
曆校本等
による

非常を窺ひ 神祇に奉幣して不虞を恃みき 粵に夢の裏に娘子あり 喻して曰
ひけらく 使君苦念を作して 空しく精神を費すこと勿れ 逸放せる彼の鷹
獲り得むこと近からむかと曰ひき 須臾にして覺寤し 懷に悦あり 因りて恨
を却くる歌を作りて 式ちて感信を旌はず 守大伴宿禰家持九月二十六

【原文】 情爾波 山流布許等奈久 須加能夜麻 須可奈久能未也 孤悲和多利奈牟

右 射水郡古江村取獲蒼鷹 形容美麗 鷲雉秀群也 於時養吏山田史君麻呂 調試失節 野獵乖候 搏風之翅 高翔匿雲 腐鼠之餌 呼留靡驗 於是 張設羅網 窺乎非常 奉幣神祇 恃乎不虞 也 粵以夢裏有娘子 喻曰 使君勿作苦念 空費精神 放逸彼鷹 獲得未幾矣哉 須臾覺寤 有悦於懷 因作却恨之歌 式旌感信 守大伴宿禰家持 九月二十六日作也

【口譯】 心には緩ぶことなく、樂まずにのみか、戀うて日を経ることであらう。

【釋義】 ゆるぶことなく 思ひ緩めることなく、忘れ怠ることなく。須加の山 越中の國射水郡にある山。正倉院文書、東南院參櫃二十八、越中國諸郡庄園惣券第一(天平實(大日本古文書、四ノ三七五)の中に、須加村、須加山の名見え、又同御藏の開田圖の一葉に、須加山を記したものがあつた。すがなくのみや スガナクは、古義に、字鏡に嗜嘯心中不悦樂貌、坐歎貌、須加奈加留、催馬樂廬垣に、菅の根のすかなきことをわれはきくかなの二例を擧げてゐる。幸く悲しくある意の形容詞である。ヤは疑問の辭。

〇礪波の郡雄神河の邊にて作れる歌一首

四〇二 河伯は元
曆校本等
による。

雄神河 くれなゐにほふ 嬢子らし 葦附あしつき水松みづまつの類 探ると 瀬に立たすらし

【原文】 礪波郡雄神河邊作歌一首

乎加未河伯 久禮奈爲爾保布 乎等賣良之 葦附水松等流登 湍爾多多須良之

【題意】 以下六首は、天平二十年の春の出舉によつて、諸郡を巡行した時の大伴家持の作で、この一首は礪波郡の雄神河のほとりで作つた歌である。雄神河は、今、庄川といふ川の古名。出舉とは、穀物や錢などを貸して利を取ること、官廳として、これを爲したのである。

【口譯】 雄神河に紅の色が映えてゐる。これは嬢子たちが瀬に立つて葦附を取つてゐるやうである。

【釋義】 くれなゐにほふ 嬢子たちの赤裳が、河水に映じてゐることを叙してゐる。嬢子らし シは助辭。葦附 採ると アシツキは、本註に水松の類とある。水中の石などに附著して生ずる海苔の類である。瀬に立たすらし ランは根據ある推量の助動詞であるが、瀬に立つは實際見るところで、葦附を採るならむとその行動を推量してゐる。

〇 婦負の郡の鷓坂河の邊にて作れる歌一首

鷓坂河 渡る瀬多み この我が馬の 足搔の水に 衣ぬれにけり

【原文】 婦負郡鷓坂河邊作歌一首

宇佐可河泊 和多流瀬於保美 許乃安我馬乃 安我枳乃美豆爾 伎奴奴禮爾家里

【題意】 同じき出舉の折、婦負郡の鷓坂川の邊で作つた歌。鷓坂川は、今の神通川の上流である。

四〇二 鷓坂河邊
は元曆校本
による

三 四〇二

【口譯】 鷓坂川は、渡る瀬が多いので、このわが馬の足搔をする飛沫に、衣が濡れたことである。

【釋義】 渡る瀬多み 渡らねばならぬ瀬が多さに。この我が馬の コノは、我が馬を強く指定してゐる。足搔の水に アガキは、馬が足を働かせること。それによつて激する水に。

【參考】 類歌

武庫川の水を急げみ赤駒の足搔く激に濡れにけるかも (卷七、一一四二)

〇 鷓を潜ぐる人を見て作れる歌一首

婦負河の 早き瀬ごとに 篝さし 八十伴の男は 鷓河立ちけり

【原文】 見三潜、鷓人、作歌一首

賣比河波能 波夜伎瀬其等爾 可我里佐之 夜蘇登毛乃乎波 宇加波多知家里

【題意】 同じ時に、婦負河の邊で、鷓飼をする人を見て詠んだ歌。婦負川は、すなはち神通川である。

【口譯】 婦負川の早い瀬ごとに、篝火をさし照して、多くの官人たちは、鷓飼をしてゐることだ。

【釋義】 篝さし 篝火を照して。八十伴の男は トモノヲは、部屬の男子。官仕の人々。ヤツは、その数の多いことを示す。鷓河立ちけり 鷓河は、鷓を用ゐて、川に魚を漁ること。鷓飼を催すを、鷓河を立つといふ。

〇 新河の郡にて延槻川を渡る時の歌一首

立山の 雪し來らしも 延槻の 河の波瀬 鏡浸かすも

四〇二

【原文】新河郡渡延槻川一詩歌一首

多知夜麻乃 由吉之久良之毛 波比都奇能 可波能和多理瀬 安夫美都加須毛

【題意】同じ時に、新河郡で、延槻川を渡つた時の歌。延槻川は、今早月川といふ川である。

【口譯】立山の雪が解けて来ると思はれる。延槻の川の渡り瀬の水が、鏡につくことである。

【釋義】雪し来らしも 外に、雪敷くらしも、雪し消らしも等の諸説がある。雪しのシは助辭。雪が解けて、流れ來たと思はれるの意。河の渡瀬 河の渡り得る瀬の意。鏡浸かすも 鏡は馬具で、足を懸けるもの。浸かすは、令浸の意で、水に浸らせる。雪消で水量多く、瀬が激して、水が鏡につくのである。

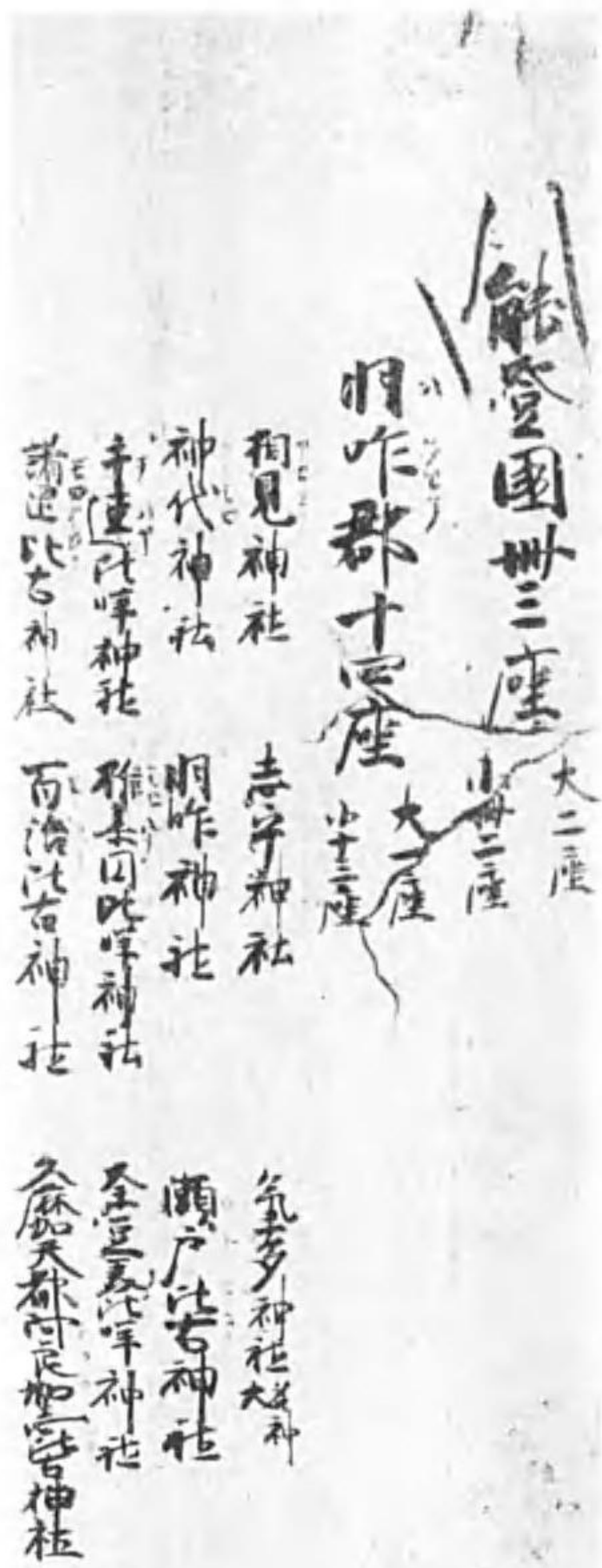
○氣太の神宮に赴き參ると 海邊を行きし時 作れる歌一首

之乎路から 直越え來れば 羽咋の海 朝なぎしたり 船楫もがも

【原文】赴參氣太神宮 行海邊之時 作歌一首

之乎路可良 多太古要久禮婆 波久比能海 安佐奈藝思多理 船楫母我毛

【題意】同じ時、能登の國羽咋郡の氣太の神宮に參詣し、海邊を行つた時の作。前の歌までは、國府より東方の地を詠じ、以下は國府より西北に當るから、一旦國府に歸つて出直したものであらう。氣太神宮、原文もと氣比大神宮とあるが、氣比は越前の國であるから、こゝには適はないので、古本によつて訂正する。延喜式卷第十神名帳下に、能登の國羽咋郡に、氣多神社名神大とある社。能登の國は、奈良朝の初に、一國として立てられたが、天平十三年に越中に併せたので、この時代は、越中の管下である。



延喜式卷第十古鈔本

【口譯】之乎へ行く路から、ひたすらに越えて來れば、羽咋の海は、朝風してゐる。船や楫が欲しいことである。

【釋義】之乎路から 之乎も地名で、羽咋郡にある。その之乎に行く山路を越えて行くのである。ただ越え來れば 他に行かずに、ひたみに山を越えてくれば。羽咋の海 羽咋郡の海。船楫もがも 海上が平穩であるから、船楫もあらば漕ぎ出でようである。

○珠洲の郡より發船して治布に還りし時 長濱の灣に泊てて 月光を仰ぎ見て作れる歌一首

珠洲の海に 朝びらきして 漕ぎ來れば 長濱の灣に 月照りにけり

右件の歌詞は 春の出擧に依りて諸郡を巡行す 當の時當の所 屬目して作る

大伴宿禰家持

【原文】 從_二珠洲郡_一發船還_二治布之時_一 泊_二長濱灣_一 仰_二見月光_一 作歌一首

珠洲能宇美爾 安佐妣良伎之豆 許藝久禮婆 奈我波麻能宇良爾 都奇氏里爾家里

右件歌詞者 依_二春出舉_一 巡_二行諸郡_一 當時當所屬目作之 大伴宿禰家持

【題意】 同じ時、珠洲の郡から船を出して、治布に歸つた時に、能登の郡の長濱の灣に泊して、月の光を仰ぎ見て作つた歌。珠洲の郡は、今能登に屬してゐる。治布は、所在未詳。

【口譯】 珠洲の海に、朝出船をして漕いで來れば、長濱の灣に至つて月が照るに至つた。

【釋義】 朝びらきして 朝、出航をするをいふ。朝船出をして。月照りにけり 長濱灣に至つて夜に入つたことを、月を見て詠嘆の調子に歌つてゐる。

○酒を造る歌一首

中臣の 太祝詞 言ひ祓へ 贖ふいのちも 誰がために汝

右は 大伴宿禰家持作

【原文】 造_二酒歌一首

奈加等美乃 敷刀能里等其等 伊比波良倍 安賀布伊能知毛 多我多米爾奈禮

右 大伴宿禰家持作之

【題意】 天平二十年の春、酒を造る時の歌。

治布、見、妣、良、伎、之、豆、
仰、佐、安、伎、之、里、所、當、
元、に、本、に、並、る、は、曆、よ、
る。

【口譯】 中臣氏の稱へる祝詞を稱へて、不淨を祓ひ、贖ふ命は、誰の爲にとであらうか、そなたは。

【釋義】 中臣の太祝詞 中臣氏は、天の兒屋根の命の子孫で、代々神事を司つてゐる。その氏の人の稱ふる祝詞の義。フトは祝詞の美稱。ノリト、又はノリトゴトは、神の名によつてする宣言が本義で、後に神に奏する詞をいふやうになつた。造酒の時にする、中臣の祝詞は、今傳はらない。下文により推すに、一切の不淨罪過を排して、酒を神聖ならしめる意のものであらう。言ひ祓へ 祝詞を云ひて、不淨や罪過を拂ひ捨てるのである。祓へは、下二段活。贖ふ命は 人の命を失ふは、不淨や罪過にもとづく爲すので、これを祓ひ捨て清める爲に、財物を出し祝詞を稱へて命を贖ふのである。この財物を、ハラヘツモノといふ。財物を出し祝詞を稱へるによつて、罪を赦されて、生命を續ける意である。一方に酒を清淨にし、一方にその酒の作り主たる人の命を盛にする爲に、祝詞が稱へられるものである。作り主は、この歌では家持その人を指すであらう。誰が爲に汝 さて贖ひ得たる命は、誰の爲にとであるか、汝よと、みづから問ふ形式である。汝は、作者自身を、客觀してゐる。

【餘論】 酒を造ることは神業と考へられてゐたので、造酒には、神を招するのである。延喜式卷第四十、造酒司の條に、「祭神九座、二座酒彌豆男神、酒彌豆女神、並從五位上、四座竈神、三座從五位上大邑刀自、從五位下小邑刀自、次邑刀自」とある。なほ次の歌の如き、酒を醸すことを神業とする思想を傳へてゐる。

この御酒は我が御酒ならず、大和なす大物主の、醸みし御酒、幾久幾久（日本書紀）
この御酒は我が御酒ならず、酒の神常世に坐す、石立たす少御神の、神壽き壽き狂ほし、豐壽き壽きもとほし、
獻り來し御酒ぞ、濁さず飲せささ（古事記）

前に出した市原の王の、酒を打つ歌の如きも、同じく酒を祝つて、併せてこれを飲む者をも祝ふ意である。この家持の造酒歌も、同様の思想から出た歌で、誰の爲にと命を祝ふぞ、すなはちわが愛人の爲であると爲すものである。

【参考】類想

玉久世の清き河原に身みままして齋いはふ命は妹が爲こそ（卷十一、二四〇三）
時つ風吹飯ふかひの濱なみに出いで居ゐつつ贈たまふ命は妹が爲こそ（卷十二、三二〇一）
ちはやぶる神の御坂みさかに幣ぬさまつり齋いはふ命は母父おとちちが爲（卷二十、四四〇二）

○二十五日 布勢の水海に往く道中 馬上の口號二首

濱邊より 我がうち行かば 海邊より 迎へも來ぬか 海人の釣舟

【原文】 二十五日 往布勢水海道中 馬上口號二首

波萬部余里 和我宇知山可波 宇美邊欲利 牟可倍母許奴可 安麻能都里夫禰

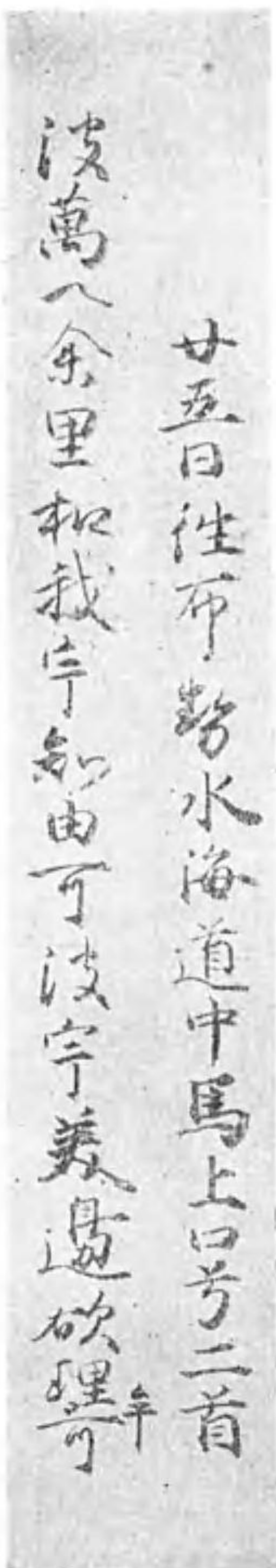
【題意】 天平二十年二月、左大臣橘諸兄の使として、田邊福麻呂が越中に下つたので、二十五日に越中守大伴家持が、これを案内して布勢の水海に見物に往く途上、馬の上で口號くごんだ歌二首。家持の作である。

【口譯】 濱邊からわが行くならば、海人の釣船は、海邊から迎へに來ないか。

【釋義】 我がうち行かば ウチは、行くの意を強めるだけに添へる詞。うち添ふ、うち見る、うち笑ふなどの例。

【餘論】 この歌の初句、濱邊よりの原文、波萬部余里の部を、元曆校本に、平假名の「へ」の字のやうに書いて

ゐる。或はこれが却つて、もとの形であつて、集中にも、既に略體假字を用ゐた例となるのではなからうかと疑はれるところである。なほ次の歌の支見我の支字も、伎の字の偏を略したものではなからうか。これは、通行本には伎としてゐるが、元曆校本のみならず、類聚古集、西本願寺本、神田本、大矢本、京都帝國大學本等にも支に作つてゐる。へは又元曆校本にこの後に出る教諭史生尾張少咋歌の中、又他卷の左註等に見え、支は他にも多く見えてゐる。



元曆校本

沖邊より 満ち來る潮の いや増しに 我が思ふ君が 御船みふねかも彼

【原文】 於伎敵欲里 美知久流之保能 伊也麻之爾 安我毛布支見我 彌不根可母加禮

【口譯】 沖邊から満ち來る潮のやうに、いや増しにわたくしの思ふ、あなたの御船でありませうか、あれは。

【釋義】 沖邊より満ち來る潮の 以上は、いや増しにと云はむが爲の序である。我が思ふ君が 君は、田邊福麻呂をさしてゐるであらう。

【餘論】 以上の二首は、作者を記してない。卷十七以下家持の作には往々、その名を記さず、又この二首は目錄

五〇四
支見我は
元曆校本
等による

に家持の作としてゐるので、今それに従つておくが目錄は後のものであるから確證にはならない。或は家持と福麻呂が、馬上で詠み交した歌かとも考へられる。その場合、いづれが家持かはまた疑問である。海人の釣舟を見て、家持が、迎へにも來ぬかといひ、福麻呂があれすなはち君の御舟かと和したものであらうか。いづれにしても疑を存するところである。

○同じき月九日 諸僚 少目秦伊美吉石竹の館に會ひて飲宴す 是に主人 百合の花纒三枚を造り 豆器に疊ね置きて 賓客に捧げ贈る 各

此の纒を賦して作れる三首

あぶら火の 光に見ゆる 我が纒 さ百合の花の 笑まはしきかも

右の一首は 守大伴宿禰家持

【原文】 同月九日 諸僚會少目秦伊美吉石竹之館 飲宴 於時主人 造百合花纒三枚 疊置豆器 捧贈賓客 各賦此纒 作三首

安夫良火能 比可里爾見由流 和我可豆良 佐由利能波奈能 惠麻波之伎香母

右一首 守大伴宿禰家持

【題意】 天平感寶元年五月九日、越中の國の諸役人、少目秦石竹の館に會ひて酒宴を催した。時に石竹、百合の花纒三枚を作つて、立派な器に重ね置いて、賓客に捧げ贈つた。依つてこの纒を詠んで作つた歌。豆器は、萬葉集新考に、古代支那に行はれた禮器をいひ、日本の器をみやびやかに豆器と書いたのだといふ説がよい。天平

感寶元年は、天平二十一年の四月に改元して天平感寶元年としたのであるが、その七月には再改元して天平勝寶元年となつた。極めて短い間の年號である。

【口譯】 明るい燈火の光に見える、わたくしの花纒の、百合の花が、見るからに笑むべく感ぜられる。

【釋義】 あぶら火の 燈油を燃す照明は、明るく感ぜられてゐたので、特にこの語を用ゐたのである。我が纒 贈られた纒をいふ。纒は、花を輪にして頭に戴くもの。笑まはしきかも 心に笑むべくあるをいふ。花を見れば、心開けて、おのづから笑を含みてある意である。

○陸奥の國より金を出せるを賀詔書の歌一首并に短歌

葦原の 瑞穂の國を 天降り しらしめしける 皇祖の 神の命の 御代重ね 天
の 日嗣と しらし來る 君の御代御代 敷きませる 四方の國には 山河を 廣み
淳みと 奉る 御調寶は 數へ得ず 盡しもかねつ 然れども 吾が大君の 諸人
を 誘ひ給ひ 善き事を 始め給ひて 金かも 樂しけくあらむと 思ほして 下
惱ますに 鶏が鳴く 東の國の 陸奥の 小田なる山に 金ありと 奏し賜へれ
御心を 明らめ給ひ 天地の 神相うづなひ 皇祖の 御靈助けて 遠き代に か
かりし事を 朕が御世に 顯してあれば 食國は 榮えむものと 神ながら 思ほ
し召して もののふの 八十伴の雄を まつろへの むけのまにまに 老人も 女
童兒も 其が願ふ 心足ひに 撫で給ひ 治め給へば 此をしも あやに貴み 嬉

しけく 愈思ひて 大伴の 遠つ神祖の 其の名をば 大來自主と 負ひ持ちて
 仕へし官 海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大皇の 邊にこそ死なぬ
 顧みは 爲じと言立て 丈夫の 清き彼の名を 古よ 今の現に 流さへる 祖の
 子等ぞ 大伴と 佐伯の氏は 人の祖の 立つる言立 人の子は 祖の名絶たず
 大君に 奉仕ふものと 言ひ繼げる 言の職ぞ 梓弓 手に取り持ちて 劔大刀
 腰に取り佩き 朝守り 夕の守りよ 大君の 御門の守護 我をおきて また人は
 あらじと 彌立て 思ひし増る 大皇の 御言の幸の 一に云 聞けば貴みくしあれば 貴

【原文】 賀陸奥國出金詔書歌一首并短歌

多豆麻都流は元麻都
 校本に元麻都
 佐伯乃見

葦原能 美豆保國乎 安麻久太利 之良志賣之家流 須賣呂伎能 神乃美許等能 御代可佐禰 天乃日嗣等
 之良志久流 伎美能御代御代 之伎麻世流 四方國爾波 山河乎 比呂美安都美等 多豆麻都流 御調賣波
 可蘇倍衣受 都久之毛可禰都 之加禮騰母 吾大王能 毛呂比登乎 伊射奈比多麻比 善事乎 波自米多麻比
 且 久我禰可毛 多能之氣久安良牟登 於母保之豆 之多奈夜麻須爾 鷄鳴 東國能 美知能久乃 小田在山
 爾 金有等 麻宇之多麻散禮 御心乎 安吉良米多麻比 天地乃 神安比宇豆奈比 皇御祖乃 御靈多須氣豆
 遠代爾 可里之許登乎 朕御世爾 安良波之豆安禮婆 御食國波 左可延牟物能等 可牟奈我良 於毛保之
 賣之豆 毛能乃布能 八十伴雄乎 麻都呂倍乃 牟氣乃麻爾麻爾 老人毛 女童兒毛 之我願 心太良比爾
 撫賜 治賜婆 許已乎之母 安夜爾多敷刀美 宇禮之家久 伊余與於母比豆 大伴能 遠都神祖乃 其名乎婆
 大來自主登 於比母知豆 都加倍之官 海行者 美都久屍 山行者 草牟須屍 大皇乃 散爾許會死米 可散

麻都利余
 並に元麻都
 曆本校による

里見波 勢自等許等大豆 大夫乃 伎欲吉彼名乎 伊爾之敬欲 伊麻乃乎追通爾 奈我佐散流 於夜能子等毛
 會 大伴等 佐伯乃氏者 人祖乃 立流辭立 人子者 祖名不絶 大君爾 麻都呂布物能等 伊比都雅流 許
 等能都可左會 梓弓 手爾等里母知豆 劔大刀 許之爾等里波伎 安佐麻毛利 山布能麻毛利余 大王能 三
 門乃麻毛利 和禮乎於吉豆 且比等波安良自等 伊夜多豆 於毛比之麻左流 大皇乃 御言能左吉乃一云 聞
 者貴美一云 貴久 之安禮婆

【題意】 天平勝寶元年（天平二十一年）二月、陸奥の國から始めて黄金を貢した。四月に、天皇（聖武天皇）東
 大寺に幸して盧舍那佛の像の前殿に幸して、佛に對して詔を下し、續いて石上乙麻呂をして、臣下に對して詔
 を賜うた。これらの詔書は、黄金の我が國から始めて出たことを嘉せられた趣であるが、この臣下に賜へる詔
 書を拜して、賀して大伴家持の作つた歌がこれである。詔書中、大伴氏に及ばれた節があるので、殊に感激に
 堪へなかつたのであらう。今續日本紀によつて、この詔書の全文を次に載せる。原文は宣命書きであるが、今
 便宜に従つて漢字交り文に書き下すこととした。

現つ神と天の下知らしめす倭根子天皇が詔旨らまと宣り賜ふ大命を、親王諸王諸臣百の官の人等、天の下の公
 民、衆聞し食さへと宣る。高天の原ゆ天降りましし天皇が御世を始めて、中今に至るまでに、天皇が御世御世
 天つ日嗣と高御座に坐して治め賜ひ恵み來る、食國天の下の業ととも、神ながらも念しめさくと宣り給ふ大命
 を衆聞し食さへと宣る。かく治め賜ひ恵み來る天つ日嗣の業と、天皇朕が御世に當りて坐せば、天地の心を勞
 しみ重しめ、辱み恐み坐すに、聞し食す食國の東の方陸奥の國の小田の郡に、金出でたりと奏して進れり。
 此を念せば、種種の法の中には、佛の大御言し、國家護るが爲には、勝れたりと聞し召して、食國天の下の諸

國に、最勝王經を坐せ、盧舍那佛作り奉るとして、天に坐す神、地に坐す神を祈禱奉り、掛けまくも畏き、遠つ我が皇天皇の御世治めて拜み仕へ奉り、衆人を誘ひ奉て、仕へ奉る心は、禍息みて善く成り、危き變りて全く平けむと念して仕へ奉る間に、衆人は成らじかと疑ひ、朕は金少けむと念し憂ひつつ在るに、三寶の勝れて神しき大御言の驗を蒙り、天に坐す神、地に坐す神の相うづなひ奉り、幸はへ奉り、又天皇の御靈たちの、恵び賜ひ撫で賜ふ事に依りて顯し示し給ふ物ならしと念し召せば、受け賜はり貴び、進むも知らに退くも知らに、夜日畏恐り念せば、天の下を撫で恵び賜ふ事は理に坐す、君の御世に當りて在るべきものを、拙くたづかなき朕が時に顯し示し賜へれば、辱み愧しみなも念す。是を以ちて、朕一人やは、貴き大瑞を受け賜らむ。天の下共に頂き受け賜り歡ばしむるし、理なるべしと、神ながらも念し坐してなも、衆を恵び賜ひ、治め賜ひ、御代の年號に字加へ賜はくと宣り賜ふ天皇が大命を、衆聞し食さへと宣る。辭別きて宣り賜はく、大神の宮を始めて、諸の神たちに、御戸代奉り、諸の祝部治め賜ふ。又寺寺に墾田の地許し奉り、僧綱を始めて衆の僧尼、敬ひ問ひ治め賜ひ、新に造れる寺の、官寺と成すべきは、官寺と成し賜ふ。大御陵守り仕へ奉る人等、一二治め賜ふ。又御世御世に當りて、天の下奏し賜ひ國家護り仕へ奉る事の勝れたる臣たちの侍ふ所には、表を置きて、天地と共に人に侮らしめず、穢さしめず治め賜ふと宣り賜ふ大命を、衆聞し食さへと宣る。又天つ日嗣高御座の業と坐す事は、進みては掛けまくも畏き天皇が大御名を受け賜り、退きては母大御祖の御名を蒙りてし、食國天の下をば撫で賜ひ恵び賜ふとなも、神ながらも念し坐す。是を以ちて、王たち、大臣の子等、治め賜ふいし、天皇が朝に仕へ奉り、母に仕へ奉るにはあるべし。加以掛けまくも畏き近江の天津の宮に大八島國治ろしめしし天皇が大命として、奈良の宮に大八洲國知ろしめしし我が皇天皇と、御世を重ねて朕に宣り給ひしく、

大臣の御世重ねて、明き淨き心以ちて仕へ奉る事に依りてなも、天つ日繼は、平けく安く聞し召し來る。此の辭忘れ給ふな棄て給ふなど、宣り給ひし大命を、受け賜り恐まり、汝たちを恵び賜ひ治め賜はくと宣り賜ふ大命を、衆聞し食さへと宣る。又三國真人、石川朝臣、鴨朝臣、伊勢大鹿首部は、治め賜ふべき人としてなも、簡び賜ひ治め賜ふ。又縣犬養、橘の夫人の、天皇が御世重ねて、明き淨き心以ちて仕へ奉り、皇朕が御世に當りても、怠り緩むことなく、助け仕へ奉り、加以、祖父大臣の殿門荒し穢すことなく守りつゝ在らしし事、勤しみうむかしみ忘れ賜はずとしてなも、孫等一一治め賜ふ。又大臣として仕へ奉らへる臣たちの子等、男は仕へ奉る狀に隨ひて、種種治め賜ひつれども、女は治め賜はず。是を以ちて念せば、男のみ父の名負ひて、女は云はれぬ物にあれや。立ち雙び仕へ奉るし、理なりとなも念す。父がかくしまに在れと念ひて、趣け教へけむ事過たず失はず、家門荒さずして、天皇が朝に仕へ奉れとしてなも、汝たちを治め賜ふ。又大伴佐伯の宿禰は、常も云ふ如く、天皇が朝守り仕へ奉る事、願なき人等あれば、汝たちの祖どもの云ひけらく、

海行かば 水漬く屍

山行かば 草生す屍

大君の 方にこそ死なめ

和には死なじ

と云ひ來る人等となも聞し召す。是を以ちて、遠つ天皇の御世を始めて、今朕が御世に當りても、内の兵と念し召し遣はず。故是を以ちて、子は祖の心なすいし子にはあるべし。此の心失はずして明き淨き心以ちて仕へ奉れとしてなも、男女併せて一一治め賜ふ。又五位已上の子等治め賜ふ。六位已下に冠一階上げ給ひ、東

の大寺の人等に二階加へ賜ひ、正六位上には子一人治め賜ふ。又五位已上、及皇親の年十三已上、位无き大舍人等、諸の司仕丁に至るまで、大御手物賜ふ。又高年人等治め賜ひ、困乏しき人恵み賜ひ、孝養ある人、其の事免し賜ひ、力田治め賜ふ。罪人赦し賜ふ。又書生治め賜ひ、物知人等治め賜ふ。又金を見出でたる人、及陸奥の國司、郡司、百姓に至るまでに治め賜ひ、天下の百姓、衆を撫で賜ひ、恵び賜はくと宣り賜ふ。天皇が大命を、衆聞し、食さへと宣る。

【口譯】この日本國を、天から降つて御統治遊ばした、御祖先の尊き天皇の、代を重ねて、天皇の御位とお治め來る御代御代に、領有遊される四方の國には、山や河の廣く豊なる故にと、獻上する御調の寶は、數へ得ず盡しも出來ませぬ。然しながら、吾が天皇陛下の諸人を誘導し給ひ、善い事をお治めになつて、黄金こそ樂しくあるであらうかと、お考へになつて、御心配あらせられたに、あたかも東方の國なる陸奥の國の小田にある山に黄金が御座いますと、奏上致しましたから、御心を明るくおさせになり、天地の神も納受し、皇祖の御靈が助けて、遠き世に斯くあつた事を、朕の御代に顯してあるから、この日本國は榮えるであらうと、神様ながら思し召して、武士の多くの人々を、統御遊ばすに伴つて、老人も女童も、それ／＼の望む心を満足させて撫育遊ばされますから、このことが、誠に貴き故に、いよく嬉しく思つて、大伴の遠い祖先の、大來目主と名を負つて仕へた長官が、海を行くなら、水に漬く屍とならう、山を行くなら草生す屍とならう、天皇陛下の邊にこそ死なう、躊躇はすまいと言ひ立て、勇士の清きその名前を、古よりこの現代まで傳へ來た祖先の子孫であるぞ。大伴氏と佐伯氏とは、人の祖先の立てる家憲に、人の子は祖先の名を絶たすに、天皇陛下に奉仕するものと言ひ繼いだ言葉通りの長官であるぞ。梓弓を手に取り持つて、劍大刀を腰に取り佩いて、朝夕の守りに、天

皇陛下の御門の守護は、我を措いては、また人はあるまいと、一層氣を立てて志が増つて來ます、天皇陛下の勅語のお詞を聞けば貴くありますから。

【釋義】葦原の瑞穂の國を 海上からこの日本國を望み見て、葦原の葦の瑞々しく榮えてゐる國の意である。神の命の ミコトは尊稱。神の御方の意。天の日嗣と 天皇の御位としての意。しらし來る 統治し來る。敷きませる 御座として占有遊ばされる。廣み淳みと 山川の廣きが故、又淳きが故と。淳みは、豊大であるが故に。御調寶は 貢物の寶は。盡しもかねつ カネツは得ざる意。善き事を初め給ひて 盧舍那佛を作り給ふことをいふであらう。金かも クガネはコガネに同じ。クは黄色の意。カモは、疑問詠嘆の助辭。樂しけくあらむと 人を樂ましむるに足るであらうとの意。原文は、元曆校本には能の字無く、多之氣久安良牟登に作つてゐる。「萬葉集索引を整理しつゝ」正宗敦夫氏アララギ 第二十二卷第六號に、これに依る某氏の説として、タンケクは、確の意ではあるまいかといふ説が見えてゐる。下惱ますに 天皇の叡慮を惱まし給ふに。下は表面に出でざるにいふ。雞が鳴く 枕詞。何故東方を修飾するかは未詳である。小田なる山に 陸奥の國の小田郡にある山に。今陸前の國遠田郡に屬してゐる。奏し賜へれ 段落では無くして、奏し給へればといふ意の、條件法の古い形である。給へれば、四段活の給ふに、助動詞リが著いたものである。給ふは敬語であるから、臣下より奏上するには、附けないのが至當であるに、奏し給へれとあるは、聞かし給へれの意に、ふと思ひ紛れて、自他の別が混雜したのであらう。明らめ給ひ 下惱み思はれた御心が、はつきりと快活になさせ給ひの意。明るくし給ひて。神相うづひ 詔詞に天に坐す神地に坐す神の相うづなひ奉りとある。神がよしと思つて納受するの意である。御靈助けて 詔詞に、天皇の御靈たちの恵び給ひ撫で賜ふ事に依りてとある。御靈が助力して。遠

き代にかかりし事を カカリシ、原文可里之は、萬葉考に奈可里之の誤として、遠い代に無かつた事をの意としてゐる。この句は、詔詞の、天の下を撫で恵び賜ふ事、理に坐す君の御代に當りてあるべき物をの句に相當してゐる。この詔詞の句は、天下を愛撫し給ふ道に合へる君の御代の意である。今この句も遠い代にあつたと傳ふる祥瑞の出現した事の意に用ゐるのであらう。食國は 御領有遊ばされる國を食國といふ。マツロへは、服従せしめること。統御すること。ムケは、王化に従はしめる。多くの臣僚を統治し給ふまゝに。其が願ふ心足ひに 老人や女子供の願ふ心を満足させに。撫て給ひ、愛撫し給ひ。此をしもあやに貴み この點が非常に貴くある故に。大伴の遠つ神祖の 大伴氏の遠祖の神なる。大伴氏の遠祖は、天の忍日の命といひ、大久米を率ゐて、天孫に従つて降つて來たと云はれてゐる。その後、道の臣の命また久米部を率ゐて神武天皇に仕へた。大來日主と大伴氏の遠祖は大來日部を率ゐて仕へたので、大來日主と名を負うたといふのである。主として道の臣の命をさしてゐるやうに思はれる。仕へし官 お仕へ申しあげた長官。ツカサは、官人、司る人。海行かば水漬く屍 この古歌は、詔詞にも出て、詞句に小異がある。題意の欄参照。海に行かば、水中に屍を遺して、水に漬くべきであるの意。願みは爲じと言立て 回顧躊躇は爲ないと誓言して。コトダテは、特に常と異なることを云ふこと。特別の言を爲す、異つた事をする。言立てば足もあがかに嫉み給ひき(古事記)。「貴人の立つる言立、儲弦、絶ゆる間繼がむに並べてもがも(仁徳記)。「仕へ來る祖の司とことだてて授け給へる」(卷二十、四四六五)。古よ 古より。今の現に この現在の世に。流さへる 傳へ來れる。祖の子等ぞ 以上の如き祖先の末裔ぞと、次の大伴、佐伯の人々を指してゐる。大伴と佐伯の氏は 大伴氏と佐伯氏とは同祖で、

共に代々武人として仕へて來た。人の祖の立つる言立 人の親として、特に言を爲して。我をおきてまた人はあらじと 自分以外にまたと人はあるまいと。貧窮問答歌に「確とあらぬ髻かき撫でて、吾をおきて人はあらじと誇ろへど」(卷五、八九二)。彌立て いよく言立てて。短句である。思ひし益る 思が益るので、シは助辭。段落。御言の幸の聞けば貴み サキは、詔書の盛意をいふ。人民に恩を垂れ、天地に光彩を資す性質をいふ。幸のに一に乎といふとあり、聞けば貴みに、一に云ふ貴くしあればとあるが、本來、御言の幸を聞けば貴み、もしくは御言の幸の貴くしあればといふべき語法であるから、何かの次第で、現本の形は、誤つて傳へられたものであらう。

○反歌三首

丈夫の 心思ほゆ 大君の 御言の幸を一に云ふ聞けば貴み一に云ふ貴

【原文】 反歌三首

大夫能 許已呂於毛保由 於保伎美能 美許登能佐吉乎一云 聞者多布刀美一云 貴久

【口譯】 丈夫としての心が思はれる。天皇陛下の勅語の榮えを拜聞すれば貴くあるが故に。

【釋義】 丈夫の心思ほゆ 武士としての意氣が振ひ立つ意である。

大伴の 遠つ神祖の 奥津城は 著く標め立て 人の知るべく

【原文】 大伴能 等保追可牟於夜能 於久都奇波 之流久之米多豆 比等能之流倍久

一六 大伴家持

七〇五

【口譯】 大伴氏の遠祖の神の墳墓は、人の知るやうに、明白に標示をするがよい。

【釋義】 大伴の遠つ神祖の 大伴氏の遠祖、天の忍日の命、又は道の臣の命であるが、恐らくは後者であらう。奥津城は 奥の城柳で、墳墓である。今何處とも知られない。著く標め立て それと知られるやうに、明に標め立てよの命令法である。シメは、榜示の材木、又は繩を張つて、占有の意を明にする意の動詞で、タテは、著明にする意である。

天皇の 御代榮えむと 東なる みちのく山に 金花咲く

天平感寶元年五月十二日 越中の國の守の館にて大伴宿禰家持作る

【原文】 須賣呂伎能 御代佐可延牟等 阿頭麻奈流 美知能久夜麻爾 金花佐久

天平感寶元年五月十二日 於越中國守館 大伴宿禰家持作之

【口譯】 天皇陛下の御代榮えようと、東方なる陸奥の山に、黄金の花が咲きました。

【釋義】 東なる 東方を總稱して、アヅマといふ。東方にあるの義。みちのく山に ミチノクは、道の奥で、諸道の奥の國をいふ。この歌では、すなはち陸奥の國の小田郡の山の謂である。金花咲く 黄金を産出したことを、花に譬へて、咲くと云つてゐる。

○史生尾張少咋を教へ諭す歌一首并に短歌

七出の例に云ふ 但一條を犯せらば すなはち出すべし 七出無くて すなは

ち棄つる者は 徒一年半

三不去に云ふ 七出を犯すといふとも棄つべからず 違へらば杖一百 唯奸を

犯せると惡疾とは棄つることを得

兩妻の例に云ふ 妻有り更に娶る者は徒一年 女家は杖一百して離て

詔書に云ふ 義夫節婦を惡み賜ふ

謹みて案ずるに 先の件の數條は 法を建つる基 道に化くる源なり 然らば

すなはち 義夫の道は 情別なきに存す 一家同財 豈舊を忘れ新を愛する志

有らめや 所以に數行の歌を綴り作り 舊を棄つる惑を悔いしむ 其の詞に曰

はく

大己貴 少彦名の 神代より 言ひ繼ぎけらし 父母を 見れば尊く 妻子見れば

愛しく戀し うつせみの 世の理と 如此様に 言ひけるものを 世の人の 立つ

る言立 ちさの花 咲ける盛に 愛しきよし その妻の兒と 朝宵に 笑み笑ま

ずも うち歎き 語りけまくは 永久に 斯くしもあらめや 天地の 神こと依せ

て 春花の 盛もあらむと 待たしけむ 時の盛ぞ 離り居て 嘆かす妹が 何時

しかも 使の來むと 待たすらむ 心不樂しく 南風吹き 雪消まさりて 射水河

流る水沫の よるべ無み 左夫流その兒に 紐の緒の いつがり合ひて 鴉鳥の

二人雙び坐 奈吳の海の 沖を深めて 惑はせる 君が心の 術もすべ無さ 佐夫流と

ば愛すべく可憐である。生ける世の道理と、かやうに云つて来たものを、世の人の誓約をすることには、ちさの花の咲いてゐる盛に、愛らしいその妻と、朝夕に笑つたり笑はなかつたりして、長息をついて話をしたであらうことは、永久にかやうにもあるまい。天地の神の助を蒙つて、盛りになることもあらうと待つてゐたであらう、時の盛りであるぞ。離れて居て嘆いてゐる妻が、何時か夫の使が来るであらうと待つてゐるであらう心を樂ましめず、かの南風が吹き雪消が益つて、射水川に流るる水沫の寄り所無さに漂ふやうな、あの左夫流兒に親しくして二人雙んでゐて、海のやうに深く感つてゐる君が心の、何とも爲む術の無いことであるよ。

【釋義】大己貴少彦名の 萬葉では、神代の代表的神様として、常にこの二柱の神を歌つてゐる。伊弉諾、伊弉册の尊は、一も歌はれてゐない。なほノの假字に野を用ゐてゐるのは注意すべきである。本来野はヌであるに拘らず、こゝにノの假字に用ゐてゐるのは、種々の暗示を含むものである。言ひ繼ぎけらし 言ひ繼いで来たさうなの意で、下にその言ひ繼ぎ来た内容を叙してゐる。元曆校本に、家良之の之の右に緒で久とあるので、言ひ繼ぎけらくと爲す説もある。然らば、言ひ繼ぎ来たことはの意になる。父母を見れば尊く妻子見れば愛しく愍し この歌は全體、山上憶良の感情を反さしむる歌（卷五、八〇〇）に依つてゐるが、こゝの數句も、かの歌の「父母を見れば尊し、妻子見ればめくしうつくし」の句に依つてゐる。カナシは愛すべくある、かはゆくある形容。メグシは、かはいさうにある形容。うつせみの 枕詞。立つる言立 變つた言をいひ立てる、特に約束する意で、妻子の愛すべくあるは常であるに、特に立身の約束をして別れたといふのである。ちさの花 松楊と書く。柿に似た喬木で、山野に自生し、夏の頃白い花が咲く。茶の萼とは別。咲ける盛に 松楊の花の咲いてゐる盛の頃に。愛しきよし 愛しきと同じ。その妻の兒と ツマノコは、妻を親愛していふ詞。

少咋の本妻をいふ。笑みみ笑まずも 笑つたり笑はなかつたりして。語りけまは 語りけむことは。語つたであらうことは。斯くしもあらめや 斯くあらむや、斯くあるべきにあらずの意。かく貧しくはあらじと、小咋が妻に向つて語るのである。天地の神こと依せて 天地の神の冥助を得ての意。コトヨスは、命令を寄托する。御言を寄せる。春花の 枕詞。盛もあらむと待たしけむ 原文もと佐可里裳安良多之家牟とある。京都帝國大學本に、禁裏御本からの校異として、佐可里裳安良牟等末多之家牟とある。今これによる。（代匠記は、官本によつて同様に訂正してゐる。）盛える時もあらうと約束をして、妻は待つてゐたであらうの意。永久にから盛もあらむまでが、妻と語つた詞である。待たしけむは、妻がお待ちになつたであらうの意で、連體形である。時の盛ぞ かくてその結果として得たる榮華であるぞの意。待つてゐたであらう立身は得たの意。少咋が越中の史生として身を立てたのをいふであらう。嘆かす妹が 嘆いて居られる妻が。妹は本妻。心さぶしく、妻が夫の使を待つてゐる心に酬いられずして、悅樂せざる形容。流る水沫の ミナワは、水の水沫。よるべ無み寄るべき方が無さに。南風吹きからこの句まで五句は、序で、次の左夫流を起してゐる。左夫流その兒に 左夫流は遊行女婦の名。寂しくある意のサブルに取つて、寄る邊無みさぶると續けてゐる。「まを鏡見飽かぬ君に後れてやあしたゆふべにさびつつ居らむ」（卷四、五七二）。紐の緒の ツガルの枕詞。いつがり合ひて イは接頭語。ツガルは交り結ぶ。豊國の香春は我家、紐の兒にいつがり居れば香春は我家」（卷九、一七六七）。鴉鳥の二人雙ぶの枕詞。奈吳の海の沖を深めて 奈吳の海は越中の海の名。深く感へる意を表す爲に、奈吳の海の沖をと云つてゐる。惑はせる 少咋の心の惑ひてゐるをいふ。術もすべ無さ 何とも爲む術の無きことよの意に、スベを重ねてゐる。

七四一〇

○反歌三首

あをによし 奈良に在る妹が 高高に 待つらむ心 然にはあらしか

【原文】 反歌三首

安乎爾與之 奈良爾安流伊毛我 多可多可爾 麻都良牟許已呂 之可爾波安良司可

【口譯】 奈良に居る妻が、首を長くして待つてゐるであらう心、さうではないでせうか。

【釋義】 奈良に在る妹が 奈良に残して來た本妻をいふ。高高に 切に待つてゐる状を表す副詞である。然には

あらしか さうではないかと念を押すのである。憶良の感情を反さしむる歌の終にも、この句が用ゐられてあ

八四一〇

里人の 見る目はづかし 左夫流兒に 惑はず君が 宮出後風

【原文】 左刀妣等能 見流目波豆可之 左夫流兒爾 佐度波須伎美我 美夜泥之理夫利

【口譯】 里人の見る目も恥しいことである。左夫流兒に迷つて居られる君の、出勤の後姿は。

【釋義】 宮出後風 ミヤデは朝廷や役所に出仕すること。「夢にだに見ざりしものをおほほしく宮出もするか左楢の隈廻を」(卷二、一七五)。シリブリは、うるし姿。

くれなるは うつろふものぞ 橡の なれにし衣に なほ若かめやも

九四一〇

右五月十五日 守大伴宿禰家持作

【原文】 久禮奈爲波 宇都呂布母能曾 都流波美能 奈禮爾之伎奴爾 奈保之可米夜母

右五月十五日 守大伴宿禰家持作之

【口譯】 紅色は褪せるものである。橡染の馴れた衣には、やはり及びますまい。

【釋義】 うつろふものぞ ウツロフは、褪色する。色さめる。實際、紅草を染料としたものは、褪色し易い。この二句は、左夫流兒を譬へてゐる。橡の ツルバミは、櫛の實、どんぐり。その實のかさを染料とする。褐色。なれにし衣に 著馴れた衣、木妻を譬へてゐる。なほ若かめやも なほ及びむや、及びはせじの意。

【参考】 類句、つるばみの衣。

橡の衣は人皆事無しといひし時より著欲しく思ほゆ (卷七、一三二二)

橡の解き濯ひ衣のあやしくも殊に著欲しきこの夕かも (同、一三一四)

橡の袷の衣裏にせば吾強ひめやも、君が來まさぬ (卷十二、二九六五)

橡の衣解き洗ひ眞土山もとつ人にはなほ若かずけり (同、三〇〇九)

類句、なれにし衣

おほろかに吾し念はば下に著てなれにし衣を取りて著めやも (卷七、一三二二)

○先の妻 夫の君の喚使を待たず みづから來し時作れる歌一首

左夫流兒が いつきし殿に 鈴掛けぬ 驛馬下れり 里もとどろに

同じき月十七日 大伴宿禰家持作

一六六 伴家持

七一三

夫君は元
曆校本等
による。

【原文】 先妻不待夫君之喚使、自來時作歌一首

左夫流兒我 伊都伎之等能爾 須受可氣奴 婆由麻久太禮利 佐刀毛等騰呂爾

同月十七日 大伴宿禰家持作之

【題意】 同月十七日に、尾張の少咋の、奈良に残しておいた妻は、夫の喚ぶ使を待たないで、自分から越中に下つて來たのを、家持が詠んだのである。

【口譯】 左夫流兒が飾り立てて居たお邸に、驛鈴も掛けない驛馬が下つて來た。里中の騒ぎである。

【釋義】 につきし殿に イツキシは、齋きしで、祭り立ててゐた意。殿は、少咋の館をいふ。左夫流兒が、少咋の館に入り込んで、妻顔にふるまつてゐたのである。鈴かけぬ驛馬下れり 官命を帯びての使ならば、驛鈴をかけるが、少咋の妻の下つたのは、私用であるから、鈴をかけない。ハユマは、ハヤウマで、道中の宿驛に馬を備へ、交通の便に資するものをいふ。少咋の妻が、驛馬に乗つて下つて來たのである。里もとどろに トドロは騒動の物音である。左夫流兒の居るところに、先妻が來著したので、里中とどろと鳴り騒ぐ意である。

○天平感寶元年閏五月六日以來 小旱を起して 百姓の田畝稍凋める色あり 六月朔日に至りて たちまち雨雲の氣を見 仍りて作れる雲の

歌一首短歌一絶

天皇の 敷きます國の 天の下 四方の道には 馬の蹄 い盡す極 船の舳の い泊つるまでに 古よ 今の現に 萬調 奉る長上と 作りたる 其の農業を 雨降

四二二

らず 日の重れば 植ゑし田も 蒔きし畠も 朝ごとに 涸み枯れ行く 其を見れば 心を痛み 緑兒の 乳乞ふがごとく 天つ水 仰ぎてぞ待つ あしひきの 山 のたをりに 此の見ゆる 天の白雲 海神の 沖つ宮邊に 立ち渡り との曇り合ひて 雨も賜はね

【原文】 天平感寶元年閏五月六日以來 起ニ小旱 百姓田畝 稍有ニ凋色 也 至ニ于六月朔日 忽見ニ雨雲之氣 仍作雲歌一首 短歌一絶

須賣呂伎能 之伎麻須久爾能 安米能之多 四方能美知爾波 宇麻乃都米 伊都久須伎波美 布奈乃倍能 伊波都流麻泥爾 伊爾之敬欲 伊麻乃乎都頭爾 萬調 麻都流都可佐等 都久里多流 會能奈里波比乎 安米布良受 日能可左奈禮婆 宇惠之田毛 麻吉之波多氣毛 安佐其登爾 之保美可禮由苦 會乎見禮婆 許已呂乎伊多美 彌騰里兒能 知許布我其登久 安麻都美豆 安布藝豆曾麻都 安之比奇能 夜麻能多乎理爾 許能見由流 安麻能之良久母 和多都美能 於積都美夜徹爾 多知和多里 等能具毛利安比豆 安米母多麻波爾

【題意】 天平感寶元年の閏五月六日以來、小旱が起つて雨が降らず、人民の田畝は、稍凋める色がある。六月朔日に至つて、忽雨雲の氣を見たので、その日の夕方に、雨を願つて家持の作つた、雲の歌である。

【口譯】 天皇陛下の統治あらせられる國の、天の下四方の道には、馬蹄の至り留る極、船の舳先の終り碇泊する處まで、古來、この現代に至るまで、萬の貢物を奉る中の長上として作つた、その農作物を、雨降らずに日が重なるから、植ゑた田も、蒔いた畠も、朝ごとに涸み枯れて行く。それを見れば心が痛さに、小さい兒が乳を乞ふやうに、天の水を仰いで待つてゐます。山の窪んでゐるところに、あの見える天の白雲よ、海の神の沖の

可左奈禮
見油繼
流は元曆
校本等に
よる。

御殿のほとりに立ち渡り、空かき曇つて、雨も降らせて下さる。

【釋義】 馬の蹄い盡す極船の舳のい泊つるまでに 御領國の果までもの意を、陸と海とに分けて叙してゐる。二つのイは接頭語。この句は祈年祭の祝詞に「青海原は權干さす、舟の舳の至り留まる極、大海に船滿ち續けて、陸より行く道は荷の緒結ひ堅めて、磐根木根踏みさくみて、馬の爪の至り留まる限、長道間無く立ち續けて」とあるに依つてゐる。古よ 古代から。今の現に ヲツツは、ウツツに同じ。現在、現實。萬調 種々の貢物。奉る長上と 種々の貢物のうちの最上位の物として。穀物をいふ。其の農業を ナリハヒは、農作物。天つ水 天からの水で、雨露霜雪の類をいふ。こゝにては雨。山のたをりに タフリは、高い山の間の、やや低目のところ。「あしひきの山のたをりに立つ雲をよそのみ見つつ」(卷十九、四一六九)。海神の沖つ宮邊に 水を司る海の神の、沖の宮の邊に。との曇り合ひて トノグモリは、一面に曇ること。山の雲と、海神の起す雲と、曇り合つて。雨も賜はね 願望の語法。雨も下し賜への意。

○反歌一首

この見ゆる 雲ほびこりて との曇り 雨も降らぬか 心足ひに

右の二首は、六月一日の晩頭 守大伴宿禰家持作

【原文】 反歌一首

許能美由流 久毛保妣許里豆 等能具毛理 安米毛布良奴可 許己呂太良比爾

右二首 六月一日晩頭 守大伴宿禰家持作之

三四二

三四二

安良婆、
作は元曆、
校本によ

【口譯】 この見える雲がはびこつて、空かき曇り、雨も降らないか。満足するやうに。

【釋義】 雲ほびこりて ホビコルは、はびこる、這ひ広がる。心足ひに 心が満足するやうに。「老人も女童兒も、其が願ふ心足ひに」(卷十八、四〇九四)

○雨の落るを賀ぐ歌一首

我が欲りし 雨は降り來ぬ 斯くしあらば 言舉せずとも 年は榮えむ

右の一首は 同じき月四日 大伴宿禰家持作

【原文】 賀雨落歌一首

和我保里之 安米波布里伎奴 可久之安良婆 許登安氣世受村母 登思波佐可延牟

右一首 同月四日 大伴宿禰家持作

【題意】 前に六月一日の夕方に、家持は、雲氣を見て雨を願ふ歌を作つたが、同月四日に至つて、いよいよ雨が降つて來たので、これを賀ぐ歌を作つたのである。

【口譯】 自分の願つてゐた雨は降つて來た。これならば、神に奏上せずとも、豊年となるであらう。

【釋義】 斯くしあらば シは助辭。斯くあらば、かくの如くにあらば。言舉せずとも コトアゲは、神に訴へること。この世は、神意のまゝなるべきに、特に便宜のことありとして、神に奏上し、その冥助を乞ふ意である。その祈願をしないでも。年は榮えむ トシは、收穫。穀物の稔は繁昌するであらう。豊年となるのであらう。

○越前の國の椽大伴宿禰池主の來贈れる戲歌四首

忽恩賜を辱くす 驚欣已に深し 心の中に咲を含みて 獨座稍開けば 表裏同じか
らず 相違何ぞ異なる 所由を推し量るに 率爾に策を作れる歟 明に知る 言を
加ふること 豈他意有らめや およそ本物を貿易するは 其の罪輕からず 正臈倍
臈 宜しく急に并せ満たすべし 今風雲に勒して徵使を發遣す 早速返報して 延
回すべからず

勝寶元年十一月十二日 物を貿易せらえし下吏 謹みて
貿易人を斷る官司の廳下に訴ふ

別に白す 可憐の意 黙止すること能はず 聊四詠を述べて 睡覺に准擬す
草枕 旅の翁と 思ほして 針ぞ賜へる 縫はむ物もが

八四二

【原文】 越前國椽大伴宿禰池主來贈戲歌四首

忽辱_ニ恩賜_一 驚欣已深 心中含_ニ咲_一 獨座稍開 表裏不同 相違何異 推_ニ量所由_一 率爾作_ニ策_一 明知加_ニ言_一
豈有_ニ他意_一乎 凡_ニ貿易_ニ本物_一 其罪不_レ輕 正臈倍臈 宜_ニ急并_ニ滿_一 今勒_ニ風雲_一 發_ニ遣徵使_一 早速返報 不_レ須_ニ
延_ニ廻_一

勝寶元年十一月十二日 物所_ニ貿易_一下吏

謹訴_ニ貿易人斷官司_一 廳下

別白 可憐之意 不能_ニ黙止_一 聊述_ニ四詠_一 准_ニ擬睡覺_一

別白は元
曆校本に
よる。

延廻は元
曆校本に
よる。

久佐麻久良 多比能於伎奈等 於母保之天 波里曾多麻徹流 奴波牟物能毛賀

【題意】 隣國の越前の國の椽の大伴池主から、贈り來つた戲の歌四首。この歌には、書簡がついてゐるから、これによつて、その主旨を窺ふことが出来る。家持から、池主に物を贈つたところ、誤つて針袋を封じて送つてしまつた。そこで池主が戯れて、品物をすり換へたのは罪であるから、至急に賠償せよとの意を通じ、また針袋を贈られたことを興じて歌を詠んだのである。針袋は、針などの裁縫用具を入れる袋で、旅行に携帯するものと考へられる。

大伴池主は、系統は審でない。家持が越中守として赴任した時にその國の椽として、家持と贈和の作が多く傳つてゐる。家持より年配であるらしい。天平二十年の頃越前の椽に轉じたのであらう。後橋奈良麻呂の亂に連座した。

【序意】 思ひがけず御贈り物に預りまして、深い喜に堪へませぬ。心の中に笑を催し、誰も居ない處で、少し開けて見ましたところ、表と中と同じで無く、相違してゐるのはいかにも怪しいことでございます。そのわけを推量いたしますに、輕率に策を作つたのでせうか。お詞を下さいましたことは別の意味が無いといふことは、よく承知いたしてをります。およそ本物の物を取り替へることは、その罪が輕くありません。正臈と倍臈とは、併せて急にお満し下さい。今風雲に乗せて徵發の使を出しました。早速に返報して延引してはなりません。天平勝寶元年十一月十二日、物を取り替へられた下役人、謹んで、取り替へた人を裁判するお役人の手許まで、訴へ申し上げます。

別に申し上げます。興に乗つた心は、黙つて止むことが出来ません。少しく四首の歌を詠んで、ねむけさまし

毛賀は元
曆校本に
よる。

に備へます。

率爾に策を作れるか 率爾は、俄に、軽々しく、輕率に。策は札で、荷物に附ける札。家持から池主に贈る品物を、あわてて別の品に札を付けたのかと疑ふ意である。貿易 物を取り替へること。自分の物を持つて來て他の物に取り替へる。正賊 盗んだ品物。悪い事をして得た、その品物。倍贓 正賊の外に、更に正賊に同じだけの品物を出して賠償するその品物。風雲に勒して 勒は、馬の轡。風雲を馬に轡へてゐる。可憐の意 おもしろしと思ふ心。四詠 次の歌四首をさす。睡覺に准擬す 睡眠から覺めた時の料になぞらへる。目ざましぐさとしようとす。

【口譯】 わたくしを旅の翁とお思ひになつて、針を下さいました。縫ふべき物は無いでせうか。

【釋義】 縫はむ物もが 縫ふべき物もあれかしと願ふ意である。

【餘論】 この序並に歌の作られた事情につき、代匠記に、池主が袋に縫つて賜へとて、家持の許に材料の絹地を送つたのを、家持が更によい絹に代へて縫つて遣つたのに對する禮狀であるとなし、諸註これに従つてゐるが、序も歌も、それでは十分に解けない上に、わざわざ隣國に袋を縫はせにやるといふことも苦しい説明である。

九四二

針袋 取りあげ前に置き かへさへば おのともおのや 裏も縫ぎたり

【原文】 芳里夫久路 等利安宜麻徹爾於吉 可邊佐倍波 於能等母於能夜 宇良毛都藝多利

【口譯】 針袋を取りあげて、前に置いて、裏を返して見ましたところ、何とも驚いたことには、裏も縫いであります。

【釋義】 かへさへば 袋の裏を返せば。おのともおのや オノは、驚き怪む時に發する聲。新撰字鏡に、「吁、疑怪之辭也、於乃」とある。オノトモオノヤは、驚いたとも驚いたといふやうな語氣。下のヤは感動詞。裏も縫ぎたり 裏も破れて縫いである意である。

九四三

はり袋 帯び續けながら 里ごとに てらさひ歩けど 人も咎めず

【原文】 波里夫久路 應婢都都氣奈我良 佐刀其等通 天良佐比安流氣騰 比等毛登賀米授

【口譯】 針袋を腰に帯び續けて、里ごとに見せびらかして歩きますが、人も咎めませぬ。

【釋義】 帯び續けながら 引き續いで腰に佩びながら。てらさひ歩けど テラサヒは、街ふで、見せびらかすこと。

九四四

雞が鳴く 東を指して ふさへしに 行かむとおもへど よしも實なし

右の歌の返報の歌は 脱漏して 探り求むることを得ず

【原文】 等里我奈久 安豆麻乎佐之天 布佐倍之爾 由可牟登於毛倍騰 與之母佐禰奈之

右歌之返報歌 脱漏不得探求也

【口譯】 東方の諸國をさして、ふさへをしに行かうと思ひますが、手づるもございませぬ。

【釋義】 雞が鳴く 枕詞。東を指して 東方の諸國をさして。ふさへしに 未詳。古く、ふさはしに、適應させにで、幸福を求めにの意とし、その他諸説あるが、探るべき説を知らぬ。よしも實なし ヨシは、由縁、サネ

は、誠に。誠にその行くべき手段理由も無いの意。さ寝る夜は多くあれども物思はず安く寝る衣は實無きものを」(卷十五、三七六〇)。右歌の返報の歌 以上の池主の歌に對する、家持の返歌で、これは探したが知れなかつたとの意である。

○更に來り贈れる歌二首

驛使を迎ふる事に依りて 今月十五日 部下の加賀の郡の境に到來せり 面蔭に射水の郷を見 戀緒を深海の村に結ぶ 身は胡馬に異なれども 心は北風に悲しぶ 月に乘じて徘徊し 曾つて爲す所無し 稍來封を聞く 其の辭云々といへり ささに奉る所の書 返りて畏る 疑に度れる歟 僕囑羅を作して 且使君を惱ます 夫水を乞ひて酒を得 從來能口 論ふこと時に理に合はば 何ぞ強吏と題せむや 尋ぎて 針袋の詠を誦するに 詞泉酌めども渴ず 膝を抱きて獨咲ひ 能く旅愁を獨く 陶然として日を遣る 何をか慮らむ 何をか思はむ 短筆不宣 勝寶元年十二月十五日 物を徴りし下司 謹みて不伏の使君の記室に上る

別に奉る云云 歌二首

豎様にも 彼にも横様も 奴とぞ 吾はありける 主の殿門に

【原文】 更來贈歌二首

依_レ迎_レ驛使_二事_一 今月十五日 到_レ來_レ部下_一加賀郡境_一 面蔭見_レ射水之郷_一 戀緒結_レ深海之村_一 身異_レ胡馬_一 心悲_レ北

北風、稍云云者は元曆校本による

不伏は元曆校本による

風_一 乘_レ月徘徊 會無_レ所爲 稍開_レ來封 其辭云云者 先所_レ奉書 返畏_レ度疑歟 僕作_レ囑羅 且惱_レ使君 夫乞_レ水得_レ酒 從來能口 論_レ時合理 何題_レ強吏_一乎 尋誦_レ針袋詠 詞泉酌_レ不渴 抱_レ膝獨咲 能_レ獨_レ旅愁 陶然遣_レ日 何慮_レ何思 短筆不宣

勝寶元年十二月十五日 徵物下司

謹上 不伏使君記室

別奉云云 歌二首

多多佐爾母 可爾母與己佐母 夜都故等會 安禮波安利家流 奴之能等乃度爾

【題意】 前の池主からの戲書に對して、家持から返事をしたが、又それに對する池主の書簡及び歌である。

【序意】 驛使を迎へる事の爲に、今月十五日、管内の加賀郡の境に到來しました。先年住んでゐた越中の射水の郷を面影に見て、體は深海の村にあつて、戀の思に結ばれて居ります。この身はかの胡馬ではございませんが、心は北風に悲んでをります。月に乘じて徘徊するばかりで、何とも爲すべきことがございませぬ。やうやく御手紙に接しまして、封を開いて見ますに、その詞に何々とありました。先にさしあげました手紙が、返つて誤解を招きましたかを畏れます。わたくし、お願ひ事を致しまして、貴方を惱ませました。水を乞ひまして酒を得ましたのは、もとから辯者だからでございますが、論ずることが、時により道理に合ひますなら、何とて強吏と仰せられませうや。次に針袋の御歌を讀みますに、詞の泉は酌めども渴きません。膝を抱へて獨笑ひ、能く旅の愁を除きました。うつとりとして日を送りますので、何も思ふことがございませぬ。短い文で意が述べ盡せませぬ。天平勝寶元年十二月十五日、物を徴つた下役人、謹んで伏せざる御方の書記にさしあげ

ます。別に承はりますに何々。よつて詠みました歌二首。

驛使 中央政府からの使で、これを迎へに加賀郡の方へ行つたのであるから、越中を経て越前に入つて来る使である。**部下の加賀の郡** 加賀の郡は、後の加賀の國のうちで、河北石川の二郡に分れた。この時代、いまだ加賀の國を立てずに、越前に屬してゐたのである。**射水の郷** 越中の國府のある近處をいふ。池主はもと越中の椽で、後、越前の椽に轉じたので、射水の郷を面影に見るのである。**戀緒を深海の村に結ぶ** 戀緒を結ぶは、戀の思が絲のやうに結ばれるよしである。深海の村は、越前の北境の地名。身は胡馬に異なれども心は北風に悲しむ 文選に載つてゐる古詩に、胡馬依北風、越鳥巢南枝とあるに據る。胡の地の馬は北風に身を托してゐる意で、その性の適ふ所に向ふことを云つてゐる。さて池主は、自分は胡馬とは異なるけれども、心は北風に向つてもとの郷を思つて悲んでゐるよしである。會つて爲す所無し 爲すべきことが無い。爲さむ術を知らぬ意で、無聊に苦むといふのではない。來封 家持からの來書。その辭云々といへり 家持の手紙に云々とあつたの意で、池主の手紙に既にかやうに省略せられてゐたのであらう。又は、筆録者が省略して、代ふるに云々の文字を以つてしたとも見られる。囑羅 囑は請託、羅は囉の省字で、騒々しい聲をいふ。やかましく頼むこと。使君 敬稱で家持を指す。水を乞ひて酒を得從來能口 遊仙窟に、乞漿得酒、舊來神口、打鬼得鬘、非意所望とある。水を乞ひて酒を得とは、つまらぬものを乞うて、よい品を得るをいふ。能口ならばに神口は、新考に口上手と説いてゐる。論すること時に理に合はば 從來、家持の云ふことが理に適はばの意に説いてゐたが、これは池主自身のことをいふのであらう。何ぞ強吏と題せむや 何とて強吏と稱し給ふことあらんや。強吏は、無道の役人。家持からの書簡に池主のことを、戯に強吏と稱して來たことを難するの

である。針袋の詠 家持の詠んだ針袋の歌であるが、この歌は傳はらない。不伏使君 通行本には不伏使君とあり、元暦校本等の古寫本には、不伏使君とある。不伏は誰に對しても伏さざる意で、尊貴の人にいふのであらうか。記室 書記で、直接に宛てないのは敬意を含むのである。別に奉る云々 家持の手紙にあつた別記を受けて、これを承るに云々とあつたといふので、こゝも池主の文に、かやうに書いてあつたか、又は、その句が引いてあつたのを、編者が省略したのかである。

【口譯】 縦にも横にも、わたくしは、奴としてあなたの御殿のもとに居ります。

【釋義】 豎の様にも 豎の様にもで、豎に見ても、豎の方でも等の謂。彼にも横様も カニモは、かやうにも。ヨコサは、横の様にも。以上、縦横どちらから云つても、かにもかくにももの意。奴とぞ ヤツコは、主人に仕ふる者で、絶對的服従のもとにおかれてゐる。こゝは、卑下して家持を敬つたのである。正倉院文書に、當時の書簡に、主奴(メシノヤツコ)と卑下して書いた例がある。主の殿門に ヌシは家持を敬つてゐる。ヤツコに對して、主人をいふ。トノドは、御殿の戸口。あなたの御殿の戸のところは伺候して居る者である意に、奴としてゐる場所を指定してゐる。

針袋 これは賜りぬ すり袋 今は得てしか 翁さびせむ

【原文】 波里夫久路 己禮波多婆利奴 須理夫久路 伊麻波衣天之可 於吉奈佐備勢牟

【口譯】 針袋、これは頂戴いたしました。摺袋を今は得たいものでございます。老人らしくいたしましたせう。

【釋義】 針袋 家持から誤つて送つた針袋である。これは賜りぬ 返さないで頂戴いたしましたといふのであ

三四一三
伊麻波は
元暦校本
等による

る。すり袋 摺染模様のある袋。又、旅行用の竹細工の籠をスリといふより、その袋ともいふ。倭名類聚鈔に、籠をスリと讀んでゐる。旅人はすりもはたごも空しきを早くいましね山のとねたち（兼盛集）。翁さびせむ オキナサビは、老人としての行動をするをいふ。さる翁めかしきわざをしようとする。神さび、をとめさび、をとこさびなどの例がある。翁さび人な咎めそ、狩衣今日ばかりとぞ鶴も鳴くなる（伊勢物語）。

○天平勝寶二年正月二日 國の應にて 饗を諸の郡の司等に給ふ宴の歌一首

あしひきの 山の木末の 寄生取りて 挿頭しつらくは 千年壽ぐとぞ

右の一首は 守大伴宿禰家持作

【原文】 天平勝寶二年正月二日 於國廳 給饗諸郡司等宴歌一首

安之比奇能 夜麻能許奴禮能 保與等理天 可射之都良久波 知等世保久等會

右一首 守大伴宿禰家持作

【題意】 天平勝寶二年正月二日、越中の國の役所で、正月の酒宴を諸郡司等に給ふ時の、家持の祝の歌。

【口譯】 山の木の枝先の寄生を取つて、挿頭したことは、千年までも祝ふとてであります。

【釋義】 山の木末の コヌレは、木の生長してゐる枝先。生々とした語感である。寄生取りて ホヨは植物の名。

寄生木。挿頭しつらくは かざしつることはの義。寄生木を取つて頭挿としたのである。千年壽ぐとぞ 千年を壽ぐとてなるぞの意。末長き世までも榮えよと祝ふのである。

○隰田の地を檢察する事に縁りて 礪波の郡の主帳多治比部北里の家に宿る 時に忽に風雨起りて 辭去するを得ずて作れる歌一首

荆波の 里に宿借り 春雨に 籠り障むと 妹に告げつや

二月十八日 守大伴宿禰家持作

【原文】 緣下隰田地事 宿礪波郡主帳多治比部北里之家 于時忽起風雨 不得辭去作歌一首

夜夫奈美能 佐刀爾夜度可里 波流佐米爾 許母理都追牟等 伊母爾都宜都夜

二月十八日 守大伴宿禰家持作

【題意】 同年二月十八日、隰田の地を檢視する事の爲に、礪波郡の主帳、多治比部北里の家に宿つた時、風雨が忽に起つて、辭し去ることが出来なくなつて作つた大伴家持の作。郡の主帳は、郡書記である。

【口譯】 荆波の里に宿を借りて、春雨に籠つて、惱んでゐると、わが妻に告げましたか。

【釋義】 荆波の 礪波郡中の地名。籠り障むと コモリは、降り籠められてゐること。ツツムは、障り、災難に

會つて籠居する意。妹に告げつや イモは、家持の妻をいふ。ヤは疑問の辭。傍の者に、家に歸り得ずと告げたかと問ふのである。家持の妻は、大伴宿奈麻呂と、坂上郎女との間に生れた、大伴坂上大嬢である。家持が越中に赴任した當時は、京に留つてゐるが、その後、任地に赴いて、家持と同棲したのである。卷十九に、勝寶二年四月の末に、既に越中に在ることが見えるから、この年二月十八日の頃に、既に下つてゐたと爲す萬葉代匠記の説を、可となすべきである。

【参考】 雨に籠る歌

一、雨づつみ

雨づつみ常爲る君はひさかたの夜の雨に懲りにけむかも（卷四、五一九）

ひさかたの雨も降らぬか、雨づつみ君に副ひてこの日暮さむ（同、五二〇）

此間にありて春日やいづく、雨づつみ出でて行かねば戀ひつつぞ居る（卷八、一五七〇）

笠無みと人には云ひて雨づつみ留りし君が容儀し思ほゆ（卷十一、二六八四）

二、雨ごもり

雨ごもり情いぶせみ出で見れば春日の山は色づきにけり（卷八、一五六八）

雨ごもり物思ふ時にほととぎすわが住む里に來鳴きとよもす（卷十五、三七八二）

附載、雨ごもり（枕詞）

雨ごもり三笠の山を高めかも月の出で來ぬ、夜はくだちつつ（卷六、九八〇）

○天平勝寶二年三月一日の暮 春の苑の桃李の花を眺瞞して作れる歌二

首

春の苑 くれなゐにほふ 桃の花 した照る道に 出で立つ媼

【原文】 天平勝寶二年三月一日之暮 眺瞞春苑桃李花作歌二首

春苑、紅爾保布 桃花 下照道爾 出立媼

【題意】 以下二首は、天平勝寶二年三月一日の暮に、苑の桃李の花を、眺めやつて詠んだ歌。卷十九では、作者の名の書いてないのは、すべて大伴家持の作といふことになつてゐるから、これも家持の作である。

【口譯】 春の園の紅の照り映ゆる桃の花、その輝く下道に立ち出でる嬢子よ。

【釋義】 紅にほふ 桃の花が紅色に咲きにほふので、ニホフは、花の色の美しく照り映えるにいふ。下照る道に 花の光によりて、樹下の光り輝く道に。出で立つ媼 イデタツは、立ち出でる。媼は、感婦と書くべきを、連字偏傍を増す現象として、下の字の女偏が、上に影響して、上の字にも女偏をつけたのであるといふ。可怜を、可怜と書くやうなものである。媼は、本集には數出してゐる。ヲトメと讀んで、嬢子と同様に解してよいが、字義は、賞美すべき婦人の意であらう。

吾が園の 李の花か 庭に落る はだれのいまだ 残りたるかも

【原文】 吾園之 李花可 庭爾落 波太禮能未 遺有可母

【口譯】 わが園の李の花であるか。或は庭に降つた、斑な雪が、まだ残つてゐるのであるか。

【釋義】 はだれのいまだ ハダレは、斑で、むら／＼に消え残る雪をいふ。李の落花を見て、雪の残れるかと疑つたのである。「御食向ふ南淵山の巖には落りしはだれか消え残りたる」（卷九、一七〇九）

〇二日 柳黛を攀ちて 京師を思ふ歌一首

春の日に 萌れる柳を 取り持ちて 見れば京の 大路おもほゆ

一六 大伴家持

所念は元
曆校本等
による。

【原文】 二日 攀_ニ柳_ニ黛_ニ思_ニ京師_ニ歌一首

春日爾 張流柳乎 取特而 見者京之 大路所念

【題意】 同年三月二日、柳の枝を折つて京都を思ふ歌。柳黛は、黛は眉を描く料の墨。柳の若き葉は、黛で書いた、婦人の眉に似てゐるからいふ。攀は、集中をりく枝を折り取ることに用ゐてゐる。攀の字に折り取る意は無いのだから、恐らくは、作者家持がこの字を誤用してゐるのであらう。

【口譯】 春の日に芽を出してゐる柳を手にとつて見ると、都の大路が思はれる。

【釋義】 萌れる柳を ハレルは、芽を出してある。

【餘論】 都の大路には、柳が植えてあつたので、今柳の枝を持つて、都の春色が思ひ遣られるのである、催馬樂の淺緑に、「新京朱雀のしだり柳」といひ、同大路に、「大路に添ひてのぼれる青柳が花や」といふは、いづれも奈良の京のことでは無いらしいが、奈良の京にも、同様に大路に柳が植ゑられてあつたことと思はれる。

○堅香子草の花を攀ち折る歌一首

もののふの 八十娘子等が 抱み亂ふ 寺井の上の 堅香子の花

【原文】 攀_ニ折_ニ堅香子草花_ニ歌一首

物部能 八十姫婦等之 抱亂 寺井之於乃 堅香子之花

【題意】 堅香子草の花を折り取る歌。家持の作。堅香子は、今カタクリといふ草ださうで、それならば花は百合の如く紫色であるといふ。

八十姫婦
は元曆校
本等による。

三〇四一四

【口譯】 これは、大勢の娘さんたちの、水波み騒いでゐる寺井の上の堅香子の花である。

【釋義】 ものふの 枕詞。八十娘子等が ヤソは、数の多いのを示す。原文もと八十乃姫婦等之とあつたが、今元曆校本等に従つて、乃を削る。抱み亂ふ 亂れて波んでゐる。寺井の上の 寺井は、寺にある、もしくは寺のほとりの井である。ウへは、原文於の字を書いてゐる。於をウへと讀むことは、外にも例が多くある。一例を挙げれば「磯の於に生ふる馬酔木を手折らめど」(卷二、一六六)。

○遙に江を浜る船人の唱を聞く歌一首

朝床に 聞けば遙けし 射水河 朝漕ぎしつ つ 唱ふ船人

【原文】 遙_ニ聞_ニ浜_ニ江船人之唱_ニ歌一首

朝床爾 聞者遙之 射水河 朝已藝思都追 唱船人

【題意】 遙に射水川を浜る船人の唄を聞いて作つた歌。家持の作。

【口譯】 朝の床に聞けば遙である。射水川を朝船を漕ぎながら歌ふ船人の聲は。

【釋義】 朝床に 朝、臥床にて。朝漕ぎしつ つ 朝の船漕ぎをしながら。川を浜つて舟を漕ぐのである。

○三日 守大伴宿禰家持の館に宴する歌三首

今日の爲と 思ひて標めし あしひきの 峯の上の櫻 かく咲きにけり

【原文】 三日 守大伴宿禰家持之館宴歌三首

一六 大 伴 家 持

七三一

三〇四一五

一〇四一五

今日之爲等 思標之 足引乃 峰上之櫻 如此開爾家里

【題意】 三月三日に、越中守大伴家持の館で、宴をした時の歌三首。家持の作。

【口譯】 今日の爲にと思つて、占領をしておいた、山の上の櫻も、この通りに咲きました。

【釋義】 思ひて標めし シメシは、領有の意を表しておいたこと。この歌では、心中にこの日の宴の爲にと、思ひ設けておいた意。酒席の興を添へる爲に、この山の櫻も、今日の宴の爲に、わたくしが用意させておいたのでございますと云つたのである。あしひきの 枕詞。かく咲きにけり かやうに咲きました。櫻を折り取つて、宴席を飾つてゐるのをさして、この山の櫻もかやうに咲きましたと云つたのであらう。

奥山の 八峯の椿 つばらかに 今日暮さね 丈夫の伴

【原文】 奥山之 八峯乃海石榴 都婆羅可爾 今日者久良佐禰 大夫之徒

【口譯】 奥山の八峯の椿のやうに、今日は委曲を盡してお暮し下さい。男兒の方々よ。

【釋義】 奥山の八峯の椿 以上は、ツバラカと云はむが爲の序で、一首の意味には關係は無いのであるが、多分その席上に、椿をも折つて生けてあつたので、それに寄せて歌つたものであらう。ツバキツバラカニと同音によつて懸かる序である。ヤツヲは、峰の重り合つてゐるもの。つばらかに 委曲にの意。つばらかに暮すとは、心中の曲折を残る所なく盡して日を暮すの意。今日は暮さね 今日暮し給へと願望する語法。丈夫の伴 宴席に連つてゐる人々をさしていふ。立派な男子の方々よ。紳士諸君といふやうな味で、もつと武ばつた語である。

漢人も 筏浮べて 遊ぶとふ 今日ぞ我が夫子 花纏せよ

【原文】 漢人毛 楫浮而 遊云 今日曾和我勢故 花纏世余

【口譯】 支那の人も筏を水に浮べて遊ぶといふ今日ですぞ。わが君よ、花の纏をお掛け下さい。

【釋義】 漢人も カラは、朝鮮支那を通じての總稱である。支那では、三月の上の巳の日に、流水のほとりに祝飲する習であつたが、魏の文帝の時に至つて、三月三日に定められた。これを曲水の宴といふ。日本でも、その風を移してこの宴を催すので、漢土の人もと稱し云ふのである。筏浮べて 曲水の宴は、水邊の遊宴であるから、船を浮べて遊ぶのである。イカダは、木を組み編んで、水に浮べるもの。遊ぶとふ 遊ぶといふの義。連體形である。今日ぞ我が夫子 我が夫子は、宴席に來會した人々をさしていふ。花纏せよ 花を編んで纏とせよと勸めてゐる。この句、原文花纏世余とある。校本萬葉集を検するに、元曆校本に花纏世余に作り、余の右に別筆にて余とある。類聚古集、西本願寺本、神田本、温故堂本、大矢本、京都帝國大學本には、皆花纏世余に作つてゐる。或は、類聚古集流の方が正傳で、ハナカヅラセナと讀むべきものかも知れぬ。ハナカヅラセナも、他に對して、願望の語法である。

【餘論】 大陸の人も遊ぶことであるから、諸君も、愉快に遊ぶがよいといふ、大陸崇拜の思想が窺はれる。もと／＼彼の土の風習を移して、三月三日の宴の行はれる、その事からが、既に大陸崇信の念の敦いことを語つてゐるのであつた。

楫は金澤文庫本による。

四四一六

○勇士の名を振ふを慕ふ歌一首并に短歌
 ちちの實の 父の命 柞葉の 母の命 凡ろかに 情盡して 念ふらむ その子な
 れやも 丈夫や 空しくあるべき 梓弓 末振り起し 投矢以ち 千尋射渡し 劔
 刀 腰に取り佩き あしひきの 八峯踏み越え 差し任くる 情障らず 後の代の
 語り繼ぐべく 名を立つべしも

【原文】 慕振勇士之名歌一首并短歌

智智乃實乃 父能美許等 波播蘇葉乃 母能美已等 於保呂可爾 情盡而 念良牟 其子奈禮夜母 大夫夜
 無奈之久可在 梓弓 須惠布理於許之 投矢毛知 千尋射和多之 劔刀 許思爾等理波伎 安之比奇能 八峰
 布美越 左之麻久流 情不障 後代乃 可多利都具倍久 名乎多都倍志母

【體意】 山上憶良の勇士の名を振ふを願ふ歌に、大伴家持が、後になつて和した歌である。憶良の原歌は、本集
 卷六に見える、痾に沈める時の歌

をのこやも空しかるべき、萬代に語り繼ぐべき名は立てずして（九七八、本書四二七頁）
 であると、普通に云はれてゐるが、その歌以外に、或は長歌の作があつたものであらうかと思はれる。

【口譯】 父上や母君が、なほざりに心を盡して思つてゐるでせうその子ではない。男兒は空しくあるべきもので
 無い。梓弓の末を振り起し、投矢を以つて遠くまで射渡し、劔刀を腰に佩いて、多くの峯を踏み越え、任命せ
 られたことは障害無く決行して、後の世の語り繼ぐやうに、名を立つべきである。

【釋義】 ちちの實の 父の枕詞。同音を重ねて接してゐる。チチは、樹名であらうが、その實物を審にせぬ。仙

五四一六

覺は、楊梅の木に似た木で、實は胡桃の如く、熟すると赤くなるといふ。父の命 ミコトは尊稱である。柞葉
 の 母の枕詞。同音を重ねて接してゐる。ハハツは樹名。櫛の異名。凡ろかに おろそかに、等閑に。その子
 なれやも 反語で、その子ならむや、その子にはあらじの意。情を盡すことを等閑に思つてゐる子ではないの
 意。投矢以ち ナグヤは、ただ矢といふに同じであらう。ナグは、平ぐ、和げる、反抗者を鎮める意であつた
 ものが、語原意識を失つて、投矢の字を宛てたのであらう。さし任くる 任命する。サシは添へた詞。情障ら
 ず 任命せられた精神を、障害なく。任命せられた通りに決行する。

丈夫は 名をし立つべし 後の代に 聞き繼ぐ人も 語り續ぐがね

右の二首は 山上憶良の臣の作れる歌に追和せり

【原文】 大夫者 名乎之立倍之 後代爾 聞繼人毛 可多里都具我禰

右二首 追和山上憶良臣作歌

【口譯】 男兒は名を立つべきである。後の代に聞き繼ぐ人も語り繼ぐであらう。

【釋義】 名をし立つべし 上のシは、語勢を強める爲の助辭である。語り繼ぐがね 語り繼ぐならむの意。ガネ
 は將來を期待する語意。（考説追記がね解七八頁参照）

○十二日 布勢の水海に遊覽し 船を多祜の灣に泊めて 藤花を望み見て
 各懷を述べて作れる歌四首（三首略）

九四一九

藤浪の影なす海の底清み 沈著く石をも 珠とぞ吾が見る
守大伴宿禰家持

多粘は元
曆校本等
による

【原文】 十二日 遊覽布勢水海 船泊於多粘灣 望見藤花 各述懷作歌四首
藤奈美能 影成海之 底清美 之都久石乎毛 珠等曾吾見流
守大伴宿禰家持

【題意】 天平勝寶二年四月十二日、布勢の水海に遊覽し、船を多粘灣に留めて、藤の花を見て、詠んだ歌のうちで、この一首は、家持の作である。布勢の水海は、越中の氷見郡にある湖水で、今は田園となつてゐる。多粘灣は、その湖水の一灣。

【口譯】 藤の花の影をなしてゐる湖水の底が清さに、沈んでゐる石をも、玉と見ることである。

【釋義】 藤浪の 藤の花が、靡くさま、浪のやうにあるから、藤浪といふ。本集にも藤浪と書いてあるところが多くある。或は、藤靡の義か。浪にしても、やはり靡から出發した語であらう。沈著く石をも シツクは、沈むに同じ。

○時に雪を積みて 重巖の起てるを彫り成し 奇巧草樹の花を綵り發く

此に屬きて 椽久米朝臣廣繩の作れる歌一首

瞿麥は 秋咲くものを 君が家の 雪の巖に 咲けりけるかも

【原文】 于時 積雪彫成重巖之起 奇巧綵發草樹之花 屬此 椽久米朝臣廣繩作歌一首

一四二三

奈泥之故波 秋咲物乎 君宅之 雪巖爾 左家理家流可母

【題意】 天平勝寶三年正月三日、越中介内藏繩麻呂の館に宴した時、雪を積んで、巖石の重り立つてゐる状を作り、それに草花を彩り咲かせた。これを見て越中椽久米廣繩の詠んだ作。

【口譯】 撫子は秋咲くものであるのを、君が家の雪の巖に咲いてゐることであつた。

○遊行女婦蒲生娘子の歌一首

雪の島 巖に植ゑたる 瞿麥は 千世に咲かぬか 君が挿頭に

【原文】 遊行女婦蒲生娘子歌一首

雪島 巖爾殖有 奈泥之故波 千世爾閑奴可 君之挿頭爾

【題意】 同じ時、遊行女婦蒲生娘子が作った歌。

【口譯】 雪で作つた島の巖に立つてゐる撫子は、千代に咲いて欲しいと、あなたの挿頭の爲に。

【釋義】 雪の島 シマは林泉の義で、こゝでは雪で作つた作り庭をいふ。巖に植ゑたる 雪の巖に描いた花を植ゑたと云つてゐる。千世に咲かぬか いつまでも咲いてゐないであらうか、咲いてゐて欲しいと、願望する語法である。

【餘論】 雪を積んで、興を添へたこと、遊行女婦があつて、彼等地方廳に勤めてゐる役人の酒席を助けたことなどが知られる。

二四二三

八四二四

忽は元曆
校本等に
よる。

○七月十七日を以ちて 少納言に遷任せらえき 仍りて悲別の歌を作りて 朝集使椽久米朝臣廣繩の館に贈り貽せる二首

既に六載の期に満ち たちまち遷替の運に値ふ ここに舊に別るる悽 心中に
鬱結す 滯を拭ふ袖 何を以ちてか能く早かむ 因りて悲歌二首を作りて 式
ちて忘るることなき志を遺す 其の詞に曰はく

あらたまの 年の緒長く 相見てし 彼の心引 忘れえめやも

【原文】 以七月十七日 遷任少納言 仍作悲別之歌 贈始朝集使椽久米朝臣廣繩之館二首

既滿六載之期 忽值遷替之運 於是別舊之悽 心中鬱結 拭滯之袖 何以能早 因作悲歌二首 式遺
莫忘之志 其詞曰

荒玉乃 年緒長久 相見氏之 彼心引 將忘也毛

【題意】 大伴家持は、天平勝寶三年七月十七日に、少納言に轉任したので、越中から上京しようとして、別を悲む歌を作つて、八月四日、當時朝集使として京に上り、任地に居なかつた越中椽久米廣繩の館に贈り貽した歌二首で、序文を附してゐる。朝集使は、毎年、國の役人がその國內の諸事を記した朝集帳を持つて、中央政府に報告に行く使。

【序意】 まう六年の任期が満ち、急に遷り易る運命に接した。こゝに馴れた方に別れる傷みは、心の中に滯つてゐます。涙を拭ふ袖は、何としても乾きませぬ。よつて悲の歌二首を作つて、これによつて忘れることの無い志を残します。その歌。

九四二四

六載の期 國司の任期は、時代に依つて相違があるが、この時代は五年であつたと見え、家持は天平十八年六月から天平勝寶三年七月まで、滿五個年、六年に亙つて越中守の任にあつた。然るにこの後八年を経て天平寶

字二年十月の勅に「頃年、國司交替すること皆四年を限とす。斯は適民を勞するに足る。今より後、六歳を限とすべし」とあるは、いささか不審である。

【口譯】 永い年の間、接することを得ました御芳情は、忘れることではございませぬ。

【釋義】 あらたまの 年の緒長く 年を、緒に譬へてゐる。年の長い間。相見てし 相は、互にの意を含んでゐるが、下の彼の心引に懸かるのであるから、主として家持が見た意になる。彼の心引 ココロヒキは、ひいきにすること、同情、芳情等の意で、家持に對する廣繩の厚意である。

伊波世野に 秋萩凌ぎ 馬竝めて 始鷹獵だに 爲すや別れむ

右 八月四日贈る

【原文】 伊波世野爾 秋芽子之努藝 馬竝 始鷹獵太爾 不爲哉將別

右 八月四日贈之

【口譯】 伊波世野に、秋萩を押し伏せ、馬を並べて、今年の初鷹狩だけでも、しないで別れるのでせうか。

【釋義】 伊波世野に 越中の國の地名。始鷹獵だに ハツトガリは、秋になつて始めてする鷹狩をいふ。ダニは、それすらもの意。

○四二九

多奈毗伎
は元曆校
本等によ

○二十三日 興に依りて作れる歌二首
春の野に 霞たなびき うらがなし この夕かけに うぐひす鳴くも

【原文】 二十三日 依興作歌二首

春野爾 霞多奈毗伎 宇良悲 許能暮影爾 鶯奈久母

【題意】 天平勝寶五年二月二十三日、興に乗じて作つた歌。家持の作。

【口譯】 春の野に霞がたなびいて、心に悲哀を催させる。この夕日の光に鶯が鳴いてゐる。

【釋義】 うらがなし 表面に現さず、心中に悲を含む形容である。この夕かけに この夕日の光に。夕日影に。鶯鳴くも モは、感嘆の助詞。

【餘論】 前にも、春の野に霞がたなびいて、心ぐく思はれる意の歌はあつたが、こゝに至つて、直にうら悲しと叙してゐる。よほど都會情緒に慣れて、作者の心が、物に驚き易くなつてゐる趣である。古くは、季節に對する心が、實生活に即してゐて、春の景に接して、悲哀の歎を抱くといふことなどは無かつたのであるが、こゝに至つて、かういふ文人的生活が打開せられたことは注意するに足りる。三句でうら悲しと切つておいて、四五句で、別に實景を叙してゐるのは、効果が多い。この歌の奥行きを深からしめる所以である。

一四二九

わが屋戸の いささ群竹 吹く風の 音のかそけき この夕かも

【原文】 和我屋度能 伊佐左村竹 布久風能 於等能可蘇氣伎 許能由布散可母

【口譯】 わが家の戸口の、いささかの竹群を、吹く風の音のかすかなこの夕であるよ。

【釋義】 いささ群竹 イササは、聊ある。群竹は、竹の群立。音のかそけき カソケキは、かすかにある形容。

【餘論】 家持も、この邊の歌になると、その歌を完成して、さすがに一家の風格を備へるやうになつた。そは文人風の、繊細な味が出て來たに因るもので、大體、古拙から清新に移る、奈良朝時代の全歌壇と、推移を共にしてゐるのである。

○二十五日作れる歌一首

うらうらに 照れる春日に 雲雀あがり 情悲しも 獨しおもへば

春の日遅遅に 鶴鷓正に啼く 悵悵の意 歌にあらずは撥ひ難し 仍りて此の

歌を作り 式ちて締緒を展ぶ

【原文】 二十五日作歌一首

宇良宇良爾 照流春日爾 比婆理安我理 情悲毛 比登理志於母倍婆

春日遅々 鶴鷓正啼 悵悵之意 非歌難撥耳 仍作此歌 式展締緒

【題意】 同月二十五日作つた歌。左註にその子細を記してある。春の日が遅々として、鶴鷓が正に啼いてゐる。悲みの思は歌でなければ撥ひ難い。よつてこの歌を作つて、思を叙したのである。鶴鷓は、倭名類聚鈔にも、ヒバリとしてゐるが、支那では、雲雀をいふのではないさうである。詩經に、春日遅々、井木萋々、倉庚啾々、采繁祁々とあるは、今の左註の據りどころのやうであるが、この倉庚は鶯であるといひ、又代匠記精撰本に、爾雅の註疏を擧げて、倉庚は、鶯でも雲雀でも無い別の鳥であると記してゐる。締緒は、結んで解けざる心緒。

二四二九

辭結せる思。

【口譯】 うららかに照れる春の日に、雲雀が空に揚り、獨物を思へば心が悲しいことである。
 【餘論】 古い歌では獨思ふといへば、異性を思ふことと解してよかつたのであるが、この歌では、妻の傍にのみな
 い寂しさはあるであらうが、それから導かれた、ひとり風物に對する寂寥感が主脈を成してゐる。文人としての
 の家持を、こゝに見出すべきである。

○族に喩す歌一首并に短歌

ひさかたの 天の戸開き 高千穂の 嶽に天降りし 皇祖の 神の御代より 梶弓
 を 手握り持たし 眞鹿兒矢を 手挟み添へて 大久米の 丈夫武雄を 先に立て
 鞆取り負せ 山河を 磐根さくみて 履みとほり 國覓しつつ ちはやぶる 神を
 ことむけ 服従はぬ 人をも和し 掃き清め 仕へ奉りて 明つ島 大和の國の
 檀原の 畝傍の宮に 宮柱 太知り立てて 天の下 知らしめしける 皇祖の 天
 の日嗣と つぎて来る 君の御代御代 隠さはぬ 明き心を 皇方に 極め盡して
 仕へ来る 祖の職と 言立てて 授け給へる 子孫の いや繼ぎ繼ぎに 見る人の
 語りつぎてて 聞く人の 鑒にせむを 惜しき 清きその名ぞ おほろかに 心思
 ひて 虚言も 祖の名斷つな 大伴の 氏と名に負へる 健男の伴

【原文】 喩族歌一首并短歌

五〇四四六

多婆左美
は元曆校
本等によ

可之波良
は元曆校
本による

比左加多能 安麻能刀比良伎 多可知保乃 多氣爾阿毛理之 須賣呂伎能 可未能御代欲利 波自由美乎 多
 爾藝利母多之 麻可胡也乎 多婆左美蘇倍豆 於保久米能 麻須良多祁乎乎 佐吉爾多豆 由伎登利於保世
 山河乎 伊波禰左久美豆 布美等保利 久爾麻藝之都都 知波夜夫流 神乎許等牟氣 麻都呂倍奴 比等乎母
 夜波之 波吉伎欲米 都可倍麻都里豆 安吉豆之萬 夜萬登能久爾乃 可之波良能 宇禰備乃宮爾 美也婆之
 良 布刀之利多豆氏 安米能之多 之良志賣之祢流 須賣呂伎能 安麻能日繼等 都藝豆久流 伎美能御代御
 代 加久佐波奴 安加吉許己呂乎 須賣良弊爾 伎波米都久之豆 都加倍久流 於夜能都可佐等 許等太豆氏
 佐豆氣多麻敵流 宇美乃古能 伊也都藝都岐爾 美流比等乃 可多里都藝豆氏 伎久比等能 可我見爾世武乎
 安多良之伎 吉用伎曾乃名曾 於煩呂加爾 己許呂於母比豆 牟奈許等母 於夜乃名多都奈 大伴乃 宇治等
 名爾於敵流 麻須良乎能等母

【題意】 この歌の反歌の左に、淡海三船の讒によつて、出雲守大伴古慈悲が解任せられたので、大伴家持がこの
 歌を作ると記してある。古慈悲は家持と一族であるから、族に喩す歌と題したのである。讒は、悪言を構へて
 他を毀るをいふ。これは、天平勝寶八歳五月のことで、續日本紀には、「出雲國守從四位上大伴宿禰古慈悲、内
 豎淡海真人三船、朝廷を誹謗し、人臣の禮無きに座して、左右衛士府に禁ぜらる」とある。すなはち、この讒
 言は、三船が古慈悲を讒言したのでは無くて、三船が朝廷を誹謗したのに、古慈悲が關係あつて連座したので
 あらう。三船は、初の名は三船の王、弘文天皇の曾孫、葛野の王の孫、池邊の王の子である。詩文をよくした。
 おそらくは筆禍を得たのであらう。古慈悲は、大伴吹負の孫、祖父麻呂の子、橘奈良麻呂の亂に、土佐に流さ
 れたが、後赦されて、寶龜八年に至つて薨じた。なほ家持のこの歌は、六月十七日に作つたのである。

【口譯】 天の戸を開いて、高千穂の嶽に天降つた、皇祖の御代から、梶弓を手に取り持ち、眞鹿兒矢を手挟み添へて、大久米の勇士を先に立て、靱を背負はせ、山河を、磬を踏み破つて通行し、國を求めつつ、亂暴な神を征討し、服従しない人をも平げ、掃き清めお仕へ申し上げて、大和の國の樞原の畝傍の宮に、宮殿を立派に立てて、天下を御統治遊ばした、皇祖の、御世嗣として繼いで来る天皇の御代御代に、隠す所の無い眞心を、皇室に極め盡してお仕へ申し来る、祖先以來の職務であると、特に言ひ立ててお授け下さつたのを、子孫の、いよ／＼次々に、見る人が語り繼いで、聞く人の手本にしようものを。惜むべき清きその名であるぞ。おろそかに心に思つて、かりそめにも祖先の名を斷絶させるな。大伴の氏と名に負つてゐる男兒の人々よ。

【釋義】 天の戸開き 天を家に譬へて、天から現れ来るを、かく叙してゐる。日本書紀神代の卷に「高皇產靈の尊、眞床の覆衾に、天津彦國光彦天の瓊々杵の尊を裏みて、天の磬戸を引き開き、天の八重雲を排し分けて降し奉りき」とある。高千穂の嶽に天降りし 古事記に天孫、「筑紫の日向の高千穂のくしふる嶽に天降りましき」とあり。日本書紀にも日向の襲の高千穂の峰とある。アモルは、アマオルの約言で、天から降下する意。皇祖の 瓊々杵の尊をいふ。梶弓を 古事記、天孫降臨の段に、「天の忍日の命、天津久米の命二人、天の石靱を取り負ひ、頭椎の大刀を取り佩き、天の波士弓を取り持ち、天の眞鹿兒矢を手挟み、御前に立ちて仕へ奉りき」とある。この天の忍日の命、すなはち大伴氏の祖先である。梶の木の弓である。梶は、櫛の樹に同じ。眞鹿兒矢を 出典は上にある。マは接頭語。鹿を射る矢、獵に使ふ矢である。大久米の丈夫武雄を 大伴氏の祖先は、大久米を率ひて奉仕したといふのである。靱取り負せ 靱は獸革にて作り、矢を入れて負ふ器。磬根さくみて イハネは巖石。サクミは、踏み裂き砕くである。國覓しつ 國を覓めつつ。ちはやぶる 暴威ある

意で、こゝでは枕詞ではない。神をことむけ コトムケは、服従せしむるをいふ。人をも和し ヤハシは、和げる。掃き清め 妖物を拂つて、清淨にする意で、掃除するやうに云つてゐる。明つ島 大和の枕詞。樞原の畝傍の宮 神武天皇の宮室。天の日嗣と 帝室の御繼嗣として。隠さはぬ明き心 隠すところの無い明い心。赤心。誠忠の心。皇方に 皇室の方向に。祖の職と 祖先の職務として。大伴氏の武人として世襲して來た職をいふ。言立てて 特に聲言して。授け給へる 天皇よりお授けになつた意であるが、文章上に多少の不審はある。連體形ではあるが、次の句には續かない。授け給へることなるをの意であらう。語り繼ぎてて 古義に「語次なり。次第々に語り繼ぎての意なり。次第を、都藝氏々と用かしのいふは、掟を於伎氏々といふに同格なり。つれづれ草にも、高名の木のぼりといひし男、人をおきて、たかき木にのぼせて梢をきらせしに云々とある、このおきて、掟而にて同格なり」とある。おほろかに おろそかに、なほざりに。虚言も 實の無い言も、かりそめの言にも。祖の名斷つな 祖先以來の名を斷絶するな。家名を落すなとの意。

④四四六

磯城島の 倭の國に 明けき 名に負ふ伴の緒 ころ勤めよ

【原文】 之奇志麻乃 夜末等能久爾々 安伎良氣伎 名爾於布等毛能乎 已許呂都刀米與

【口譯】 この日本の國に、明るい清い名を負つてゐる人々よ。心を勵して下さい。

【釋義】 磯城島の 大和の枕詞。大和の内の一地名より起つて、全國的の枕詞となつてゐる。倭の國に この日本の國に。広い意味に、ヤマトを用ゐてゐる。明けき 明るい、陰影の無い、清らかな。名に負ふ伴の緒 清き名に知られてゐる人々。名に負ふは、名前どほりの、名にそむかぬ。トモノヲは、男兒たち。心勤めよ 精

神を振興して、怠ること勿れ。

七四四六

劍刀 つるぎ いよよ研ぐべし 古ゆ いにしへ 清けく負ひて 來にしその名ぞ

右 淡海真人三船の讒言に縁りて 出雲守大伴古慈悲の宿禰解任せり 是を以ちて家持此の歌を作れるなり

【原文】 都流藝多知 伊與餘刀具倍之 伊爾之敏山 佐夜氣久於比豆 伎爾之曾乃名曾

右 縁淡海真人三船讒言 出雲守大伴古慈悲宿禰解任 是以家持作此歌也

【口譯】 劍刀をいよいよ磨ぐべきである。古代から清く名に負つて來た、その大伴といふ名であるぞ。

【餘論】 大伴氏の、名族としての誇、さういふものを家持は、信仰的に感じてゐる。その名譽を保持し、傳承して行かうとして、一族の妄動を誡めた家持が、よく描かれてゐる。長歌の末の方には、やゝ句法の亂れの見えるのは、傳來の過か、作者の緩怠では無いであらう。

○病に臥して無常を悲み 修道を欲して作れる歌二首

現身は 數なき身なり 山河の 清けき見つつ 道を尋ねな

【原文】 臥病悲無常 欲修道作歌二首

宇都世美波 加受奈吉身奈利 夜麻加波乃 佐夜氣吉見都都 美知乎多豆禰奈

【題意】 同じき六月十七日に作つた家持の歌で、病床に臥して、世間の無常を悲み、佛道を修めようと思つて作

八四四六

つた歌である。

【口譯】 この現世の身は、數無き身である。山や川の清きところを見ながら、佛の道を探ねたいものである。

【釋義】 數なき身なり 何程も無い身である。常無き身である。物の數ともなき身であるの意。世の中は數無きものか、春花の散りのまがひに死ぬべき思へば（卷十七、三九六三）。道を探ねな 道は、佛道。佛道の修業をして、正覺を求め得ようとする意を譬喩で現してゐる。

九四四六

渡る日の 陰に競ひて 尋ねてな 清きその道 またも遇はむため

【原文】 和多流日能 加氣爾伎保比豆 多豆禰豆奈 伎欲吉曾能美知 末多母安波無多米

【口譯】 空を渡る日と競争して道を求めたいものである。清きその道に、又來世で逢はう爲に。

【釋義】 渡る日の陰に競ひて 日光と争うて、光陰を惜み、時を争うての意である。清きその道 佛道を譬へいふ。またも遇はむため 前生に善因を得て。今幸に佛道に値遇したのであるが、次の生にてもまたこの佛道に遇はむ爲に、この世で勝因を作つておかうとである。

○壽を願ひて作れる歌一首

泡沫なす 假れる身ぞとは 知れども 猶し願ひつ 千歳の命を

以前の歌六首は 六月十七日 大伴宿禰家持作る

【原文】 願壽作歌一首

一六六 伴家持

〇四四七

彌我比都
は元曆校
本等に
よる。

美都煩奈須 可禮流身曾等波 之禮禮杼母 奈保之彌我比都 知等世能伊乃知乎
以前歌六首 六月十七日 大伴宿禰家持作

【題意】 壽命を願うて詠んだ歌である。以前の六首は、族に喩す歌以下をいふ。

【口譯】 水の沫のやうに假の身であるとは知つてゐるが、なほも千年の命を願つたことである。

【釋義】 泡沫なす 泡沫のやうに。ミツボは、水粒であらう。金剛般若經に「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀」とある。假れる身ぞとは、假に成つた身であるとは。知れども 知るに、助動詞が添ひ、その逆態條件法を成したのである。知つてはゐるけれども。猶し願ひつ シは強める助辭。それでもやはり願つたことである。

二四四八

○三月四日 兵部大丞大原真人今城の宅にて 宴せる歌一首

掘江越え 遠き里まで 送りける 君が心は 忘らゆましじ

右の一首は 播磨介藤原朝臣執弓 任に赴くと 別を悲しめるなり 主人大原

今城傳へ讀みて云ふこと耐なり

【原文】 三月四日 於兵部大丞大原真人今城之宅 宴歌一首

保里延故要 等保伎佐刀麻豆 於久利家流 伎美我許已呂波 和須良由麻之自

右一首 播磨介藤原朝臣執弓 赴任悲別也 主人大原今城傳讀云爾

【題意】 天平勝寶九歳の三月四日に、大原今城の宅で宴を開いた時、主人今城が傳へ讀んだ歌で、播磨介藤原執

麻之自は
元曆校本
による。

弓が、任に赴くに當つて別を悲んで作つた歌である。この日の宴に家持も列席して、記し留めておいたものである。

【口譯】 掘江を越えて、遠い里まで送つて来たあなたのお心は忘られますまい。

【釋義】 掘江越え 難波の掘江を越えて。忘らゆましじ 原文もと和須良由麻之目とあつて、ワスラエマシメ、又はワスラエマシモと讀んでゐた。今、橋本進吉氏の説により、元曆校本に従つて、目を自とし、ワスラエマシジとする。マシジは、中世のマジの原形で、否定の推量である。マシジ、マシジキ、マシジミの形がある。忘れられまいの意。山越えて海渡るともおもしろき今城のうちは忘らゆましじ（齊明天皇紀）。

○勝寶九歳六月二十三日 大監物三形の王の宅にて宴せる歌一首

移り行く 時見る毎に 心いたく 昔の人し 思ほゆるかも

右 兵部大輔大伴宿禰家持作

【原文】 勝寶九歳六月二十三日 於大監物三形王之宅 宴歌一首

宇都里由久 時見其登爾 許已呂伊多久 牟可之能比等之 於毛保由流加母

右 兵部大輔大伴宿禰家持作

【題意】 天平勝寶九歳六月二十三日、三形の王の宅で宴をした時の歌で、大伴家持の作。

【口譯】 移り行く時を見るごとに、心悩ましく昔の人が思はれることである。

【釋義】 心いたく 心に打撃をおぼえる形容である。

三四四八

【餘論】天平勝寶九歲、この年八月十八日に改元して、天平寶字元年と爲した年である。三月、皇太子鹽燒の王を廢し、四月大炊の王を立てて皇太子と爲した。五月、藤原仲麻呂を紫微内相と爲した。六月中に至つて、橘奈良麻呂を中心とし、叛意を構ふること、漸く熟しつあつた。大伴氏の人々、多くこれに參與してゐるので、家持もほぼその空氣を察し、仲麻呂の横暴を慨いてゐるものと思はれる。うつりゆく時といふこと、ほぼこれを指してゐるのであらう。昔の人は誰であるかわからぬが、或は橘諸兄をさしてゐるのであらうか。

四四八

○
咲く花は うつろふ時あり あしひきの 山菅の根し 長くはありけり
右一首は 大伴宿禰家持 物色の變化を悲しび怜びて作れり

【原文】 佐久波奈波 宇都呂布等伎安里 安之比奇乃 夜麻須我乃禰之 奈我久波安利家里
右一首 大伴宿禰家持 悲_ニ怜物色變化_一作之也

【題意】 前の歌の後、何時の作とも知られない。風物の變化するを悲み憐んで作つた歌。

【口譯】 咲く花は變色する時がある。ただ山菅の根は、長く變らぬものである。

【釋義】 うつろふ時あり ウツロフは、變移する、褪色する。山菅の根し 山菅は、今龍の髯といふ草であるといふ。シは助辭。長くはありけり 山菅の根の長いことを叙して、永久に變化しないものである意を譬へてゐる。

【餘論】 この年六月の末より、橘奈良麻呂、大伴古麻呂等の叛意、やうやく現れて、七月に至つて、獄死し、又

流されるものが多い。その黨は、奈良麻呂、古麻呂を始め、鹽燒の王、安宿の王、黄文の王、道祖の王、大伴池主、多治比鷹主、多治比國人等である。家持は幸にして、この難を免れたけれども、意に仲麻呂の前途を危んで、この歌を作つたものと思はれる。さて、咲く花はうつろふ時ありの句を以つて、これを諷したものであらう。奈良麻呂等の叛意を以つて咲く花に譬へたといふ説は、余の取らざるところである。

○二年春正月三日 侍從豎子王臣等を召して 内裏の東屋の垣下に侍はしめ すなはち玉箒を賜ひて肆宴さこしめす 時に内相藤原朝臣勅を奉りて 宣りけらく 諸の王卿等 堪ふるまにま 意に任せて 歌を作り并に詩を賦せよと 仍りて詔旨に應じ 各心緒を陳べて歌を作り 詩を賦すいまだ諸人の賦詩并に作歌を得ず

始春の 初子の今日の 玉箒 手に執るからに ゆらく玉の緒
右の一首は 右中辨大伴宿禰家持の作 但大藏の政に依りて奏するに堪へざるなり

【原文】 二年春正月三日 召_ニ侍從豎子王臣等_一 令_ニ侍於内裏之東屋垣下_一 即賜_ニ玉箒肆宴_一 于_レ時内相藤原朝臣奉_レ勅宣 諸王卿等 隨_レ堪任意 作_レ歌并賦_レ詩 仍應_ニ詔旨_一 各陳_ニ心緒_一 作_レ歌賦_レ詩未_レ得_ニ諸人之賦詩并作歌_一也
始春乃 波都禰乃家布能 多麻婆波伎 手爾等流可良爾 由良久多麻能乎
右一首 右中辨大伴宿禰家持作 但依_ニ大藏政_一不堪_レ奏之

四四九

不堪奏之
は元曆校
本等に
よ

【題意】天平寶字二年正月三日、侍從、豎子、王臣等を召して、内裏の東屋の垣のものに居らしめ、玉箒を賜うて酒宴を遊ばされた。時に紫微内相藤原朝臣、勅を奉じて、諸の王や公卿等、作り得るに従つて、思ひ思ひに歌を作り又は詩を賦せよと、命令を宣べた。よつて勅の旨に應じて、各心情を述べて歌を作り詩を賦した。まだ諸人の詩歌を見るを得ない。この一首は、大伴家持の歌であるが、大藏の政務が忙しかつたので、奏上しなかつた。玉箒は、玉を飾つた箒で、箒は蠶を掃き立てる具であるから、新年の祝ひとして用ゐられたものである。

【口譯】新年の初の子の日の今日の玉箒を、手に取るからに、飾の玉の緒がゆらゆらと揺れる。

【釋義】初子の今日の 子は十二支の最初のもので、特に新年の最初の子の日を祝ふのである。手に執るからにカラニは、故に。ゆらく玉の緒 箒につけた玉の緒の飾が揺れて、玉が微妙なる音を立てるよしである。



玉箒

水鳥の 鴨羽の色の 青馬を 今日見る人は かぎり無しと云ふ
 右の一首は 七日の侍宴の爲に 右中辨大伴宿禰家持 預ねて此の歌を作れり
 但仁王會の事に依り 却りて六日を以ちて内裏に諸の王卿等を召して 酒を賜
 ひ肆 宴きこしめし 祿を給へり 斯に因りて奏せざりき

可毛羽能
は元原校
本等によ
る。

【原文】 水鳥乃 可毛羽能伊呂乃 青馬乎 家布美流比等波 可藝利奈之等伊布

右一首 爲ニ七日侍宴ニ 右中辨大伴宿禰家持 預作ニ此歌ニ 但依仁王會事ニ 却以ニ六日ニ 於ニ内裏ニ召ニ諸王卿等ニ賜酒肆宴給祿 因斯不奏也

【題意】 同年一月七日の御宴の爲に、家持があらかじめこの歌を作つて用意しておいた。然るに、仁王會の事の爲に、却つて六日に、内裏に諸王臣を召して、酒を賜つて宴を催し給ひ、下され物があつた。因つてこの歌は奏上しなかつたのである。仁王會は、朝廷鎮護の爲に、宮中にて仁王護國般若經を講せしめられる儀式。仁王會を行ふ都合があるので、御宴を六日に繰り上げたのであらう。

【口譯】 鴨の羽の色のやうな青い馬を、今日見る人は、命の限が無いといふことである。

【釋義】 水鳥の 鴨の枕詞。鴨羽の色の 鴨の羽の色で、綠色である。次の句の青を起す序となつてゐる。水鳥の鴨の羽の色の青山のおぼつかなくもおもほゆるかも(卷八、一四五二)。青馬を 中世以後、正月七日の白馬節會をアヲウマノセチエと讀み、事實として白色の馬を牽き出るより、こゝに青馬といふも、實は白色の馬だといふ説がある。又本居宣長の玉勝間には、古くは青色の馬を引いたのを、後に白馬に改めたのだと云つてゐる。水鳥の鴨羽の色のといふ序が、白馬の意味での青馬に懸かるのは、いかにも相應しない。實際青馬であるであらう。後に白馬を引くやうになつて、字は改めたが、なほ舊訓を存したのであらう。正月七日に馬を見るは、年中の邪氣を拂ふ爲である。限なしといふ 壽命が永久であると云ふことであるの意。

○三年春正月一日 因幡の國の應にて 饗を國の郡司等に賜へる宴の歌一首

新しき年の始の初春の今日降る雪の いや重け吉事

右の一首は 守大伴宿禰家持作

【原文】 三年春正月一日 於因幡國廳 賜鑿國郡司等之宴歌一首

新年乃始乃 波都波流能 家布敷流由伎能 伊夜之家餘其騰

右一首 守大伴宿禰家持作之

【題意】 天平寶字三年正月一日、因幡の國の役所で、鑿をその國の郡司等に賜うた時の家持の作。この鑿宴は、官稻を以つてする公の宴である。家持は、前年六月に因幡守に任ぜられてゐる。

【口譯】 新しい年の初の初春の、今日降る雪の積るやうに、吉い事は、いよ／＼重つてあれ。

【釋義】 新しき 新はアラタシキと讀む。アタラシキは、惜むべきの意で別である。いや重け吉事 シケは、頻に重る意の命令法、ヨゴトは吉い事。

【餘論】 この歌は、萬葉集二十卷の最後にある歌で、作られた年代の知れてゐる最後のものである。卷十七以下の四卷はもともと大伴家持の手録に係るもので、こゝにこの歌に終つてゐるのも、年代順であるが、たまく、慶賀の歌であるのは、何か意味があるやうでもしろい。萬葉代匠記に「抑此集、初ニ雄略舒明兩帝ノ民ヲ惠マセ給ヒ世ノ治マレル事ヲ悦ヒ思召ス御歌ヨリ次第ニ載テ、今ノ歌ヲ以テ一部ヲ祝ヒテ終ヘタレハ、玉匣ヲタミ相稱ヘル驗アリテ、藏ス所世ヲ經テ失サルカナ」と記してゐる。編者に、多少その邊の心づかひがあつたことは、或は認めてもよいものであるかもしれない。

考 說 追 記

詞句の義を釋せるものゝうち、やゝ長文に互るものは、別に考說欄を設けて收載し來つたのであるが、同じく考說欄に記すべくして、後に至つて氣附いたもの一二を、こゝに載せておく。

ゆ つ 考 (九四頁に入るべきもの)

この河上乃湯津盤村二(卷一、二二)の歌の初二句に就いて、古くはカハカミノユツハノムラニと讀み、現存せる最古の萬葉註釋書なる、佚名氏の萬葉集抄(秘府本萬葉集抄の名のもとに古今書院の萬葉集叢書に收められてある)に、「カハカミノユツハノ村トハ伊勢國ニアル所也」とある。然るに下河邊長流の萬葉集管見に「此ゆつはの村を名所といひつたへたれと、あやまりなるへし。題に波多横山巖を見て、吹黄刀自か作るうたとかけり。歌には湯都磐村とかけり。されは、是をゆついはむらと讀へし。いはのおほきをいはむらトはいふ也。湯都は五百津といふ詞也。日本紀に、天安河邊に有所の五百津石村といへること有。さて末に草むさずとつゝけよめる、磐石のこときこえたり。」と記してから、後の學者によつて、祝詞古事記に於ける例が加へられて、おほむねこれに従つてゐるやうである。まづ日本書紀にある例といふは、卷一神代上に、伊弉諾の尊が軻遇突智を斬つて三段と爲したといふ段にあるので、

復劍の双より垂る血、こは天の安の河邊にある五百箇磐石と爲りき。

とある文である。これに就いて萬葉考には、「神代紀に五百箇磐石てふ同事を、祝詞に湯津磐村とかき、湯津桂、湯津瓜櫛など、皆木の枝の多く、櫛の刺の繁きをいふ也。仍て古へより五百を約て湯といふを知」とある

が、延喜式の卷八の祝詞の中に五出してゐるのは、皆日本書紀のと違ふ説話の中に用ゐられてゐるので、直に同じ内容を有するものとは速断し難い。すなはち、

四方の御門に湯都磐村の如く塞り坐して（祈年祭、月次祭）
四方の内外の御門に、湯津磐村の如く塞り坐して（御門祭）

大八衢に湯津磐村の如く塞ります皇神等（道饗祭）

とあるので、いづれも、神の鎮座し給ふ状態を形容した譽喩に用ゐてゐる。

また古事記の上巻にある例は、日本書紀と同じく、伊弉諾の尊が火神を斬る段にあつて、

ここにその御刀の前に著ける血、湯津石村に走りつきて成りませる神の名は石拆の神、次に根拆の神、次に石筒の男の神、次に御刀の本に著ける血も、湯津石村に走りつきて成りませる神の名は、速日神、次に樋速日の神、次に建御雷の男の神。

とある。この文と日本書紀の文とを比較するに、同じ説話を語つてゐるものではあるが、湯津石村と五百箇磐石とは、用ゐる方が違つてゐることが知られる。すなはち、古事記では、血が湯津石村に走りついて神が成つたといひ、日本書紀では、血そのものが五百箇磐石となつたといふのである。血が走り散つて多くの磐石となつたといふは、いかにも多数が利いてゐる。血が磐石に走りついて神となつたといふ方は、多数といふことは、重要な内容でないことは注意すべきである。湯津石村は前から在り、五百箇磐石は、これによつて出来たのである。

ユツとイホツと同語であると爲す説は、共に、数の多いことを表すものとするのである。これが果して眞實で
あるかどうか、今まづイホツの方から調べて見よう。

イホツの用例を出して見ると、日本書紀に、八坂瓊之五百箇御統、五百箇眞坂樹、五百箇野薦がある。

萬葉集に、白珠の五百都集（卷十、二〇一二）、朝獵に伊保都登里多底（卷十七、四〇一一）、白珠の伊保都都度比乎（卷十八、四一〇五）、天にはも五百都綱波布（卷十九、四二七四）の例がある。これらの例はいかにも数の多いことと解して通達する。五百箇と書いたものが正字であらう。この外に、鮫玉伊保知毛我母（卷十七、四一〇一）、金釧も伊本知母賀母（古事記下巻）のイホチも、五百箇の意と解してよいであらう。

翻つてユツの方の意義を考へて見よう。古事記下巻に、波毘呂由都麻都婆岐が二出してゐるのは、葉廣ユツ眞椿なるべく、日本書紀の卷二に湯津杜樹の例もある。樹木にユツといふは、日本書紀の五百箇眞坂樹、五百枝賢木の例によつて、枝の繁茂してゐる義とすれば、岩石にユツといふもかさなり合つてゐる形容とも取れよう。古事記に血が湯津磐村に走りついたといふも、祝詞に、門戸の神が、湯津磐村のやうに鎮座せられたとあるも、この義によるものとすべきであらう。湯津瓜櫛（日本書紀）のユツも、櫛の齒の多い義に解せられてゐる。

しかし一方にまた、ユといふ語がある。他の名詞に添うて、湯種（二一一〇、三六〇三）、湯小竹（二三三六）と記されてゐる。湯（熱水）は、物を清浄にする力が信ぜられてゐたので、神事に湯を用ゐるのは、その心である。湯種は、清浄にした種子であり、湯小竹は、神事に用ゐる小竹から出發したものと考へられる。山槻（一〇八七）、弓槻（二三三三）とあるも、恐らくは樹木信仰から出た語なるべく、また動詞としてユム（齊、忌）、形容詞としてユユシ（忌忌し）が派出したものと認められる。

古語に、ユとイと通することは、夢、壹岐、行く、忌む等の例によつて明であるが、ユツがイホツと同語であ

ると爲すは、眞淵の、イホを約めてユとすといふ説にもとづき、本居宣長の、「伊富を切れば與なれど、與と由とは殊に近く通ふ音なり。自を古言に由とも與とも云たぐひなり」(古事記傳)といふに依る。しかし、ユツ磐村と、イホツ磐石とを、必同語とせねばならぬわけも無いことは、上述の通りであるし、台記に載せた中臣の壽詞には、由都五百箇生ひ出でむといふ句もある。これを、山都か五百かどちらかは衍であるとするよりも、ユツを齋つの義とすれば、どの例も何の障も無く通達するのである。多くの例に湯津と書いてあるのは、ユの音を借りたもので無くして、その内容をも表してゐるものであらう。ツは、助辭で、天つ神、沖つ波、野つ鳥のツと同語と思はれる。

すなはち、ユツ磐群は、神聖なる岩石群の謂で、岩石信仰を表す語。ユツ眞椿、ユツ杜樹は、同様に樹木信仰を表す語と思はれる。櫛に神祕な力があることは、種々の説話ともなつて居るので、ユツ瓜櫛の語があるのも不思議でない。これらのユツを五百箇の義として、強ひて説明するよりも、自然な説明を得るものである。以上の考案によつて、ユツとイホツとは、別語であらうと爲すのである。

がね 解 (二九二頁に入るべきもの)

萬葉集卷第三に、笠朝臣金村が鹽津山にての作歌、
丈夫の弓上振り起て射つる矢を後見む人は語り繼ぐがね(三六四)
このガネの語について、本居宣長の詞の玉の緒には、

がねは、中昔の言に、きさきがね、坊がね、むこがね、博士がねなどいへる、がねと同じくて、かねてそ

の料にまうけてまつ意也。

とあり、古義には、之根の字義で、其が根本といふより起れる詞と説き、諸註これに同じて、語り繼ぐ爲に、語り繼ぐべくの意に解して居るやうである。この后がね、坊がねの種の用例は、古いところでは、

高行くや隼別の御製料(古事記中卷)

の例がある。これは體言に續く例で、正しく、儲のものの意に解せられる。然るに萬葉集に於けるガネの用例は、多少趣を異にして前掲の金村の歌を初出として、皆用言を受けてゐる。今これらの用例をまづ列挙して見よう。

佐保川の岸の司の柴な刈りそ、ありつつも春し來たらば立隠金(卷四、五二九)

萬代に云ひ繼ぐ可禰等(卷五、八一三)

梅の花吾は散らさじ、あをによし平城なる人の來つつ見之根(同、一九〇六)

橋の林を植ゑむ、雀公鳥常に冬まで住度金(同、一九五八)

朝露ににほひそめたる秋山に時雨な零りそ在渡金(卷十、二二七九)

あしひきの山田佃る子秀ですとも細だに延へよ、守ると知金(同、二二一九)

秋つ葉ににほへる衣吾は著じ、君に奉らば夜も著金(同、二三〇四)

雪寒み咲きには咲かず梅の花よしこのころはさても有金(同、二三二九)

里人も謂告我禰、よしゑやし戀ひても死なむ誰が名ならめや(卷十二、二八七三)

いまだ見ぬ人にも告げむ、音のみも名のみも聞きてともし夫流我禰(卷十七、四〇〇〇)

白玉をつつみてやらばあやめ草花橋にあへも奴久我禰(卷十八、四一〇二)
丈夫は名をし立つべし、後の世に聞き繼ぐ人も語り都具我禰(卷十九、四一六五)
霍公鳥聞けども飽かず、網取りに取りて懐けなけれず啼金(同、四一八二)

以上の例のうち、卷十八の白玉をの歌は、ガネを爲に等の意としては通じない。それ故に古義では、第二句の夜良波の波を那の誤として、ヤラナとして句切としてゐる。古本を尋ねるに、元暦校本、類聚古集ともに、波を婆として、ヤラバであることが確められる。

一體、このガネを、爲、料等の意とするのは、后がね、坊がね、御襲がねの例と同じと見ることを根據としてゐる。然るに、后がね等のガネは體言を受けて、それ自身も體言と見られる。萬葉のガネは、用言を受けて、かつ、その品詞は體言とは思はれない。このガネは文の終止を爲すものである。もし體言ならば、多くの例のうちには、その下に他の助辭、助動詞を伴ふものもあつて然るべきである。

暮月夜曉闇の朝影に吾が身は成りぬ、汝を念金丹(卷十一、二六六四)

この例のガネが同語ならば、助辭ニを伴つた例と見られるが、これは別語であらう。

后がね等のガネと、萬葉のガネと、既に語の性質を同じくしてゐない以上、直にこれを同義と見ることは危まれる。意義は別に直さねばなるまい。

依つて前掲の諸例のいづれにも適合する意義を求むるに、將來に期待し推量する意で、品詞としては助辭に屬するものと思はれる。四段活、上一段活、良行變格の動詞を受けてゐるが、四段活、上一段活のは、終止形と連體形と同一であるから、そのどちらを受けてゐるか明でない。良行變格の動詞有りに依れば、連體形を受ける

のであらうか。これとて有金とある字面ゆゑ、アルガネとも、アリガネとも読み得られよう。

おもしろき野をばな焼きそ、古草に新草まじり生ひば生ふるがに(卷十四、三四五二)

この歌のガニを、ガネの訛として見れば、これは連體形を受けてゐることになる。この歌は東歌であるが、これを準則と爲し得べくば、著金をケヌガネと讀む説は誤となる。又日本書紀顯宗天皇の卷の古註に、美飲喫哉、此をばウマラニヤラフルガネといふとあるも、連體形を受けたと爲すべきもののやうである。

さてガネを將來に對する期待推量の助辭として見る時に、それ／＼の歌の意義なり生命なりが、多少とも前人の解と異つて來るのは勿論である。ガネを分解すると、ネは名告らさね等のネと同じで、語を丁寧にする意の助辭であらうと思はれる。用言の連體形を受けるのは、當然しかあるべき意があつて、希望要求の意はむしろ薄いものと見たい。例へば、語り繼ぐがねは、語り繼ぐことでありませう位の意に解せられる。

なほガネと、音の似てゐるガニについては、古義にガネとガニとは別であると爲す説がよい。しかし之の謂であるといふは採れない。こはやはり助辭で、このガは明に用言の終止形を受けてゐる。下の助辭ニによつて、主として副詞句に導かれるものと考へられる。

山田孝雄氏の奈良朝文法史には、既にガネを助辭として取り扱つてゐるが、今重ねてこれを記しておく。

下編 自然と人事

萬葉集歌史の編では、集中の歌を、ほぼ時代を追うて講述し來つたが、集中には、卷七、十、十一、十二、十三、十四、その他に時代も作者も傳はらない歌が少からずある。歌の格調内容、もしくは編次の順序等を考察すれば、多少判断の著くべきものもあらうが、今これらを一團とし、主として、内容によつて分類してこれを講述し、以つて萬葉時代人の生活の一端を描かうと思ふ。故にこの編の歌は、すべて作者の知られぬ歌をもとし、便宜によつては、一二作者の知られた歌をも附收する。柿本朝臣人麻呂歌集から出た歌には、人麻呂の作品もあるべきであらうが、いづれをそれと指定し難い點があるので、古歌集から出た歌と共に、この編に收めることとした。而してこは、本集に於けると、同一の態度である。

第一章 詠物と羈旅

萬葉歌人の、自然に對する愛は、四季をりくくの歌、又旅に出て、ひとり山海の大景に直面する歌に、最よく現

れてゐる。自然の靈氣を感じ、歌としてこれを語るところに、作者の生活は、律動してゐる。人間以外の自然を對象としたものを集めて、この一章を作る。

一 四季の雜歌

季節の推移に對して、敏感に働いてゐるのは、萬葉歌人の心である。それは、實生活から出發する季節感である故に、根づよい力を持つてゐる。花を賞で、鳥を歌ふ。永い冬の間、待ちあぐんだ憧憬の春だ。歌はれねばならぬのである。鹿をあはれみ、黄葉をよろこぶ。堪へ難かりし暑さからの隠れ家だからである。一方に梅や霍公鳥に對しては、文藝としての、遊びの氣分が生じてゐることも看取される。

○櫻の花の歌一首并に短歌

嬢子らの 挿頭の爲に 遊士の 藪のためと 敷きませる 國のはたてに 咲きに
ける 櫻の花の にほひはもあなに、

【原文】 櫻花歌一首并短歌

嬢嬢等之 頭挿乃多米爾 遊士之 藪之多米等 敷座流 國乃波多氏爾 開爾雜類 櫻花能 丹穗日波母安奈爾

【題意】 櫻の花を詠んだ歌で、若宮年魚麻呂といふものが、誦したもの。この年魚麻呂といふ男は、羈旅歌等注

意すべき歌を誦してゐる。唱歌を職として、宴席に侍したものであらうも知れぬ。

【口譯】 娘さんたちの挿頭の爲に、風流人の護の爲にと、この帝國の隅までも、咲いてゐる櫻の花の、美しさには、全く驚かれます。

【釋義】 遊士の 風雅なる人士の。敷きませる 天皇の御座遊ばされる。大君のといふべきを、省略してゐる。國のはたてに ハタテは極地。國の果までもの意。にほひはもあなに ニホヒは、花の色の光彩。アナニは、美しさに驚く意の感動詞。あなに神さび(卷十六、三八八三)あなにやし好嬢子を(古事記)のアナニに等しい。

○反歌

去年の春 會へりし君に 戀ひにてし 櫻の花は 迎へ來らしも

右の二首は 若宮年魚麻呂誦めり

【原文】 反歌

去年之春 相有之君爾 戀爾手師 櫻花者 迎來良之母

右二首 若宮年魚麻呂誦之

【口譯】 去年の春、會ひましたあなたに戀をして、櫻の花はお迎へに來ましたさうな。

【釋義】 會へりし君に 會ふに、助動詞リとシとが結びついたもの。會つてゐた君に。君は、この歌の詠まれた席の上座の者を指すであらう。去年の春、櫻と出會つた君に。去年櫻を賞した君に。戀ひにてし ニテは、共に助動詞。シは強める爲の助詞。戀ひての意を確めてゐる。誤字ありとの説もあるが、却つて誤である。考説

欄参照。迎へ來らしも 櫻の花は、あなたをお迎へに來たさうなの意。君を迎へるかのやうに花が咲いたの意。モは感動詞。

【考説】 にてし考

萬葉集卷第六、天平五年に、神社忌寸老麻呂が、草香山を越ゆとて作つた歌に、直超のこの道にして押し照るや難波の海と名づけけらしも(卷六、九七七)

この歌の「して」は、原文「師豆」とあるが、元曆校本、神田本等には「豆師」とある。類聚古集、古葉略類聚鈔とに「之師」とあるは、「豆師」の誤であらう。これによれば、第二句は「このみちにてし」であつて、シは助動詞でなく、一の助辭である。「て」の下に助辭の「し」のつく形は歌には見馴れないが、宣命には多い。助辭の「し」は強く指示したことになる。今その例を挙げると、

彌務めに彌結りにあななひ奉り輔佐け奉らむ事に依りてし、この食國天の下の政事は(續紀第三詔)

天の下平けく百官安けく爲てし、天地の大瑞は顯れ來りとなも神ながら思ほしめさくと詔る(同第六詔)

上下を齊へ和けて動無く靜に有らしめむには、禮と樂と二つ並べてし、平けく長くあるべしと神ながら思ほしまして(同第九詔)

この外、第十三、十七、十九、二十三、二十四、二十七、三十一、四十一、四十八、六十一等の諸詔に、その例が見える。

名詞に「にて」のつゞける例は、

還るべく時はなりけり都にて誰が手本をか吾が枕かむ(卷三、四三九)

家にもたゆたふ命浪の上に浮きてし居ればおくが知らずも(卷十七、三八九六)等の例がある。

この語に就いて、なほ考ふべきは、今の歌である。

去年の春あへりし君に戀ひにてし櫻の花は迎へ來らしも(卷八、一四三〇)

この歌を代匠記に「相トハ花ヲ愛シテ情アル人ニ花ノ相逢ヲ云ヘリ。戀ニテシハ、ニハ助語ナリ。賞翫セシ去年ノ人ヲ花ノ戀ルナリ。迎來ラシモトハ、咲テニホフカ、去年ノ人ヲ見ニ來ヨト迎タルヲ云ヘル歟」と云ひ、略解に「去年櫻をめでし人を、花も戀つゝ此春も其人を迎へんとしてこそ、花の咲たるならめと、櫻の心をはかりてよめるか。宣長は右の長哥は脱句有て、春山を人の越行事の有しなるべし。さて此反哥に迎とはよめる也。然らざれば迎といふことよしなしといへり。さも有べし」と見え、略解補正に「君爾は君之の誤か」といひ、古義に「戀爾手師は、思ふに師は伎字を草體より誤れるものにてコヒニテキなるべし。迎來良之母はムカヘケラシモと訓むべし。待迎へけるらしの謂なり。母は歎息辭なり。歌意は去年の春花盛の時花見がてらに逢てかたらひし其君を待迎へけるならし、さてもうれしき事ぞとなり。花の下にて人に行逢たるを權てよめるなるべし。」と見え、井上氏の新考に「案するにコヒニテシとはいふべからざる辭なり。(コヒニシ又コヒテシとこそいふべけれ)おそらくは、戀爾手師は戀爾手師の誤ならむ。次に結句について云はむに、卷一に馬ナメテ御獵タタシシ時は來向とあるにて思へば、櫻ノ花ノサク時ガムカヒ來ルサウナといへるなるべし。さらば迎はムカヒとよむべし。迎は古書にムカヒにも借れり。一首の意は、去年ノ春櫻ノモトニテ逢ヒシ君ニ我ハ戀ヒニシテ今年又櫻ノサクベキ時ニナリヌ、といへるならむ。」と見えてゐる。奈良朝文法史も亦「戀爾手師」の「師」

を助動詞「き」の活用と見て、「にてき」の例にこの歌を出してゐる。

今思ふに「戀ひにてし」を連體の形と見る故に誤脱の説も出て、解釋も困難に陥るのである。「戀ひにて」を用言、「し」を助辭と見れば差支ないことである。動詞に助動詞「にて」の附く例は、

梅の花咲きて散りなば櫻花繼ぎて咲くべくなりにてあらずや(卷五、八二九)

水鳥の發ちの急ぎに父母に物言ず來にて今ぞ悔しき(卷二十、四三三七)

年も彌高く成りにて餘の命も幾ならず(續紀五十九詔)

の如きがある。「て」「し」がつくのは前の卷第六の歌を擧げた例である。一首の意は、「去年の春あへりし君に(櫻の花が)戀ひをして來て、お迎をするやうに咲いたさうな」といふ意である。君とは、宴會などで吟誦した場合の對手をさして、言つたのである。櫻も去年お目にかかつたあなたを慕つて咲いたらしいといふ意味の歌なのである。

ひさかたの 天の香具山 このゆふべ 霞たなびく 春立つらしも(人麻呂集)

【原文】 久方之 天芳山 此夕 霞霏霰 春立下

【題意】 卷十に、春雜歌として、載つてゐる歌で、柿本朝臣人麻呂歌集から出た歌である。以下、歌の下に、括弧して人麻呂集と書けるは、すべて柿本朝臣人麻呂歌集から出たと記されてゐる歌である。

【口譯】 かの天の香具山には、この夕、霞がたなびいてゐる。春が立つと思はれる。

【釋義】 ひさかたの 枕詞。天の香具山 山名。芳をカグと讀むは、カグハシキ意に取るのである。霞たなびくこの句まで四句、眼前の事實を叙してゐる。この事實を基として、次の推量の一句を起すのである。春立つらしも 春立つは、春の來ること。曆の立春の字の直譯であらうと云はれてゐる。元來タツには、起る、出發する等の義があるので、春の來ることをいふに不思議は無い筈である。ラシは、根據ある推量の辭。モは感動の助辭。

【餘論】 山に霞のかかるのを見て、曆面の春が來たことと推量してゐる。いよく冬から解放されて、萬物生育の春になることを喜ぶ情を出發點としてゐる。藤原京時代の作品であらう。新古今集、後鳥羽天皇、ほのくくと春こそ空に來にけらし、天のかぐ山霞たなびくは、この歌を本歌としてゐる。ほのくとの一句は、春の來たことを、空の色に見る表し方である。萬葉の歌では、霞のたなびくを見て、春の來ることを感ずるのである。

○鳥を詠める

うち靡く 春立ちぬらし 吾が門の 柳の末に 鶯鳴きつ

【原文】 詠鳥

打靡 春立奴良志 吾門之 柳乃宇禮爾 鶯鳴都

【口譯】 草木の芽ぐむ春が來たさうな。わが門の柳の若枝に鶯が鳴いた。

【釋義】 うち靡く 枕詞。春は、草木の枝條の柔に靡くよりいふ。ウチは、靡くの意を強くする爲に添へる。春

立ちぬらし ヌは、ラシの推量の意を強調する爲に添へる。柳の末に ウレは、草木の若き枝先。萩のウレ、菱のウレなどいふ。

【参考】 類歌

冬ごもり春さり來らし、あしひきの山にも野にも鶯鳴くも(卷十、一八二五)
うち靡く春さり來れば小竹の末に尾羽うち觸りて鶯鳴くも(同、一八三〇)

春霞 流らふなべに 青柳の 枝啄ひ持ちて 鶯鳴くも

【原文】 春霞 流共爾 青柳之 枝啄持而 鶯鳴毛

【口譯】 春霞が動いてゐる時に、青柳の枝を啄ひ持ちて、鶯が鳴いてゐる。

【釋義】 春霞 古は、霞は春に限らず、夏や秋にもいふので、差別を明にする爲に、特に春霞といふのである。流らふなべに 流らふは、流るの連続してあるを表す。霞が流動して止まない意である。ナべは、その上の句意と、下の句意とが、並行して行はれることを表す。以上副詞句の形を取つてゐる。枝啄ひ持ちて 鶯が青柳の枝に啄くことを、枝啄ひ持ちて



花喰ひ鳥模様

と云つてゐる。上代の圖案に、花喰ひ鳥といふのがあつて、鳥が花の枝を啣へてゐる模様を畫いたのがある。それは正倉院の御物によく見る圖案であるが、この意匠に思ひ到つて、この句を成したのであらう。

【餘論】この歌は、畫を見て詠んだ歌であるかも知れない。さうで無いにしても、實景を圖案化して歌つた趣がある。鶯が物を口にしながら鳴くといふ、實寫でないことは勿論である。春景の美しい一場面を描出して、相當の効果は收め得てゐる。

○雪を詠める

君がため 山田の澤に 惠具採むと 雪消の水に 裳の裾ぬれぬ

【原文】 詠雪

爲君 山田之澤 惠具採跡 雪消之水爾 裳裾所沾

【題意】春季の雪を詠んだ歌で、この題には、春の雪、雪解などを含んでゐる。

【口譯】あなたの爲に、山田の澤に、惠具を採むとして、雪消の水の爲に、裳の裾が濡れました。

【釋義】惠具採むと エグは、芹の別名。賀茂眞淵は、烏芋の事としてゐる。「あしひきの山澤を採みに行かむ日だにも會はせ、母は責むとも」(卷十一、二七六〇)

【参考】 類想

君がため浮沼の池の菱採むと我が染めし袖ぬれにけるかも(卷七、一二四九)

○霞を詠める

冬過ぎて 春來たるらし 朝日さす 春日の山に 霞たなびく

【原文】 詠霞

寒過 暖來良思 朝鳥指 萍鹿能山爾 霞輕引

【口譯】冬が過ぎて春が来たさうな。朝日のさす春日の山に霞がたなびいてゐる。

【釋義】朝日さす 實景であるが、又枕詞とも解せられる。朝日がさして霞む意に、春日に接続するのである。

【餘論】この歌は、文字遣ひの上に注意すべき點がある。寒をフユ、暖をハルと讀ませてゐるのは、當時の人の、冬と春に對する觀念を、よく物語つてゐる。朝日を朝鳥と書いたのは、日の中に三本足の鳥がゐるといふ傳説によつたものである。なほ

冬過ぎて春し來たれば年月は新なれども人は舊り行く(卷十、一八八四)
この歌の初二句も、寒過暖來者と書いてゐる。

○花を詠める

能登河の 水底さへに 光るまでに 三笠の山は 咲きにけるかも

【原文】 詠花

能登河之 水底并爾 光及爾 三笠乃山者 咲來鴨

【口譯】能登川の水底さへも、照るまでに、三笠の山の花は咲いたことである。

【釋義】能登河 春日山中から流れ出る小川。三笠の山は 春日山中の一峰の名。笠の形をしてゐる山で、ミは接頭語。山が咲いたといふのは、山の木の花が咲いた意で、省略してある。諸説にいふ如く、櫻の花をいふであらう。花と云はずして、山が咲くといふ例は、「春山の咲のをりに春菜つむ妹が白紐見らくしよしも」(巻八、一四二一)。

○煙を詠める

春日野に 煙立つ見ゆ 嬢子等し 春野の菟芽子 採みて煮らしも

【原文】 詠煙

春日野爾 煙立所見 嬌嬌等四 春野之菟芽子 採而煮良思文

【口譯】 春日野に煙の立つが見える。嬢子等が、春野の菟芽子を採んで煮てゐるさうな。

【釋義】 嬢子等し シは助辭。春野の菟芽子 ウハギは、和名鈔に薺菜の字を宛ててゐる。よめな。その若芽を摘んで食用に供するのである。採みて煮らしも ラシが、上一段活の動詞煮るのニを受けてゐるのは、古法である。

○野遊

ももしきの 大宮人は 暇あれや 梅を挿頭して ここに集へる

【原文】 野遊

百磯城之 大宮人者 暇有也 梅乎挿頭而 此間集有

【題意】 野に出でて遊べる時の歌である。

【口譯】 朝廷に仕ふる人は暇があればか、梅を挿頭にしてくゝに集つてゐる。

【釋義】 ももしきの 枕詞。大宮人は 大宮に奉仕する人は。朝廷の官人等は。暇あれや 暇あればかの意の疑問前提法である。梅を挿頭して 梅を冠の飾として。ここに集へる 上の暇あれやを受けて、集へると結んでゐる。

【餘論】 新古今和歌集には、山邊赤人の作として、この歌を入れ、下句を、「櫻かさして今日もくらしつ」としてゐる。赤人の作としたのは、三十六人集中の赤人集にこの歌が出てゐるからで、その歌のある部分の赤人集は又、この卷十の前半を假字書きにしたものに過ぎない。されば赤人の作とするは、何等根據の認め難いことである。さて櫻かさしての方は、芳麗の氣は勝るが、今日も暮しつには、多少譏刺する意志を含んでゐる。梅を挿頭してここに集へるは、ただ平叙したままで、春遊を樂んでゐるものと見るべきであらう。

○鳥を詠める

雨霽れし 雲に副ひて ほととぎす 春日を指して 此ゆ鳴き渡る

【原文】 詠鳥

雨霽之 雲爾副而 霍公鳥 指春日而 從此鳴度

【口譯】 雨の止んだ雲に副うて、霍公鳥が、春日をさして此處から鳴き渡つてゐる。

一九六

【釋義】 雨霽れし雲に副ひて 雨が霽れて、雲が春日の方へ去つて行く、その雲に伴つて。

吾が衣を 君に著せよと 霍公鳥 吾を領き 袖に來居つ

【原文】 吾衣 於君令服與登 霍公鳥 吾乎領 袖爾來居管

【口譯】 わたくしの衣を君に著せよと、霍公鳥が、わたくしを占領して、袖に來て居ります。

【釋義】 吾を領き ウシハキは、主人として占領すること。自分を占領して。袖に來居つ 袖に霍公鳥が來てゐるとは、極端な云ひ方をしたので、自分近くに來て鳴いてゐることをいふ。

【餘論】 この歌は、作者が、衣服を思ふ人に贈るにつけて、つけてやつたものであらう。霍公鳥が、君にわが衣服を贈れと云つて、わが袖に來てゐる意に、設けて詠んだ歌と思はれる。

○蟬を詠める

默然もあらむ 時も鳴かなむ 晚蟬の もの念ふ時に 鳴きつつもとな

【原文】 詠蟬

默然毛將有 時母鳴奈武 日晚乃 物念時爾 鳴管本名

【題意】 以下は夏の歌である。蟬は總稱で、ヒグラシは、その中の一種、カナカナ蟬、すなはち茅蜩である。日の暮に鳴いて、日を暮れしめるより名とする。但し萬葉集品物解(鹿持雅澄)は、ヒグラシをも、セビと同じく、總稱となしてゐる。

一九六

一九七

【口譯】 何もしないでゐる時にでも鳴くがよい。考へ事をしてゐる時に、茅蜩が鳴いてよしなきことである。

【釋義】 默然もあらむ モグは、物を言はないでちつとしてゐること。アラムは、連體形。時も鳴かなむ 他に對して希望する語法。終止形で、二句切である。茅蜩の 第五句の鳴きつつに續く語法である。鳴きつつ

もとな モトナは、モトナシの語幹で、感動的に云ひ出したものである。よしなし、致し方無しの意。

○花を詠める

野邊見れば 瞿麥の花 咲きにけり 吾が待つ秋は 近づくらしも

【原文】 詠花

野邊見者 瞿麥之花 咲家里 吾待秋者 近就良思母

【口譯】 野邊を見れば、瞿麥の花が咲いたことである。わが待つ秋は近づくと思はれる。

【餘論】 上の三句で事實を叙し、下の二句で、その事實に基く推量を爲してゐる。三句切の歌である。

夏の炎暑に苦んで、ひたすら涼秋を待つ、實生活に根ざしてゐる心もちが、秋の前ふれとして、瞿麥の花を以つてしたので、全體に亘つて美化せられて、この歌となつてゐる。實生活の苦しさを歌はないで、あこがれの美しい秋を待つ意を詠んでゐるのは、古歌のよい方面である。夏の苦熱よりも秋の清涼に對する愛、さういふ方に、歌心は主として動いてゐる。

○花を詠める

四二一〇

朝顔は 朝露負ひて 咲くと云へど 夕影にこそ 咲きまさりけれ

【原文】 詠花

朝露 朝露負 咲雖云 暮陰社 咲益家禮

【題意】 これも花を詠める歌であるが、以下は秋の歌である。

【口譯】 朝顔の花は、朝露を負ひて咲くといふが、却つて夕の光に咲き増ることであつた。

【釋義】 朝顔 植物の名であるが、その實物は、今日の何であるかに就いては、牽牛子、木槿、桔梗、旋花等の諸説がある。牽牛子は、和名類聚鈔、本草和名に、牽牛子、和名阿佐加保とあり、平安朝以後アサガホといふは、この類である。木槿は、玉篇に、舜、木蓮花とあり、また毛詩鄭風に、有女同車、顔如舜華とあり、その古點に、舜をアサガホと訓してゐる。桔梗は新撰字鏡に、桔梗加良久波、又云阿佐加保と見えてゐる。旋花は別に根據は無いが、この歌に夕影に咲きまさるといへるなどより思ひついたのである。以上のうち、牽牛子と木槿とは、漢土から渡來した植物である。かやうに數説があつて、いまだいづれがそれとも、的確に定めいひ難い。但しいづれにしても、花の大きく開く植物であつて、これを人の顔面に比して名づけていふのであらう。かの貌花と共に考ふべき植物である。朝露負ひて 朝の露を負ひ持ちて、さを鹿の來立ち鳴く野の秋萩は露霜負ひて散りにしものを(卷八、一五八〇)。咲くと世にはいへど。人はいへど。夕影にこそ咲きまさりけれ 夕日の光のもとにいよいよ美しく咲き増つた。朝顔といふ名ではあるが、夕方の方が花の光が美しいよしを歌つてゐる。名と實と一致しない點に、興味を催された歌である。なほこの歌はもと旋頭歌であつたものが、誤つて短歌となつたものであるとし、この夕影にこその上に他の花の名をいふ一句が落ちたとし

六二二

秋萩は 雁に逢はじと 言へればか言へれかも 聲を聞きては 花に散りぬる

【原文】 秋芽子者 於雁不相常 言有者香有可聞 音乎聞而者 花爾散去流

【口譯】 秋萩は雁に逢ひますまいと云つてゐる故か、雁の聲を聞いては、はかなく散つてしまふ。

【釋義】 雁に逢はじと 「雁に逢はじ」は、萩の詞であるかのやうに扱つてゐる。萩は鹿の妻といふ考へがあるが、これもやはり萩を女性として、雁とは結婚しまいとしての意に取るべきである。言へればか言へれかも 言つて居ればか。一に云ふも同意。花に散りぬる ハナニは花やかにしてはかなき意の副詞。あだに、いたづらに、「氣のをに思へる吾を山藁苳の花にか君がうつろひぬらむ」(卷七、一三六〇)、「霞立つ春日の里の梅の花に問はむとわが思はなくに」(卷八、一四三八)。

【餘論】 萩、雁、又は鹿の如き、動植物相互の間に、婚姻問題を考へてゐる點が、かういふ物に對する古人の親しさを表してゐておもしろい。

○雁を詠める

あらたまの 年の經行けば あともふと 夜渡る吾を 問ふ人や誰

【原文】 詠雁

璞 年之經往者 阿跡念登 世渡吾乎 問人誰誰

【題意】 題は雁を詠んだ歌であるが、この歌は、雁の身に成り代つて詠んでゐる。

【口譯】 年が経つたから、何と思ふと、夜渡るわたくしを問ふ人は、誰方でございませう。

【釋義】 あらたまの 枕詞。年の經行けば 年の経過したことをいふ。この歌は譬喩歌と見られるから、この句は雁に適切なる句で無くして、むしろ作者とその對手との關係に適切なる句であらう。あともふと アトモフに二種がある。一は誘ひ率ゐる意で、「あともひて榜ぎ行く舟は高島の阿渡の水門に泊りにけむかも」(卷九、一七一八)、「夕汐の満のとどみにみ船子をあともひ立てて喚び立てて御船出でなば」(同、一七八〇)等の例がある。他は、何と思ふの意で、「あどもへか阿自久麻山のゆづる葉の含まる時に風吹かすかも」(卷十四、三五七二)「兒毛如山若鷄冠木のみつままで宿もと吾は思ふ汝はあどか思ふ」(同、三四九四)等の例である。この歌では、大體どちらにも解せられる。まづ阿跡念登とある原文に従つて、何と思ふとの意に解すると、自分に、何と思ふぞと問ふ人は誰であるかの意になる。又誘ふの意に解すれば、誘ふとして夜渡る我の意に取るべきである。夜渡る我を ワレは、雁自身をいふ。

【餘論】 この歌は、秋の歌であるが、雁といふ語を用ゐないで、雁自身になつて詠んでゐる點がおもしろい。問答とは記して無いがすぐ前にある、ぬばたまの夜渡る雁はおほほしく幾夜を経てかおのが名を告る(二一三九)の歌に對する答の歌であらうと云はれてゐる。或はさうであらう。然らば雁は寄物として用ゐられてゐるので、譬喩歌である。かやうな例は、他にもあつて、そは明に問答と題し、千鳥に寄せて歌つてゐる。佐保河に鳴くなる千鳥何しかも河原を思ひいや河のぼる(卷七、一二五一)

人こそは凡にも云はめ、我がここだ忍ぶ河原を標結ふなゆめ(同、一二五二)
この答の歌では、やはり千鳥に代つて歌ひ、歌中に千鳥の語を用ゐてゐない。

○鹿鳴を詠める

山近く 家や居るべき さを鹿の 音を聞きつつ 宿ねがてぬかも

【原文】 詠鹿鳴

山近 家哉可居 左小壯鹿乃 音乎聞乍 宿不勝鳴

【口譯】 山近く家居すべきではない。壯鹿の聲を聞きつつ、眠り得られぬことである。

【釋義】 家や居るべき ヤは反語を示す。家居すべしや、すべきではないの意。句切。さを鹿の サは接頭語。宿ねがてぬかも ガテヌは、得ざる意。

○蟬を詠める

暮影に 來鳴くひぐらし 幾許も 日毎に聞けど 他かぬ聲かも

【原文】 詠蟬

暮影 來鳴日晚之 幾許 毎日聞跡 不足音可聞

【題意】 セビは總稱で、ヒグラシは、その部屬と爲すべきこと、前に記した。

【口譯】 夕方の光に來て鳴く茅蜩よ、幾日も幾日も毎日聞くけれども、飽きない聲であるなあ。

【釋義】 幾許も ココダクは、數量の多いのをいふ。

○蟋蟀を詠める

影草の 生ひたる屋外の 暮陰に 鳴く蟋蟀は 聞けど飽かぬかも

【原文】 詠ニ蟋蟀

影草乃 生有屋外之 暮陰爾 鳴蟋蟀者 雖聞不足可聞

【題意】 蟋蟀は、コホロギと讀む。集中、夕方の草中にも、又夜床にも鳴くよりに詠んでゐる。今もいふコホロギと同物であらう。

【口譯】 影草の生えてゐる庭の夕方の光に、鳴く蟋蟀は、聞いても飽きぬことである。

【釋義】 影草 生ひ茂つて物影を作る草をいふ。生ひたる屋外の 屋外は、家屋の外の義によつて書いたもので、すなはちニハである。屋前と書いてあるに同じ。家の前の廣場をいふ。

庭草に 村雨ふりて こほろぎの 鳴く聲聞けば 秋づきにけり

【原文】 庭草爾 村雨落而 蟋蟀之 鳴音聞者 秋付爾家里

【口譯】 庭の草に村雨が降つて、蟋蟀の鳴く聲を聞けば、秋らしくなつたことである。

【釋義】 庭草に 庭に生ひてゐる草に。村雨降りて ムラサメは、一しきり降つて止む雨をいふ。秋づきにけり 秋づきは、秋に浸る、秋に親む意。色づく、家づく、面づくなどの例がある。

九〇二二五

〇二二六

○露を詠める

夕立の 雨降るごとに 春日野の 尾花が上の 白露おもほゆ

【原文】 詠ノ露

暮立之 雨落毎 一云 春日野之 尾花之上乃 白露所念

【口譯】 夕立の雨の降る度に、春日野の尾花の上の白露が思はれる。

【釋義】 夕立の雨 夕方に急に降る雨。夕立の雨の降るにつけて、春日野の尾花の上に雨の雫のおくおもほゆるさを思ひやつてゐる。

【参考】 別傳

夕立の雨うち零れば春日野の尾花が末の白露おもほゆ(卷十六、三八一九)

秋萩の 枝もとををに 露霜おき 寒くも時は なりにけるかも

【原文】 秋芽子之 枝毛十尾丹 露霜置 寒毛時者 成爾家類可聞

【口譯】 秋萩の枝も撓ふまでに露霜が置いて、時候はもはや寒いまでになつたことである。

【釋義】 枝もとををに トヲヲは、枝の撓む形容である。露霜おき 露から霜におきかはる頃の、溶け易い霜を、露霜といふ。

九〇二二六

〇二二七

吾が屋戸の 尾花おし靡へ 置く露に 手觸れ吾妹子 散らまくも見む

【原文】 吾屋戸之 麻花押靡 置露爾 手觸吾妹子 落卷毛將見

【口譯】 わたくしの宿の尾花をおし靡けて置く露に、觸れて御覽、娘さん、散る有様も見ませう。

【釋義】 吾が屋戸の 屋戸はヤドで、家の入口の義である。入口近いところの尾花を詠んだ歌である。校本萬葉集を検するに、元曆校本等の古本には、屋戸としてゐるが、京都帝國大學本に、禁裏御本に屋前に作つてゐるといふは、屋前ならばニハと讀むべく、或は古い形を留むるものであらう。手觸れ吾妹子 手觸れは、命令法で、手をお觸れなさいの意。吾妹子は、婦人に對して親愛の意を以つて呼び懸ける語であるが、この歌では、妻とも、又はいかなる婦人とも、關係が明で無い。散らまくも見む 散らまくは、散らむこと。露に手を觸れさせて、その散らむさまを見ようとの風流である。

○雪を詠める

夜を寒み 朝戸を開き 出で見れば 庭もはだらに み雪降りたり一に云ふ庭もほどろに雪ぞふりたる

【原文】 詠雪

夜乎寒三 朝戸乎開 出見者 庭毛薄太良爾 三雪落有一云庭裳保舒呂 爾雪會零而有

【題意】 以下は、冬の歌で、これは雪を詠んでゐる。

【口譯】 夜の寒さに、朝戸を明けて出て見れば、庭も斑に雪が降つてゐる。

【釋義】 夜を寒み 夜が寒さに。朝戸を開き 朝になつて戸を開いて。庭もはだらに ハダラは斑に同じ。み雪

降りたり ミは接頭語。

【餘論】 夜の寒さに、朝になつて戸を開いて見ると、果して雪が降つてゐた、よくある現象を、自然に云ひ表してゐる。

○黄葉を詠める

八田の野の 浅茅色づく 有乳山 峰の沫雪 寒く零るらし

【原文】 詠黄葉

八田乃野之 浅茅色付 有乳山 峰之沫雪 寒零良之

【口譯】 八田の野の浅茅が色付いた。有乳山の峰の沫雪は、寒く降つてゐるであらう。

【釋義】 八田の野の 大和の國添下郡に、矢田といふ地名がある。そこであらうといふ。但し加賀の國にもあり、その外、諸國にも同名の地があるであらう。浅茅色づく 浅茅は、たけ低く生えてゐる茅草。色づくは、その黄葉するをいふ。句切。有乳山 越前の國敦賀郡にある山の名。すなはち愛發の關のある山で、北國への要路である。峰の沫雪 沫雪は沫のやうに、固つて降る雪。

【餘論】 大和の國で浅茅の色づいたのを見て、遙に北國の既に寒さの來つてゐることを思つてゐるのであらう。有乳山を點出すること、唐突のやうであるが、實際は、作者の最親しき人が、かの北國の旅程にあるもので、すなはちその人の身の上を思ひやつた作と考へられる。なほ八田の野を、いづくの地名としても、同様のことは云はれるであらう。

二 詠 物

天文、地理に亘つて、雑種の物を詠んだ歌を、集録しよう。こゝには純粹にその物を詠むのみで、戀情を寄托してゐないものを集めたので、かの多く相聞の情を寄托してゐるところの、器物を詠んだ歌の類は入つて來ない。主として卷七の歌である。

○天を詠める

八七 一〇六

天の海に 雲の波立ち 月の船 星の林に 榜ぎ隠る見ゆ(人麻呂集)

【原文】 詠天

天海丹 雲之波立 月船 星之林丹 榜隠所見

【題意】 天空の景を、海に譬へて詠んでゐる。

【口譯】 天の海に雲の波が立ち、月の船が、星の林に榜ぎ隠れる。それが見える。

【餘論】 月を船に譬へて、大空を榜ぎ渡るといふことは、屢々詠せられてゐる。懷風藻にも、文武天皇御製の詩に「月の舟は霧の渚に移り、楓の楫は霞の濱に泛ぶ」とある。もと弦月の形より想起した詞藻であらうが、本集には、弦月に限らずに用ゐてゐるやうである。

〇 一〇七

○月を詠める

ますらをの 弓末振り起し 借高の 野邊さへ清く 照る月夜かも

【原文】 詠月

大夫之 弓上振起 借高之 野邊副清 照月夜可聞

【口譯】 勇士が、弓弭を振り起して獵をする、その借高の野邊さへ清く照る月夜であるかな。

【釋義】 ますらをの弓末振り起し この歌は序歌で、以上は、勇士が弓を執つて獵をするといふ意に、借高の力を呼び起す爲の序となつてゐる。弓上は、義を以つて、弓の末、すなはち上方をいふ。フリは、起しの意を強める爲に添へる。借高の 奈良の都の東方の地名。

二七 一〇七

明日の夕 照らむ月夜は 片よりに 今夜に寄りて 夜長からなむ

【原文】 明日之夕 將照月夜者 片因爾 今夜爾因而 夜長有

【口譯】 明日の晩に照るであらう月は、片よつて、今夜に寄つて、夜長く欲しいことである。

【釋義】 片よりに今夜によりて 今宵の方にかたよつて。今夜月の清きを愛してゐるので、明日の夜の月も、今夜に偏り來よといふのである。宴でも催してゐるのであらう。夜長からなむ 夜長くあらなむで、他に對して希望を表す語法。

三〇 一〇七

玉垂の 小簾の間通し ひとり居て 見る驗なき 暮月夜かも

二 詠 物

【原文】 玉垂之 小簾之間通 獨居而 見驗無 暮月夜鴨

【口譯】 獨居て簾越しに見るも、そのかひの無い夕月夜であることよ。

【釋義】 玉垂の 簾の枕詞。古代の簾は、小竹を短く切つて、緒に貫いたものを並べ垂れたもの。こ考へられる。神を祭る歌の中に、「竹玉を簾に貫き垂り」とあるは、すなはち簾を掛けること、考へられる、さて玉垂の簾といふ詞が出来たのであらう。小簾の間通し 四句に續くので、小簾越しに見ても、云々の意に取るべきである。見る驗なき 君と見ずに、獨居るから、見るに効が無いといふのである。暮月夜かも 夕月を賞する意であつて、夜は軽い意味に添へてある。

五七 一〇七

海原の 道遠みかも 月讀の 明すくなき 夜は更ちつつ

【原文】 海原之 道遠鴨 月讀 明少 夜者更下乍

【口譯】 海上の道が遠い故であらうか、夜は更け行きながら、月の明りの少いことである。

【釋義】 海原の道遠みかも 海原の道が遠い故かの意で、疑問の條件法である。月が海を渡つて出るといふ考は、日本書紀の一書にも、「月讀の尊は、滄海原の潮の八百重を治らすべきなり」とあつて、月は海と縁の深いものである。月讀の ツクヨミは、月の神の名である。月讀と書くは、讀は宛字で、日本書紀には、月弓の尊とも、月夜見の尊とも書いてある。語義は未詳であるが、月を弓に見立てた譬喩であるかも知れない。明少き月のまだ出ずして、その月しろ（月の出むとする前の明り）も少いことを叙してゐる。句切である。夜はくだちつつ 夜深くなつて行きながら。クダツは、降りさまになり行く意から、夜の更ける意に用ゐられる。

六七 一〇七

もししきの 大宮人の 退り出て あそぶ今夜の 月の清けさ

【原文】 百師木之 大宮人之 退出而 遊今夜之 月清左

【口譯】 朝廷に仕ふる人の退出して遊ぶ今夜の月の清くあることよ。

【餘論】 大宮人たちの遊宴してゐる席上の吟であらう。上からずつと云ひ下して來た格調が、淀みの無い表し方で、月の明るさを歌ふにふさはしい。

ぬばたまの 夜渡る月を とどめむに 西の山邊に 關もあらぬかも

【原文】 夜干玉之 夜渡月乎 將留爾 西山邊爾 塞毛有梗毛

【口譯】 あの夜渡る月を留めようとするに、西の山の邊に關も無いであらうか。

【釋義】 ぬばたまの 枕詞。夜渡る月を 夜空を渡り行く月を。西の山邊に 月の入らむとする西の山の邊に。關もあらぬかも 關も無いであらうか、關もあれかしの意。

六七 一〇八

靱懸くる 伴の雄ひろき 大伴に 國榮えむと 月は照るらし

【原文】 靱懸流 伴雄廣伎 大伴爾 國將榮常 月者照良思

【口譯】 靱を懸ける勇士の多い大伴氏によつて、國は榮えるであらうと、月は照つてゐるやうである。

【釋義】 靱懸くる ヌギは矢を入れて背負ふ料の兵具。靱懸くるで、矢を携帯せるを表し、武装せる意に用ゐて

ひる。伴の雄廣き トモノヲは、男子の團體をいふ。大祓の詞に「手櫛掛くる伴の男、靱負ふ伴の男、劍佩く伴の男、伴の男の八十伴の男を始めて」とある。廣きは、大伴氏の家門の廣く、勇士の数の多いことを表してゐる。大伴に 大伴氏によつての意である。この大伴を地名と解する説があるが、それでは上の二句は單に序となるので、歌品が下る。また第四句の國榮えむとも生きて來ない。月は照るらし 月の皎々として照つてゐる心を、大伴氏の武力に依つて國が榮えるであらうことを、表してゐるが如くに取つてゐる。月の光が、國を鎮める大伴氏の武威を象徴してゐるやうに歌つてゐる。ランは、月の照る心を推量する辭。

【餘論】 大伴氏が、一族を擧げて宴を開いてゐる。並び居る勇士の頼もしい姿よ。折しも月は、この盛宴を一層盛にするかのやうに照つてゐる。國の榮は、自分等の負擔する所であると爲す、武族の人々の抱負も窺はれる。内容も大きいし、強い格調も伴つてゐる。有数の佳作品である。

○月を詠める

天の海に 月の船浮け 桂檝 懸けて榜ぐ見ゆ 月人壯子

【原文】 詠月

天海 月船浮 桂檝 懸而榜所見 月人壯子

【口譯】 天の海に、月の船を浮べて、桂の檝を取りつけて、月人壯子の榜ぐの見える。

【釋義】 桂檝 桂の材の檝で、カチは、水を撃つて舟を進行させる器。桂は、月中に桂の樹があるといふ傳説から、云ひ及ぼしてゐる。懸けて榜ぐ見ゆ 桂の檝を舟に著けるのを、懸けてといふ。月人壯子が榜ぐ、それが

見える意の語法。月人壯子 月を擬人法にした云ひ方。

○雲を詠める

あしひきの 山河の瀬の 響るなべに 弓月が嶽に 雲立ち渡る (人麻呂集)

【原文】 詠雲

足引之 山河之瀬之 響苗爾 弓月高 雲立渡

【口譯】 山川の瀬の音が高くなる、と同時に弓月が嶽に雲が立ち渡ることである。

【釋義】 あしひきの 枕詞。山河の瀬の 山中の河の瀬の音の。響るなべに ナベは、その上の詞と、下の詞と同時に用はれるを表す詞。山河の瀬が鳴ると共に、弓月が嶽に雲が立つたの意である。弓月が嶽に 山の名で、齋槻が嶽のことであらう。卷向の山の一峰。

○山を詠める

いにしへの 事は知らぬを 我見ても 久しくなりぬ 天の香具山

【原文】 詠山

昔者之 事波不知乎 我見而毛 久成奴 天之香具山

【口譯】 昔の事は知らないが、自分が見てからでもこの天の香具山は久しくなつたものだ。

【餘論】 天の香具山は、古い神話のある山で、神代以來の古い山である。それを、古い時代の事は知らぬと云つ

たのは、却つて、昔話のあることを思はせる云ひ振りだ。我見てもの語法も、昔話があるさうだが、自分が見てからでもの意にも解せられる。

【参考】 類歌、古今集卷第十七、よみ人しらず、わが見ても久しくなりぬ、住吉の岸の姫松いく代経ぬらむ

○河を詠める

大君の 三笠の山の 帯にせる 細谷川の 音の清けさ

【原文】 詠河

大王之 御笠山之 帶爾爲流 細谷川之 音乃清也

【口譯】 三笠の山の帯にしてゐる細谷川の音の清いことよ。

【釋義】 大君の 枕詞で、大君の御笠の意に續く。三笠の山 山の名、平城京の東、春日山中の一峯。帯にせる 山を廻つて谷川の流れてゐるのを帯にせると譬喩を用ゐてゐる。

【餘論】 類歌として、古今集、神あそびの歌の中に、かへしものゝ歌、まがねふく吉備の中山帯にせる細谷川の音のさやけさ

といふ歌がある。萬葉のと比べて、また別趣があるが、どちらかといふと、萬葉の方が、大様で、ゆつたりしてゐる。三句帯にせると視覚に訴へてゐるから、三笠の山のと、山容の思ひ浮べられるのがよい。

○葉を詠める

いにしへに ありけむ人も 吾が如か 三輪の檜原に 挿頭折りけむ (人麻呂集)

【原文】 詠葉

古爾 有險人母 如吾等架 彌和乃檜原爾 挿頭折兼

【題意】 木の葉を詠じた歌である。この歌では檜の枝を取つて、旅人が挿頭にした、それを題材としてゐる。

【口譯】 前の代にあつたであらう人も、自分たちのやうに、この三輪の檜原で、挿頭の爲の檜葉を折つたであらうか。

【釋義】 ありけむ人も 昔あつたであらう人を推量してゐる。三輪の檜原に 三輪は地名。檜原は、檜の生えてゐる原。挿頭折りけむ カザシは、花や葉の小枝を頭に挿すをいふ。さて行人が挿頭をするのは、三輪の社へ詣でる爲の風習と思はれる。

往く川の 過ぎゆく人の 手折らねば うらぶれ立てり 三輪の檜原は

【原文】 往川之 過去人之 手不折者 裏觸立 三和之檜原著

【口譯】 行く川のやうに過ぎ行く人が手折らないから、物寂しさうに立つてゐる、この三輪の檜原は。

【釋義】 往く川の 枕詞。川水の流れ行くといふより過ぎ行くに懸かつてゐる。うらぶれ立てり ウラブルは、心の樂まざる状態をいふ。寂れて立つてゐる。誰も手折る人が無いから、物寂しさうに立つてゐる意。

【餘論】 前の歌に對して、みづから答へたやうな内容の歌である。この三輪の檜原は、昔人も、やはり自分のや

うに手折つてもてはやしたであらうかといひ、いや／＼昔人は手折らないので、相手にされずに立つてゐるとこれを説明して、三輪の檜原を憐んだやうな気分がある。

○井を詠める

落ちたぎつ 走り井の水の 清くあれば 廢てては吾は 去きがてぬかも

【原文】 詠井

隕田寸津 走井水之 清有者 廢者吾者 去不勝可聞

【題意】 井といふは、用水を採取する爲に水を溜めておく處で、今日いふ井戸でもあり、また川や池の一部分に井を設けることもある。この歌では、水流の激しい走り井を詠んでゐる。

【口譯】 落ち激して流れ走る井の水の、清くあるから、捨てては自分は行きかねることである。

【釋義】 落ちたぎつ 水が流れ落ちて激する義で、走り井の水の、勢よく出て行くことを寫してゐる。走り井の水の 水の出入の激しい井を走り井と稱してゐる。涌き出る水でもよし、また流れ来る水を溜めてゐると解してもよい。廢てては吾は 原文もと度者吾者とあつて、ワタラハワレハと讀んでゐたのであるが、元曆校本等の古鈔本によつて、度を廢に改め、ステテハワレハと讀む。もつとも元曆校本、類聚古集、古葉略類聚鈔ともに、字形は癡に作つてゐるが、こは他の例から推して、廢の異體字と見て差支ない。行きがてぬかも 行くを得ざる意の詠嘆の語法。

七〇二二
廢者は元曆校本等による。

八〇二二

馬酔木なす 榮えし君が 穿りし井の 石井の水は 飲めど飽かぬかも

【原文】 安志妣成 榮之君之 穿之井之 石井之水者 雖飲不飽鴨

【口譯】 馬酔木のやうに繁昌した君の掘つた井の、石井の水は飲んでも飽きぬことである。

【釋義】 榮えし君が 昔榮えた長者、權臣など、誰と指す所があるであらうが、今は何人とも知られない。

【餘論】 その人去つて、清泉ひとり存してゐる。夏日にその恵を蒙つて、昔榮えし君を思ひやる。恐らくは、作者はその人の一顧を蒙つたことなどがあつて、追憶の念の止み難きものがあるのであらう。

○忍壁の皇子に獻れる歌一首 仙人の形を詠める

とこしへに 夏冬行けや 裘 扇放たぬ 山に住む人 (人麻呂集)

【原文】 獻忍壁皇子一首 詠仙人形

常之倍爾 夏冬往哉 裘 扇不放 山住人

【題意】 仙人の形を見て詠んだ歌で、忍壁の皇子に獻じた歌。忍壁の皇子は、天武天皇の皇子。仙人といふものに興味があつた時代で、その形などを畫にもし、作り物にもして玩んだものであらう。

【口譯】 永久に夏であり冬でありますればか、この仙人は裘を着て扇を放たずに居ります。

【釋義】 夏冬行けや 夏冬が行けばか、夏と冬であればかの意の疑問條件法。裘 獸皮で製した衣服。扇放たぬ 上のヤを受けて、結んでゐる。仙人の持物として扇を出したところがおもしろい。もつとも今日の扇とは違つて、疊まれぬものであらうから、むしろ團扇に近い。

二〇一六八
常之倍は藍紙本等による。

【餘論】 當時の人の持つてゐた、仙人の概念が知れておもしろい歌である。山に住み、裘を服てゐる。さうして支那風の扇などを持つてゐる。もとからあつた山人の思想を漢譯したやうな姿である。

三 鞆 旅

萬葉集の作者は、大概官吏であるので、しばしば地方官として任地に赴き、又は行幸に供奉し、その他諸種の使となつて諸國に往來した。かくて山川の勝景に接し、或は家郷を思うて歌詠を爲した。今これらの鞆旅の作中、作者の知られざるものをこゝに集めた。

○不盡の山を詠める歌一首并に短歌

なまよみの 甲斐の國 うち寄する 駿河の國と ちちごちの 國のみ中ゆ 出で
立てる 不盡の高嶺は 天雲も い行き憚り 飛ぶ鳥も 翔びも上らす 燎ゆる火
を 雪もち消ち 降る雪を 火もち消ちつ 言ひもかね 名づけも知らに 靈し
くも 坐す神かも 石花の海と 名づけてあるも その山の 包める海ぞ 不盡河
と 人の渡るも その山の 水のたぎちぞ 日の本の やまとの國の 鎮とも 坐
す祇かも 寶とも なれる山かも 駿河なる 不盡の高峯は 見れど飽かぬかも

【原文】 詠不盡山歌一首并短歌

出立有、波伐加利、は古葉類、よる。類聚鈔に略

祇可聞、は、類聚鈔よる。古集による。

奈麻余美乃 甲斐乃國 打縁流 駿河能國與 已知其智乃 國之三中從 出立有 不盡能高嶺者 天雲毛 伊
去波伐加利 飛鳥母 翔毛不上 燎火乎 雪以滅 落雪乎 火用消通都 言不得 名不知 靈母 座神香聞
石花海跡 名付而有毛 彼山之 堤有海曾 不盡河跡 人乃渡毛 其山之 水乃當焉 日本之 山跡國乃 鎮
十方 座祇可聞 寶十方 成有山可聞 駿河有 不盡能高峯者 雖見不飽香聞

【題意】 駿河の富士山を詠んだ歌である。

【口譯】 甲斐の國と駿河の國との、あちこちの國の眞中から、出で立つてゐる富士の高嶺は、天ゆく雲も行き憚り、飛ぶ鳥も飛びも上らない。山上から燃え立つ火を、雪を以つて滅し、降る雪を火を以つて消しつゝ、言ふことも知らず、名を付けることも知らずに、立つてゐる山だ。石花の海と稱してあるも、その山の包んでゐる海だ。富士川と云つて人の渡るのも、その山から落ちる水だ。この日本國の鎮として立つてゐる山だ。寶ともなれる山だ。この駿河の國の富士の高峰はどれほど見ても飽きないことである。

【釋義】 なまよみの 枕詞。語義未詳。うち寄する 枕詞。駿河の國は、海近く波がうち寄せるからいふのであらう。ちちごちの 此方此方で、あちらこちらといふに同じ。國のみ中ゆ ミは接頭語。ミナカは眞中といふほどのこと。出で立てる 原文もと出之有とあつた。童蒙抄に之は立の誤かとし、イデタテルとせるに、古葉略類聚鈔の字面が一致するからしばらくこれに従ふ。孤立せる校異ではあるが。い行き憚り イは接頭語。赤人の富士山の歌(卷三、三一七)にも、「白雲もい行き憚り」とあつた。山が高くして雲が行き憚む意である。燃ゆる火を 當時富士はなほ噴火してゐたので、以下の數句は、その火と雪と争ふ壯觀を叙してゐる。言ひもかね カネは得ざる意。名づけも知らに ミは打消の助動詞。靈しくも 靈妙不思議にも。坐す神かも 山を直に神

と稱してゐる。山嶽信仰の表れである。石花の海と 富士山北の湖水をいふ。今は五湖に分れてゐるが、上代には多少違ふらしい。恐らくはもつと大きくして小數であつたであらう。セは湖水の名。海道から云つて山の後方にあるから、セといふか、或は塞くの意味でもあらう。石花は節足動物の一種で、海中の石に附著して生息する。こゝでは訓を借り用ゐたままである。なほ貞觀七年十二月九日、富士山が爆發して剗の海を埋めたよし、三代實錄に見える。水のたぎちぞ タギチは、激流をいふ。日本の 集中日本と書いた字面も多いが、はつきりヒノモトと讀むに相違ないと思はれるのは、此處だけである。ヤマトの枕詞。もと難波あたりから大和地方を東方に望むよりして起つた枕詞が、ヤマトの語意が廣くなるに連れて、日本の國名のやうになるものと思はれる。坐す祇かも 祇は、國土の神をいふに用ゐる語。こゝでは山だからこの字を用ゐる。國語では、共にカミと讀む。分けていふ時に、神のアマツカミに對して、クニツカミといふ。

○反歌

不盡の嶺に 零り置ける雪は 六月の 十五日に消ぬれば その夜降りけり

【原文】 反歌

不盡嶺爾 零置雪者 六月 十五日消者 其夜布里家利

【口譯】 富士山に降つてあつた雪は、六月の十五日に消えると、又その夜降つて来る。

【釋義】 六月の十五日 夏の最暑い日の意味に、この日を指してゐる。昔は四五六の三月が曆面の夏であるが、

その中でも、殊に六月が暑い。六月の土さへ裂けて照る日にもわが袖乾めや君に逢はずして(卷十、一九九五)

といふも、六月を最暑い時として取り扱つてゐる。

【餘論】 この富士山の長歌は、全篇がすべて對句から成り立つてゐる。今これを表示すると、

なまよみの甲斐の國 とこちごちの國のみ中ゆ出で立てる富士の高嶺は 天雲もい行き憚り 燃ゆる火を雪
 うち寄する駿河の國 飛ぶ鳥も飛びも上らず 零る雪を火も
 もち消ち 云ひもかね 石花の海と名づけてあるもその山の包める海ぞ 鎮とも
 ち消ち つゝ 名づけも知らに 富士川と人の渡るもその山の水のたぎちぞ 寶とも
 います神かも 駿河なる富士の高嶺は見れど飽かぬかも

かくの如く格調が非常に整つてゐて、それから受ける快適な調子に富んでゐる。同時に内容もこれに伴つてゐる。水火相撲つ壯觀を叙し、包擁するところの湖川を叙して、その壯大を語つてゐる。集中この前に並んでゐる赤人の作品のむしろ優美な小品であるに對して、この方がよほど力強いものがある。しかもこれだけの作品であるが作者の傳つてゐないのは遺憾である。この歌の作者としては赤人の作であらうとする説は、ただ赤人の作と並んでゐるからといふだけで、根據は無い。高橋蟲麻呂の作であらうとなすは、この次に、なほ次に載せる一首があつて、その左註に、右一首高橋蟲麻呂の歌集中より出づとあるに由るのだが、右一首とあるは、どこまでも一首で、三首とも蟲麻呂の作品とは爲し難い。九の卷の蟲麻呂の集から出た歌にも、長歌と反歌とを加へて右何首と數へてゐる。かつかくの如く對句を用ゐた作品は、蟲麻呂の作品中に無い。また本集卷三の目録の古鈔本には、この不盡山を詠める歌といふ下に、笠朝臣金村歌中之出の數字があるが、これもどれほど

の根據によつて、その文字があるか明でない。要するに今日ではなほ佚名氏の作となすべく、萬葉に名の顯れたもの以外にも、優れた歌人の存してゐたことを語るものとして見てよいであらう。

三二一

羽斤田菜引は類聚古集等に

不盡の嶺を 高みかしこみ 天雲も い行き憚り たなびくものを

右の一首は 高橋連蟲麻呂の歌の中に出づ 類を以ちてこゝに載す

【原文】 布士能嶺乎 高見恐見 天雲毛 伊去羽斤 田菜引物緒

右一首 高橋連蟲麻呂之歌中出焉 以類載此

【題意】 前の歌にすぐ續いて載せてあるが、前の歌と關係は無い。左註にいふ通り、高橋連蟲麻呂の歌の中から出たが、同類の故を以つて、こゝに載せたのであらう。

【口譯】 富士の山の高く恐しくある故に、天ゆく雲も、行き憚つて、棚引くことであるよ。

【釋義】 高みかしこみ 高く且恐しきが故に。棚引くものを、タナビクは、一面に引き渡す。モノヲは詠嘆の語法である。「鴨すらもおのがつまどちあさりして後るる程に戀ふとふものを」(卷十一、三〇九一)。

三八八

○羈旅の歌一首并に短歌
海若は 靈しきものか 淡路島 中に立て置きて 白浪を 伊與に廻し 座待月
明石の門ゆは 夕されば 汐を満たしめ 明けされば 潮を干しむ 潮騒の 浪を

恐み 淡路島 磯隠りゐて 何時しかも この夜の明けむと 待つからに 寢の宿
がてねば 瀧の上の 浅野の雉 明けぬとし 立ち響むらし いざ兒等 敢へて榜
ぎ出む にはも静けし

【原文】 羈旅歌一首并短歌

海若者 靈寸物香 淡路島 中爾立置而 白浪乎 伊與爾廻之 座待月 開乃門從者 暮去者 鹽乎令滿 明去者 鹽乎令干 鹽左爲能 浪乎恐美 淡路島 磯隱居而 何時毛 此夜乃將明跡 待從爾 寢乃不勝宿者 瀧上乃 淺野之雉 開去歲 立動良之 率兒等 安倍而榜出卒 爾波母之頭氣師

【題意】 旅中の歌であるが、瀬戸内海の航路にての作である。若宮年魚麻呂の誦した歌であるが、作者は審で無

【口譯】 海といふは不思議なものであるよ。淡路島を中に立て置いて、白浪を伊豫の國に廻らせ、明石の海峡からは、夕方になると汐を満たしめ、明け方になれば潮を干さしめる。潮の騒ぎ立つ波の恐しさに、淡路島の磯に隠れてゐて、何時になつたらこの夜が明けると、待つてゐるので、睡眠が出来かねるのに、激流のほとりの浅野の雉子は、夜が明けたと立ち騒いでゐるのであらう。さあ人々よ、これから舟を榜き出さうよ。海上も静であるよ。

【釋義】 海若は ワタツミは、本來海の神の義であるが、こゝでは廣く海洋を指していふ。もとく海洋即神の意に、海洋信仰の上から出發する語であらう。海洋の義とするも、その力をも併せて云ふのである。靈しきものか 靈妙なるものかなと詠歎してゐる。以上二句、まづ序論と見るべきもの。中に立て置きて 海の中に淡

廻之は神 田本等に
寢乃は神 田本等に

路島を立てておいて。伊與に廻し 白波を伊與の國に廻らせる。波を伊與までもうち寄せさせる。伊與は伊豫の古い字面。座待月 十八九日の頃の月で、出るのにやゝ時間を要する月の意。なほ明るいから明石の枕詞としてゐる。明石の門ゆは 明石の海峡からは。夕されば潮を満たしめ 明石の海峡を通つて潮の満ち干ることを叙してゐる。夕方、明け方と斷つたのは、語を變へたまでで、朝夕に潮を出入させる意である。潮を干しむ以上一段落で、瀬戸内海の潮の活動をよく描いてゐる。潮騒の 潮の騒ぐところの。以下は作者自身の上を描くのである。何時しかも シは助辭で、何時かの意。待つからに 待つ故に。寢の宿がてねば 眠ることが出来ぬのに。このネバは、ヌといふに近い。「秋立ちて幾日もあらねばこの寝ぬる朝けの風は袂寒しも」(卷八、一五五)。瀧の上の タギは激しい流。激流のほとりの。淺野の雉 淺野は、奥行の無い野。地名では無い。明けぬとし シは強めるの爲の助辭で、明けぬと、夜が明けたと。立ち響むらし ランは、雉の鳴く理由を、夜が明けたとて鳴くかと推量してゐる。トヨムは、聲を立てて騒ぐ。いざ子ども 部下に對して云つてゐる。敢へて榜ぎ出む アヘテは、強ひて、推して。にはも静けし ニハは眼前の廣やかなる場所、こゝでは海上である。「飼飯の海上よくあらし、刈薦の亂れ出づ見ゆ、海人の釣舟」(卷三、二五六)。

【餘論】 この歌は、内海の航路に出で立つ人の作として、特に、海の有様を、大きく叙して歌つてゐる點がめづらしい。さうして後半に、淡路島に隠れて夜を明かす自身に就いての叙述も生きてゐる。海を詠じた歌の中でも、代表的の作品といふべきである。

○反歌

三八九

鳥傳つたひ 敏馬みまの埼さきを 榜こぎ廻ためば 大倭やまと戀こしく 鶴多たづなに鳴く

右の歌は 若宮年魚麻呂誦めり 但しいまだ作者を審にせず

【原文】 反歌

鳥傳 敏馬乃埼乎 許藝廻者 日本戀久 鶴左波爾鳴

右歌 若宮年魚麻呂誦之 但未審作者

【口譯】 鳥傳ひに敏馬の埼を榜ぎ廻れば、大和戀しく思はれて、鶴が多く鳴いてゐる。

【釋義】 敏馬の埼を 今の大坂と神戸との間にある突角の名。こゝを廻ると故郷が遠くなつて、いよゝ旅に出た気分になるのである。榜ぎ廻めば 榜いで廻れば。大倭戀しく 大和の戀しいは、作者の心であるが、鶴の鳴く聲に、その情があるやうに描いてゐる。作者の意と、鶴の心と兩様を兼ねた句法である。家郷を思ふ心を誘ふやうに鶴が鳴く意である。鶴多に鳴く サハニは多くの意の副詞。

○
大海に 鳥もあらなくに 海原うみはらの たゆたふ浪に 立てる白雲

右の一首は 伊勢に駕に從へる作

【原文】 大海爾 鳥毛不在爾 海原 絶塔浪爾 立有白雲

右一首 伊勢從駕作

【題意】 一つの御代とも知られないが、伊勢の國への行幸の御伴に行つて讀んだ歌。

九一〇八

【口譯】 大海に島も無い事である。海上に立ちやすらつてゐる浪に白雲が立ち上つてゐる。

【釋義】 島もあらなくに アラナクはアラヌコトの意。ニは助辭。海原の 原は、廣い場所を表す言葉。たゆたふ浪に タユタフは一つ所に低徊猶豫してゐる意。海上で波が動揺して見えるのを、タユタフと歌つてゐる。

【餘論】 この歌まづ海上に島影も無い大きな心を寫し、さてそこに動いてゐる波に白雲が立つてゐると云ふ壯大な光景を描いてゐる。唯それだけであるが、海を望み見た大きな氣分がよく現れてゐる。

○攝津にて作れる

大伴の 三津の濱邊を うち曝し 寄り來る浪の 行く方知らずも

【原文】 攝津作

大伴之 三津之濱邊乎 打曝 因來浪之 逝方不知毛

【題意】 以下二首は、攝津の國で詠んだ歌であるが、やはり作者は知られない。

【口譯】 大伴の三津の濱邊を、洗ひ上げて、寄つて來る波の行く方を知らない。

【釋義】 大伴 今の大坂灣に臨んだ一帯の土地の名で、大地名である。三津の濱邊を 三津は、船着きで大伴の内の一地名である。うちさらし ウチはサラシの意味を強める爲に添へる詞。曝しは波が濱邊の砂を洗ひたてゝゐるさまを寫してゐる。行く方知らずも 波が打ち寄せて來て又歸つて行く、その行く方が知られないの意。モは、感激の助辭。人麻呂の歌に「ものゝふの八十氏河の網代木にいさよふ波の行方知らずも」(卷三、二六四)

一七二一五

奈吳の海の 朝明の餘波 今日もかも 磯の浦廻に 亂れてあらむ

【原文】 奈吳乃海之 朝開之奈凝 今日毛鴨 磯之浦廻爾 亂而將有

【口譯】 奈吳の海の朝明方の潮の餘波が 今日もまた、磯の浦邊に亂れてゐるであらうか。

【釋義】 奈吳の海の 攝津の國住吉の海の名。七卷に、「住のえの奈吳の濱邊」とも見えてゐる。朝明の餘波 アサケは、朝明けの約。ナゴリは、波が打ち寄せたその後、波の引いた後。今日もかも カは、疑問の意。磯の浦廻に ウラミは、浦の曲つてゐる所。亂れてあらむ 波で打ち寄せた物が、磯の邊に亂れてゐるならむと推察して居る。直ぐ後に、沖の藻が今日も亂れてゐるであらうと云ふ類歌が出てゐる。

○羈旅にて作れる

年魚市潟 潮干にけらし 知多の浦に 朝榜ぐ舟も 沖に寄る見ゆ

【原文】 羈旅作

年魚市方 鹽干家良思 知多乃浦爾 朝榜舟毛 奥爾依所見

【題意】 以下は旅で作つた歌であるが、諸國での作が交つてゐる。

【口譯】 年魚市潟は潮が干たさうな。知多の浦に朝漕ぐ舟も沖に寄るのが見える。

【釋義】 年魚市潟 今の名古屋灣の一部で熱田寄りの部分を云ふ。潟は、海中の露洲。知多の浦に 知多半島に沿つた浦の名。沖に寄る見ゆ 潮が干た爲に浦を漕ぐ船が岸近く寄らないで沖の方に寄つてゐる。それが見え

五〇一一五

浦廻は元
曆校本等
による。

三〇一一六

る意である。さうしてその事實をもととして、上の年魚市湯が潮が干たさうなと云ふ推量の句をなしてゐる。理詰め之歌である。

八〇二六

今日もかも 沖つ玉藻は 白浪の 八重折の上に 亂れてあらむ

【原文】 今日毛可母 奥津玉藻者 白浪之 八重折之於丹 亂而將有

【口譯】 今日も又沖の方の玉藻は、白浪の八重に折り重なる上に亂れてゐるであらう。

【釋義】 八重折の上に 白浪が後から後から寄せて崩れる。その幾重も重つて崩れるのを八重折と云つてゐる。

【餘論】 この歌は船で航海して來て、前の日の海上の有様を思ひ出して、今日も又海上ではあの美しい藻が波に揉まれて亂れてゐるであらうと想像して詠んだ歌と思はれる。前に似よつた句の歌を載せたが、この歌の方が藻と波ともつれ合ふ有様が印象的に畫かれてゐて、讀者をして海上の景を想ひ起させるに足るものがある。作者は恐らくは、今日も又船に乗つて海上に旅を續けて行かうとして、この歌を詠んだのであらうか。海上の光景の再現に成功した歌である。

近江の海 湊は八十あり いづくにか 君が船泊て 草結びけむ

【原文】 近江之海 湖者八十 何爾加 公之舟泊 草結兼

【口譯】 近江の湖水には湊は數多くあるが、そのどの湊にあなたの船が泊つて上陸なされたのであらうか。

【釋義】 湊は八十あり ミナトは、水門の義であるが、進んで船着の意にもなる。この歌では港灣の義に取つて

九〇二一六
八十、公
之は類聚
古集等に
よる。

よい。八十ありは、その湊の數の多い事を云ふので、つまり近江の湖水は海岸線の出入が多いと云ふ意である。

君が船泊て ハテは船のとまる意。草結びけむ 草を結ぶと云ふ行爲は前に既に出てゐる。古人がまじなひの心持で草の葉を結ぶは、再無事にそこまで歸つて來ようとする心を含めるものである。それでこの歌の場合では、船から岸に上つて、その處の草を結び、再その船をとめた場處まで歸つて來ようとする祝の心持でなしたものである。君の船がとまつてそこから上陸し、上陸する誰ものするやうに、やはり草を結んだであらうと云ふ、過去推量の語法を以つて叙してゐる。どの湊に上陸されたであらうかと疑ふ意味の歌である。

【餘論】 上記したやうに、この歌では何處に君が上陸したかを疑つてゐる。さてどういふ場合の歌とも知り難いが、旅に出た人の後を慕つて詠んだ歌とも取れるし、又君が去つて歸つて來ないと云ふ悲の歌とも解せられる。この歌の場合では或は後の方が當つてゐるかとも思はれる。何れにしても廣茫たる湖水の何方に君が行つたかと、探し求める氣分が現れてゐる。

〇二一七

樂浪の 連庫山に 雲居れば 雨ぞ零るちふ 歸り來吾が夫

【原文】 佐左浪乃 連庫山爾 雲居者 雨曾零智否 反來吾背

【口譯】 樂浪の連庫山に雲が居ると、雨が降ると云ふ事であります。歸つていらつしやい、吾が君よ。

【釋義】 樂浪の サマナミは、近江の國の南方の一帯の大地名。連庫山もその中の一つの名であらうが、今のどの山とも知り難い。雨ぞ零るちふ チフは、トイフに同じ。雨が零るといふ事であるの義。連庫山に雲がかゝれば雨が零ると云ひ傳へられたのであらう。歸り來吾が夫 雨が零つて來るから御歸りなさいと、自分の夫に

云つてゐる。しかし自分の夫がさう近くに居るのではなく、旅か何かに出た後で、留守をしてゐる妻が、山に立つ雲を見て心中に遠い所に居る夫に呼び掛けたものである。妻としての心根の見える歌である。

家にして 吾は戀ひむな 印南野の 淺茅が上に 照りし月夜を

【原文】 家爾之氏 吾者將戀名 印南野乃 淺茅之上爾 照之月夜乎

九〇一七 淺茅は西本願寺本による。

【口譯】 家に歸つてから私は戀ふるであらう、この印南野の淺茅の上に照り渡つた月夜を。

【釋義】 吾は戀ひむな ナは助辭で調子を調へる爲に添へた詞。印南野の 播磨の國の印南郡の原。淺茅が上に 淺茅は、茅花が生えてゐて草の深くないのを云ふ。照りし月夜を 作者は印南野の淺茅の上に照つた月を見て、これを念ひ起した語法である。多分、そこに野宿でもした明け方などに、その夜景の、心に染みついて忘れ難くあるのを歌つたのであらう。さて旅を終つて家に歸つてから、この印南野の一夜が忘れ難きものとなるであらうと歌つてゐる。

【餘論】 旅の一夜の非常に心に染み付いた有様がよく現れてゐる。家に歸つてから旅のその夜を念ひ出すであらうと歌つた點に、この歌の興趣はかゝつてゐる。

海人小船 帆かも張れると 見るまでに 靱の浦廻に 浪立てり見ゆ

【原文】 海人小船 帆纜張流登 見左右荷 靱之浦廻二 浪立有所見

二〇一八 浦廻は元曆校本等による。

【口譯】 海人の小船が帆を張つたかと思ふまでに、靱の浦ほとりに波の立つてゐるのが見える。

【釋義】 帆かも張れると カは疑問の詞で帆を張れるかとの意である。波の白く立つ比喻に用ゐてゐる。靱の浦廻に 靱は、備後の國の地名。瀬戸内海の航路は常にこの地を通つてゐる。

【餘論】 この歌は白波の高く立つのを、海人の小船が帆を張つたのかと疑つてゐる。格別の歌ではないが、當時としては比喻が巧に用ゐられてゐる。

鳥じもの 海に浮きゐて 沖つ浪 さわぐを聞けば あまた悲しも

【原文】 鳥自物 海二浮居而 奥浪 嗔乎聞者 數悲哭

七〇一八 四奥浪は元曆校本等による。

【口譯】 鳥のやうに海に浮いてゐて、沖の波の立つのを見ると大變悲しく思はれる。

【釋義】 鳥じもの 鳥である様に。これは鴨等の水鳥が水に浮いてゐる、そのやうに自分は鳥でもないのに海に浮いてゐると云ふ心に、次の句を呼び起してゐる。あまた悲しも アマタは、非常に、大變にの意に用ゐてゐる。海上に出て沖の波の立ちさわぐのを聞いて、心が非常にもの悲しく思はれるのである。

【餘論】 海上に於ける旅愁を描いてゐる。初句の鳥じものも、寂しく海に浮いてゐるものはかなさをよく現した句である。

手に取るが 故に忘ると 磯人のいひし 戀忘れ貝 言にしありけり (古歌集)

【原文】 手取之 柄二忘跡 磯人之曰師 戀忘貝 言二師有來

七〇一九

【口譯】 手に取る、それだけで忘れると海人の云つた、戀を忘れると云ふ貝は、唯言葉だけのものであつた。

【釋義】手に取るが故に忘ると 手に取るそれ故に忘れるとの意で、手に取りさへすればそれだけでも忘れると云ふ効果があるの心である。戀忘れ貝 忘れ貝は、海邊に波が来て置いて行つた貝を云ふ。その貝は美しいので戀をも忘れると云ふ意味に取りなして、これを戀忘れ貝と云つてゐる。もとく波の置き忘れた貝の意味なのを、他物を忘れる意味に取りなしたのであらう。言にしありけり シは、強める爲の助辭。唯言葉だけで、その實が伴はない意である。名は戀忘れ貝と云つても、實は手に取つても戀が忘れられないの意。

【参考】類歌

すみのえに行くとふ道に昨日見し戀忘れ貝ことにしありけり(卷七、一一四九)

一一〇

大海の 水底とよみ 立つ浪の 寄せむと思へる 磯の清けさ (古歌集)

【原文】 大海之 水底豊三 立浪之 將依思有 磯之清左

【口譯】 大海の水底まで鳴り響いて立つ波の寄せようとしてゐる磯の清くある事よ

【釋義】 水底とよみ トヨミは、鳴り響かせての意。寄せむと思へる 波に心があつて寄せようと思つてゐる様に歌つてゐる。寄せようとしてゐるの意。

【参考】類歌

大海の磯もとゆすり立つ波の寄せむと思へる濱のさやけく(卷七、一二三九)

五七二

さ夜深けて 夜中の渦に おぼほしく 呼びし舟人 泊てにけむかも (古歌集)

【原文】 狭夜深而 夜中乃方爾 鬱之苦 呼之舟人 泊兼鴨

【口譯】 夜が更けて、夜中の渦にぼやけた聲で呼んでゐた船人は、船を著けた事であらうか。

【釋義】 夜中の渦に 夜中は、夜の中頃とも取れるし、又夜中と云ふ地名とも取れる。若し地名とすれば、近江の國の地名であらうか。なほ次の如き歌がある。「旅なれば三更を指して照る月の高島山に隠らく惜しも」(卷九、一六九一)。おぼほしく ぼうつとしたはつきりしない意味の形容詞。海上で船人の呼ばはる聲でもあり、かつ何か事があつて呼ぶのであらうから、一層うつたうしいやうな明るくない聲なのであらう。泊てにけむかも 海上で呼ばはつてゐた船人が、今は何處かに船をとめた事でもあらうかと推量してゐる。あの大聲を出してゐた船人はどうした事であらうかと疑ふ心である。

天霧らひ 日方吹くらし 水莖の 岡の水門に 波立ちわたる (古歌集)

【原文】 天霧相 日方吹羅之 水莖之 岡水門爾 波立渡

【口譯】 天が霧こめて日方の風が吹くと見える。水莖の岡の湊に波が立ちわたつてゐる。

【釋義】 天霧らひ 天に霧がたちこめてゐる意。霧らふは、水蒸氣が立つ意味の霧るの連続的狀態を表す詞。日方ふくらし 日方は、風の名、南より吹く風であらう。ただし異説があつて、古く藤原範兼は巽風(東南風)であると云ひ、藤原清輔は坤風(西南風)であると云つてゐる。水莖の 地名とも枕詞とも云つてゐる。地名とするは舊説で、筑前又は近江の地名とする。枕詞とするは、本居宣長の玉勝間に出てゐる説で、水莖はみづみづしき莖といふ事で、岡に續くのは岡を稚の意味に取つて續くのだと云つてゐる。然し枕詞とするは、或は

一三三
岡は元暦校本等による。

さうであらうが、岡と稚とを通ずると云ふは疑はしい。岡の水門に 筑前の國の地名で、古く他の書にも見え
てゐる。

三〇二二三

未通女等が 織る機の上を 眞櫛もち かけ櫛島 波の間ゆ見ゆ (古歌集)

【原文】 未通女等之 織機上乎 眞櫛用 搔上櫛島 波間從所見

【口譯】 未通女等が、織る機の上を、櫛をもつてかき上げて束ねると云ふ、その櫛島が波の間から見える。

【釋義】 眞櫛もちかけ櫛島 機を織るに絲のまよはないやうに、櫛をもつてかき上げて取り束ねる、その櫛島
と云ふ意で、タクは、古言で束ね上げる意である。上の未通女等がからこのかゝげ迄は、たゞ櫛と云はんが爲
の序である。櫛島は所在未詳である。この歌は櫛島を見てその島が波の間から見えると云ふだけの内容である
が、それを特に内容に關係の無い機織の事を云ひ出して序となしたものである。

【餘論】 序歌の序は一首の内容には關係の無いものであるが、この歌では波の間から見える櫛島の氣分が婦人の
機織の業を念ひ起さすに至つたものであらう。

五〇二二三

〇 波高し いかに楫取 水鳥の 浮宿やすべき なほや榜ぐべき (古歌集)

【原文】 浪高之 奈何楫取 水鳥之 浮宿也應爲 猶哉可榜

【口譯】 波が高い。何と楫取よ、水鳥のやうに浮宿をしようか、もつと漕いで行かうか。

【釋義】 いかに楫取 イカニは、楫取を呼びかけて何としようの意味で聲をかけてゐる。楫取は船を漕ぐ人。カヂ

は、水を撃つて船を進める器、その楫を取るものゝ意で、船を漕ぐ人を指す。水鳥の 枕詞。水鳥は水の上に
浮いて寝るから浮宿の枕詞としてゐる。浮宿やすべき ウキネは、水に浮きながら寝る事。ヤは、疑問の助辭。
水鳥のやうに水上に浮きながら寝ようかの意。なほや榜ぐべき なほもつと榜いで船を進むべきであるかと、
船人に對してその意見を尋ねる語法である。

【餘論】 この歌は、船人を呼びかけて尋ねてゐる形を取つてゐる點が、變つてゐる。形の上から云つても、まづ
初句で波高しと云ひ切り、さて楫取水鳥と、トリの音を重ねて調子を整へ、更に、四句と五句とに同じ調子の
語法を用ゐて形を整へてゐる。音調上注意すべき歌である。

七〇二二三

静けくも 岸には波は 寄せけるか これの屋通し 聞きつつ居れば (古歌集)

【原文】 静母 岸者波者 縁家留香 此屋通 聞乍居者

【口譯】 静かにも岸には波の寄つてゐる事であるよ、この家を通して聞いて居れば。

【釋義】 寄せけるか 寄せてゐる事かなと詠歎した語法。これの屋通し この家を通しての意で、作者が家の中
に居り、その家の中を通つて波の静かに寄せて來るのが聞える意である。作者の位置がこの句に依つてはつき
りと現れてゐる。

〇二二四

珠くしげ 見諸戸山を 行きしかば 面白くして いにしへ念ほゆ

【原文】 珠匣 見諸戸山矣 行之鹿齒 面白四手 古昔所念

三 器 旅

【口譯】あの見諸戸山を行つたところ、面白くして昔の事が念はれる。

【釋義】珠くしげ くしげは、櫛箱。珠はその美稱。くしげを見るの意で、懸つてゐる。見諸戸山を 山城の國宇治郡の山であると云ふ。いにしへ念ほゆ 山の景色の面白いのにつけて古代の事が念はれると云ふ意であるが、何かこの見諸戸山につけて昔事件があつたのであらう。何事とも今は知られない。

【餘論】この歌は、見諸戸山を行つたら、その風景の面白さに昔の事が念ひ出されると云ふだけの、むしろ單純な歌で、それを卒直に云ひ切つた點に興味がある。

一〇二三四

〇ぬばたまの 黒髪山を 朝越えて 山下露に ぬれにけるかも (古歌集)

【原文】 黒玉之 玄髮山乎 朝越而 山下露爾 沾來鴨

【口譯】 あゝの黒髪山を朝越えて、山の下の露に濡れた事であつた。

【餘論】 黒髪山は大和にある山の名であると云ふ。この歌は、山を朝越えて山の露に濡れたと云ふだけの歌であるが、その山の名が黒髪山と云ふのは、婦人を聯想される名で、なつかしきがある。恐らくはこの山の名一つでもつてゐる歌であらう。

二〇二三四

〇あしひきの 山行き暮らし 宿借らば 妹立ち待ちて 宿借さむかも

【原文】 足引之 山行暮 宿借者 妹立待而 宿將借鴨

【口譯】 山を歩き暮して宿を借りたならば、吾が妻が立つて待つてゐて、宿を借すであらうか。

【釋義】 あしひきの 枕詞。妹立ち待ちて イモは、婦人に對して親愛の意を表す詞であるが、こゝでは家に残した妻を云ふのであらう。旅に妻を戀ひ、若しこの山に行き暮れたならば、ひよつと吾が妻が出て来て、宿を借すであらうかと疑つたのである。

三〇二三四

〇見渡せば 近き里廻を たもとほり 今ぞ吾が來し 禮巾振りし野に (古歌集)

【原文】 視渡者 近里廻乎 田本欲 今衣吾來 禮巾振之野爾

【口譯】 見たせば近い里ほりであるのを、今私が來た事である、かの領巾を振つた野に。

【釋義】 見渡せば近き里廻を これは、見渡すと直ぐ里が見える近い所であるのをの意である。見れば近いが、行くには迂廻して行かねばならぬ地形である。たもとほり タは接頭語。タモトホリは、一つ所を徘徊する意。廻つての意に用ゐてゐる。禮巾振りし野に 禮巾は婦人の服装で肩からかける長い布。領巾に同じ。それを振るは相圖の爲にする事である。吾が妻の禮巾を振つて相圖をしたのに、今やつと廻つて來た事であるの意。夫が遠くから歸つて來るのを、家から出て禮巾を振つて待つてゐたのであらう。そこまで來るのに手間どつたことを歌つてゐる。

八〇二四二

○草香山の歌一首

あし照る 難波を過ぎて うち靡く 草香の山を 夕暮に 吾が越え來れば 山も 狭に 咲ける馬酔木の 惡しからぬ 君を何時しか 往きてはや見む

三 釋 旅

右の一首は 作者微しきに依りて 名字を顯さず

【原文】 草香山歌一首

忍照 難波乎過而 打靡 草香乃山乎 暮晚爾 吾越來者 山毛世爾 咲有馬醉木乃 不惡 君乎何時 往而 早將見

右一首 依作者微不顯名字

【題意】 草香山は大和と河内との境にある山で、難波への通路に當つてゐる。この歌は、左註に、作者の身分が賤しいから名前を書かないと記してある。當時は何と云ふ人の作か知れてゐたのであるが、その作者の身分が低かつたので、名前を出してない。この時代は階級思想が中々盛であつたので、かう云ふ所にまでその影響が出てゐるのである。

【口譯】 あの難波を過ぎて、この草香山を夕暮に私が越えて來れば、山いつばいに咲いてゐる馬酔木の花のやうに、悪しくない君を、何時かへ行つて早く見ませう。

【釋義】 おし照る 難波の枕詞。大和からの山越えに難波の海が輝いて見えるから、名付けたのであらう。うち靡く 枕詞。草は靡くものであるから懸る。ウチは、靡くの意味を強める爲に添ふる詞。山も狭に 山も狭きまでの意、山いつばいに。咲ける馬酔木の 馬酔木は灌木の名。春の始に白い清らかな房花をつける。この歌では、草香の山に咲いてゐる馬酔木を取つて、そのアシの音を用ゐて、次の悪しからぬと云はむが爲の序となしてゐる。悪しからぬ 形の上にも悪しくない意味でもあり、又作者自身として悪しく思つてゐない意味をも含めてゐる。君を何時しか この君と指すのは、心にその人と思ふのである。何時しかは、何時か

の意で、何時になつたら行かれるかの心持で軽い疑をなしてゐる。

【餘論】 この歌は、特に身分の低い人の作として意味がある。萬葉の作者は、おほむね官吏又はその家族であるが、實際にはかやうな低い身分の者にまで歌は擴まつてゐたのである。

○名木河にて作れる歌三首(二首略)

家人の 使なるらし 春雨の 避くれど吾を 沾らす念へば (人麻呂集)

【原文】 名木河作歌三首

家人 使在之 春雨乃 與久列舒吾乎 沾念者

【題意】 山城の名木河のほとりで作つた歌。

【口譯】 家に残した人の使と思はれる、春雨が避けても自分を沾らす事を思へば。

【釋義】 家人の 家に残した人であるが、妻を指すのであらう。沾らす念へば 沾らす事を念へばの意である。作者が避けても春雨が沾らす事を念へば、この春雨は家なる人の使であると思はれるの意である。

○宇治河にて作れる歌二首(一首略)

巨椋の 入江響むなり 射部人の 伏見が田井に 雁渡るらし (人麻呂集)

【原文】 宇治河作歌二首

巨椋乃 入江響奈理 射日人乃 伏見何田井爾 雁渡良之

三 蜀 旅

七六一六九

沾は活字 附訓本に よる。

九六一六九 田井は藍 紙本等に よる。

【題意】山城の國の宇治河のほとりで詠んだ歌。

【口譯】巨椋の入江が鳴り響いてゐる。かの伏見の田に雁が渡ると思はれる。

【釋義】巨椋の入江は、今は池になつて残つてゐる。昔は宇治河がこれに流れ落ちたもので、すなはち宇治河の入江をなしてゐたものである。その入江に物音がする事を、叙してゐる。さうしてこれを事實として三句以下の推量の句を起してゐる。射部人の 伏見の枕詞。射部は、弓を携へてゐる部隊を云ふ。弓を射る人々は伏して見るから伏見の枕詞に用ゐてゐる。伏見が田井に 伏見は、山城の地名。田井は、田のある處の義であるが、廣く田そのものを云ふ事になつてゐる。

【餘論】この歌も、伏見の田に雁が渡ると云ふ事を、巨椋の入江が鳴り渡つてゐるのに依つて想像しただけの歌で、内容から云へば格別の事はない。唯初二句に、巨椋の入江響むなりと、しつかり云ひ切つた語法が強くあり、これを受けて伏見が田井の有様を推量した句法も確である。そこにこの歌の力強さが感ぜられる。

○筑波山に登りて月を詠める一首

二七一

天の原 雲なき夕に ぬばたまの 夜渡る月の 入らまく惜しも

【原文】登筑波山詠月一首

天原 雲無夕爾 烏玉乃 宵度月乃 入卷悵聞

【題意】筑波山に登つて、月の入らむとするを惜んで詠んだ歌。

【口譯】大空に雲の無い夕に、夜渡る月の入らうとするが惜しいことである。

【釋義】夜渡る月の 夜間を渡り行く月の。入らまく惜しも イラマクは、入らむことの義。モは感動詞。

○芳野の離宮に幸しし時の歌二首

三〇一

瀧の上の 三船の山ゆ 秋津邊に 來鳴さわたるは 誰喚兒鳥

【原文】幸芳野離宮時歌二首

瀧上乃 三船山從 秋津邊 來鳴度者 誰喚兒鳥

【題意】吉野の離宮に行幸のあつた時の歌。いつの天皇の行幸とも知られない。

【口譯】激流の上の三船の山から、秋津のほとりに、來て鳴いて渡るのは、誰を呼ぶ喚兒鳥であるぞ。

【釋義】瀧の上の タギは激流で、吉野川の流をいふ。三船の山ゆ 三船の山は、吉野山中の一峰の名。離宮のあるところに臨んでゐる山と見える。ユは、そこから通つてこちらへ。瀧の上の三船の山に居る雲の常にあらむとわが思はなくに(卷三、二四二)。秋津邊に 秋津は、吉野川に臨める地の名。誰喚兒鳥 喚兒鳥の鳴く聲は、人を喚ぶに似てゐるので、誰を呼ぶとて鳴く鳥ぞの意に、懸け詞としてゐる。誰を呼ぶ喚兒鳥ぞの意である。

落ち激ち 流るる水の 磐に觸り 淀める淀に 月の影見ゆ

右の二首 作者いまだ詳ならず

【原文】落多藝知 流水之 磐觸 與杼賣類與杼爾 月影所見

三〇二

二首は藍紙本等に

右二首作者未詳

【口譯】 落ち激して流れる水が、磐に觸れて、淀んでゐる淀に月の影が見える。
 【釋義】 淀める淀に ヨドは、水の停滞してゐるところ。ヨドメルヨドは、水が流れないで淀んでゐる淀の義。
 【餘論】 この歌は、水の動態がよく寫されてゐる。いかにも激しく落ち来る水が、岩に觸れて、その勢を減じ、淀みを作つた、その水の動きが巧に描かれてゐる。さうしてその淀みに月の影が落ちたといふ、動中の靜處をよく捕へてゐる。

○槐本の歌一首

樂浪の 比良山風の 海吹けば 釣する海人の 袂かへる見ゆ (人麻呂集)

【原文】 槐本歌一首

樂浪之 平山風之 海吹者 釣爲海人之 袂變所見

【題意】 琵琶湖の景勝を詠んだ歌である。槐本は作者の氏名の一部で多分氏であらうが、何人とも知られない。

【口譯】 樂浪の比良の山風が、湖上を吹くと、釣をする漁人の袖が翻る、それが見える。

【釋義】 樂浪の 近江の國の南方一帯の大地名。比良山風の 比良は山の名。近江と山城との國境を成してゐる。

○羈旅にて思を發せる

三三三五

【原文】 羈旅發思

三雪零 越乃大山 行過而 何日可 我里乎將見

【口譯】 あの雪の降つてゐる越の大山を越えて行つて、何時になつたらわが故郷を見るであらう。

【釋義】 越の大山 今のどの山といふことは、さだかでない。元來この歌は、越前越中越後等の北國に、地方官となつて赴任した者が、雪の積つてゐる山を望み見て、いつになつたら歸るべき時期が來て、あの山を越えて故郷に歸れることだらうといふ意を歌つたのである。それで、その國府の何國のであるかによつて、望み見る山が違ふわけである。行き過ぎて 行き越えて。行き經過しての意。いつれの日にか 任期满ちて歸るべき日を、いつれの日にかと云つてゐる。わが里を見む わが郷里で、都のことである。

【餘論】 雪つむ山のあなたに、わが郷里を思ひやつた、作者の心があはれである。

○いで吾が駒 早く行きこそ 眞土山 待つらむ妹を 行きて早見む

【原文】 乞吾駒 早去欲 亦打山 將待妹乎 去而速見牟

【口譯】 どうかわが馬よ。早く行つてお呉れ。この眞土山の名のやうに、待つてゐるであらうわが妻を、早く行つて見よう。

【釋義】 いで吾が駒 イデは、どうかと願ふ意。早く行きこそ このコソは願望の助辭。眞土山 大和から紀州に入つて路にある山。今その山を越えてゐるのであらう。さて同音によつて、次のマツの序としてゐる。待

四三三五

つらむ妹を わが家にて待つてゐるであらう妻を。紀州から大和に向けての旅であらう。

【餘論】 この歌、催馬樂に入つて、詞句に小異がある。

いでわがこま はやくゆきませ まつち山 あはれ まつち山 はれ
二段 つら山 まつらん人を ゆきてはや あはれゆきてはやみん（梁塵愚案抄）

催馬樂の歌は、もと民間に謡はれたものから出發してゐるので、萬葉のこの歌が、やがて歌はれてゐたものであることがわかる。これによつて、萬葉の卷十二あたりが、その一部に、實際歌はれてゐた歌をも採録してゐるといふことは出來よう。しかしこれを以つて、直に卷十二の全部の性質を規定するわけに行かぬのは勿論である。

室の浦の 湍門の埼なる 鳴島の 磯越す浪に ぬれにけるかも

【原文】 室之浦之 湍門之埼有 鳴島之 磯越浪爾 所沾可聞

【口譯】 室の浦の湍門の埼にある鳴島の磯を越す浪に沾れたことであつた。

【釋義】 室の浦 播磨の國の地名。湍門の埼なる セトは、兩岸の間の狭い海峡。サキは突角。鳴島 鳴門、鳴瀬、鳴澤等の語と同じく、潮流や河流などの音高く鳴る地形を鳴の字で表してゐる。潮流の高く鳴る島の義。

○別を悲む歌

春日野の 浅茅が原に おくれて居て 時ぞともなし 吾が戀ふらくは

四三二六
湍は元曆校本等に
よる。

六三一九

【原文】 悲別歌

春日野之 浅茅之原爾 後居而 時其友無 吾戀良苦者

【題意】 旅に立つ人を送つて、別を悲んだ歌で、留つた人の作であるが、旅行く人との關係はわからない。

【口譯】 春日野の浅茅の原に残つてゐて、わたくしの戀ふる事は、いつを時ともございません。

【釋義】 おくれ居て あとに残つてゐて。時ぞともなし 戀をする時と定つた時がない。何時でも絶えずに戀をしてゐる意。吾が戀ふらくは わが戀ふることは。

○問答歌

白栲の 袖の別を 難みして 荒津の濱に やどりするかも

【原文】 問答歌

白栲乃 袖之別乎 難見爲而 荒津之濱 屋取爲鴨

【題意】 以下二首は、旅に立つ人と、そを送る人との問答の歌である。この歌は旅に立つ男の歌である。

【口譯】 君の眞白の袖と別れ難いので、荒津の濱で、宿を取ることである。

【釋義】 白栲の シロタへは、白色の織物である。この句は、袖の枕詞であるが、實際また當時の貴族の男女が白色の衣服を着てゐたものである。さうしてこの歌は、多分遊行女婦との送別と思はれるが、さういふ種類の女も、白い綺麗な衣服を着てゐたのであらう。荒津の濱に 筑前の國の海濱の名である。大宰府あたりから京に上らうとする旅で、女が荒津の濱まで送つて來たことは、次の歌に表れてゐる。

五三二二

六三三二

草枕 旅行く君を 荒津まで 送りぞ來つる 飽き足らねこそ

右二首

【原文】 草枕 鬻行君乎 荒津左右 送來 飽不足社

右二首

【題意】 前の歌に對する婦人の答である。

【口譯】 旅においでになるあなたを、荒津まで送つて参りました。お名残惜しいからでございます。

【釋義】 飽き足らねこそ 飽き足らねばこそこの意で、下に叙述部を略してある。まだ十分に満足しない。別が惜しいからの意。

三三三三

幣帛を 奈良ゆ出でて 水蓼 穂積に至り 鳥網張る 坂手を過ぎ 石走る 甘南

備山に 朝宮に 仕へ奉りて 吉野へと 入り坐す見れば 古おもほゆ

【原文】 帛叫 檜従出而 水蓼 穂積至 鳥網張 坂手乎過 石走 甘南備山丹 朝宮 仕奉而 吉野部登 入 座見者 古所念

【題意】 奈良の宮から吉野の離宮へ行幸の時の歌である。奈良朝に入つてからの作であらうが、作者は傳はらな

【口譯】 奈良から出て、穂積に至り、坂手を過ぎ、急流に臨んでゐる甘南備山の離宮に御一泊遊ばされて、吉野

へとお入りになるのを見れば、昔が思はれます。

【釋義】 幣帛を 枕詞、ミテグラは、神前に供ふる幣物をいふ。さて奈良と続く意はわからない。幣帛は神前に並べるものであるから、ナラと續くといふ説がある。その他、誤字とする説あり、また奉幣使の吉野入りを歌つたので、幣帛を捧げての意であるとなす説もあるが、いづれも臆説である。奈良ゆ出でて 平城の宮から出て。水蓼 枕詞。水蓼は植物。蓼の穂といふ意から、穂積に懸かる。卷十六に、八穂蓼を穂積の朝臣と用ひてゐる。穂積に至り 穂積は地名。鳥網張る 枕詞。トナミは鳥の網で、坂の上は、鳥網を張るに最好的地形であるから、坂に懸かる。坂手を過ぎ 坂手は地名。石走る 水の石上を走る意で、激流を表してゐる。次の甘南備山が急瀬を廻らしてゐる叙述である。甘南備山に 飛鳥の甘南備山である。次の反歌にある三諸の山といふも同處で、此處に離宮があつたのである。朝宮に仕へ奉りて その離宮に御一泊になつて、朝の奉仕を申し上げることを叙してゐる。古思ほゆ 昔の行幸のことが思はれる意である。

【餘論】 この歌は、奈良から吉野への行幸の途が、後世の道行き風の文體で記されてあつておもしろい。歌も奈良朝の作としては古雅である。恐らくは、前朝の遺臣の作で、今上の行幸を見て、前帝の御代を思ひ起して、古思ほゆと歌つてゐるものであらう。

○反歌

月日は 變れども久に 流らふる 三諸の山の 離宮地

右二首 但し或る本の歌に ふるき都のつ宮どころと曰へり

三 編

旅

流經は元
曆校本等
による。

【原文】反歌

月日 攝友久 流經 三諸之山 礪津宮地

右二首 但或本歌曰 故王都跡津宮地也

【口譯】 月日は變るけれども、永久に存してゐるこの三諸の山の離宮の地よ。

【釋義】 變れども久に この歌の二三句は、原文もと攝友久經流とあつて、古訓カハリユケトモヒサニフルと讀み、諸家に誤脱の説のあつたところである。今は、元曆校本、天治本、類聚古集等の字面に従つて改定した。攝は、代の意味のある字であるから、今攝友をカハレドモと讀む。時は昔の時で無い意である。流らふるこの世の中に存在し經過する意。三諸の山の 前の長歌の甘南備山と同じ山。赤人の歌に、三諸の神名備山（卷三、三二四）とも見えてゐる。離宮地 トツミヤは、外つ宮で離宮をいふ。トツミヤドコロは、離宮である土地の意で、大宮處の類語がある。

【餘論】 寛永版本には、この歌の左に、此歌入道殿讀出給の註があるが、これは後人の記入で、古本には無い。この歌は次點の歌であるが入道殿が始めて訓を附けたよしの註である。この入道殿は、御堂關白藤原道長と考へられる。（萬葉集書志三七頁参照）

二
三
三

斧取りて 丹生の檜山の 木折り來て 筏に作り 二楫貫き 磯榜ぎ廻みつつ 島
傳ひ 見れども飽かず み吉野の 瀧もどとろに 落つる白浪

機は代匠
記に作る
廻作は元
曆校本等
による。

【原文】 斧取而 丹生檜山 木折來而 楫兩作 二楫貫 磯榜廻乍 島傳 雖見不飽 三吉野乃 瀧動々 落白浪

【題意】 吉野川の景勝を歌つてゐる。やはり吉野の離宮に行幸のあつた際の歌であらう。

【口譯】 斧を取つて丹生の檜山の木を伐り來て、筏に作り、楫をつけて、磯を榜ぎ廻りつゝ、島を傳つて見れども飽きないことである、この吉野川の激流もどとろに落つる白浪は。

【釋義】 丹生の檜山 丹生は、吉野川の上流の地名。筏に作り 筏は、原文もと機とある。古寫本には、種々に作つて一致しないが、木偏の字であることは一致してゐる。今代匠記に従つて、楫とし、イカダと讀む。二楫貫き マカヂは、二挺の楫で、舟の左右に取りつける。島傳ひ 水に臨んでゐる地形を島といふので、こゝでは、吉野川に臨んだ美しい地をいふ。

○反歌

み吉野の 瀧もどとろに 落つる白浪 留りにし 妹に見せまく 欲しき白浪

右二首

【原文】 反歌

三芳野 瀧動々 落白浪 留西 妹見西卷 欲白浪

右二首

【口譯】 吉野川の瀧もどとろと落ちる白浪よ。家に留つたわが妻に見せたいこの白浪よ。

三
三
三
友歌は元
曆校本等
による。
見西卷は
天治本等
による。

【釋義】 留りにし 家に留つた意で、都の家に残しておいた。妹に見せまく 妻に見せむことの。

【餘論】 この歌は前の長歌の反歌であるが、旋頭歌の形を取つてゐる。旋頭歌の反歌は、集中これ一つで、珍しいものである。

第二章 相聞 往來

相聞、又は相聞往來は、本來、人と交通する意味である。それを本集には、人に贈る歌、また答ふる歌の意に取つて、部類の一項と爲してゐる。家族關係、親族關係、朋友關係、又はその他の關係の、いかなる場合をも含んでゐる贈答の歌が、これに收められてゐる。たゞし結果としては、自然男女關係のものが大部分を占めることにはなるが、それは本來の性質では無い。それ故に後世の戀の歌を多く含むことにはなるが、戀の歌すなはち相聞の歌では無い。相聞の歌は、手紙と同様に、唯一人をその歌の讀者として豫想して作られるところに、特色ある性質が生ずる。

一 四季の相聞

本集では、卷八と十とに、四季に分ちて、雜歌、相聞等の歌を集めてゐる。そのうち卷十は作者の名を記してゐない。今これによつて四季に關係ある相聞の歌を録することとする。

○花に寄す

吾が夫子に 吾が戀ふらくは 奥山の 馬酔木の花の 今盛なり

【原文】 寄花

吾瀬子爾 吾戀良久者 奥山之 馬酔花之 今盛有

一 四季の相聞

【口譯】 わが君に、わたくしの戀ひますることは、かの奥山に咲いてゐる馬酔木の花のやうに、今盛でございませう。

【釋義】 吾が戀ふらくは コフラクは、戀ふること。奥山の馬酔木の花の 以上は譬喩で、今盛なりと云はむが爲に云ひ起した句である。

梅の花 しだり柳に 折り雑へ 花に供養せば 君に逢はむかも

【原文】 梅花 四垂柳爾 折雜 花爾供養者 君爾相可毛

【口譯】 梅の花を、しだり柳に折りて雑へて、花として、佛に奉つて供養したならば、君に逢へることでありませうか。

【釋義】 花に供養せば 佛に奉る花として供へたならば。供養は、佛教語で、物を供へて資養する義。佛教の漸く一般的にならうとしてゐる時代で、歌にもその影響を示してゐる。歌としては、新しい語を用ゐたのである。

○雨に寄す

春雨に 衣は甚く 通らめや 七日し零らば 七日來じとや

【原文】 寄、雨

春雨爾 衣甚 將通哉 七日四零者 七日不來哉

七
日
不
來
七
日
元
曆
校
本
等
に
よ
る

四
一
九
〇

【口譯】 春雨に衣はひどく濡れ通りませうや。雨の爲に來ないといふならば、七日降つたら七日來ないといふのですか。

【釋義】 通らめや 濡れ通らうや、通りはせぬの意の反語の語法。春雨は細微なものゆゑ、衣服の裏までは通りませまいの意。七日し零らば シは強める爲の助辭。七日は、日數の多いことを表してゐる。七日來じとや 七日は、原文もと七夜とあつた。今、古本に従つて七日とする。意はいづれにしても通ずる。七夜の方が巧緻で、七日の方は、いくらかおほやうな點がある。七日來ないとにやの意に、詰問してゐる語勢である。

○松に寄す

梅の花 咲きて散りなば 吾妹子を 來むか來じかと 吾が松の木ぞ

【原文】 寄、松

梅花 咲而落去者 吾妹子 將來香不來香跡 吾待乃木曾

【口譯】 梅の花が咲いて散つたならば、あとは、あなたを、來るか來ないかとわたしの待つ、その松の木ですよ。

【釋義】 來むか來じかと 來ようか來ないだらうかと。荒雄らを來むか來じかと飯盛りて門に出で立ち待てど來まさず(卷十六、三八六一)。吾が松の木ぞ 松に、待つのを懸け詞にしてゐる。原文に、待の字を書いてゐる。妹等がり今木の嶺に茂り立つ嬬待木者古人見けむ(卷九、一七九五)。この歌の第四句も、嬬待つに、松の木を懸け詞にして、同じく待の字を書いてゐる。同様の書き方である。

二
一
九
二

四一九二

○ 藪を贈る

丈夫が 伏し居嘆きて 造りたる しだり柳の 藪せ吾妹

【原文】 贈藪

大夫之 伏居嘆而 造有 四垂柳之 藪爲吾妹

【題意】 或る男から或る婦人に、藪を贈つた歌である。藪は、時の花などにて作つて、髪飾にいたゞく物である。

【口譯】 男子が伏したりゐたりして嘆いて、作りましたしだり柳の藪を、なさいませ、吾が君よ。

【釋義】 伏し居嘆きて 寐るにつけ居るにつけ嘆いての心で、座臥ともに歎息せられる意である。戀の歎息で、その切なる爲に、歎きの何時もせられるのを云ふ。藪せ吾妹 カヅラセは、藪をなさいと云ふ意の命令法。ワギモは、先方の婦人を、親愛する心持で呼びかけてゐる。

○ 花に寄す

吾こそは 憎くもあらめ 吾が屋前の 花橋を 見には來じとや

【原文】 寄花

吾社葉 憎毛有目 吾屋前之 花橋乎 見雨波不來鳥屋

【口譯】 私こそは憎くもありませうが、私の屋前の橋を、見には來ないと云ふのでありますか。

【釋義】 吾が屋前の 屋前は、ニハと讀み、家の前の廣場を云ふ。花橋 花の咲いてゐる時の橋を云ふ。見に

四一九九

五一九九

○ 日に寄す

六月の 地さへ割けて 照る日にも 吾が袖乾めや 君に逢はずして

【原文】 寄日

六月之 地割割而 照日爾毛 吾袖將乾哉 於君不相四手

【口譯】 六月の土さへ割けるまでに照る太陽にも、私の袖は乾きますまい。君に會ひませんでは。

【釋義】 六月の 昔の曆面の夏は、四、五、六月の三月であつたが、實際に最暑いのは、六月であつたので、夏の眞盛の意味に、六月を用ゐてゐる。地さへ割けて照る日にも 夏の日の烈しい爲に、土地までも割れる事を叙してゐる。吾が袖乾めや 自分の袖が涙の爲に濡れてゐるので、さやうな夏の烈日にも、君に會はずしては、乾く事はないと云ふ意に、反語を用ゐて述べてゐる。

【餘論】 この歌は、上の三句は、たゞ夏の烈しい日を云つて、それ程の烈しい日にもと云ふだけに、比喻に用ゐたのであるが、それにしても、かやうな夏の烈しい風物の叙述は、集中に於いても、極めて珍しい。この外には筑波山に登る歌に、汗をかくと云ふのがある位のものに過ぎない。

○ 水田に寄す

一〇二二五

たちばなを 守部の里の 門田早稻 刈る時過ぎぬ 來じとすらしも

【原文】 寄水田

橋乎 守部乃五十戸之 門田早稻 刈時過去 不來跡爲等霜

【口譯】 守部の里の門の田の早稻は、まう刈る時が過ぎました。それでもあなたは、來まいとするのでありませう。

【釋義】 たちばなを 枕詞。たちばなを守ると云ふ意味から、守部の枕詞としてゐる。守部の里の 守部は、番をする役を云ふ。しかしこの歌では、守部と云ふ地の名であらうと思はれる。五十戸と書いて、サトと讀ませるのは、戸令に、「凡戸以五十戸爲里」と見える。門田早稻 家の門前近くある田を、門田と云ふ。早稻は、早く熟する稻。稻が熟して、刈る時が来てしまつたの意で、句切りである。時の久しく経過した事を云ふので、或は、稻の熟する頃に來ようと云ふ約束などが、あつたのであらう。來じとすらしも ラシは、先方の心の中を推量してゐる。來まいとすると見えるの意で、上の早稻を刈る時が過ぎたのに、まだ來ないと云ふ事を根據として、推量の辭を下してゐる。

○蟋に寄す

こほろぎの 待ち歡べる 秋の夜を 寐るしるしなし 枕と吾は

【原文】 寄蟋

蟋蟀之 待歡 秋夜乎 寐驗無 枕與吾者

四〇二二六

【口譯】 蟋蟀の待ち歡んでゐる秋の夜を寐るかひがありません、枕と私は。

【釋義】 蟋蟀の コホロギは、秋の夜、庭前又は人家の傍などに、鳴くよしを歌つてゐるから、今も云ふコホロギの事であらう。待ち歡べる 蟋蟀が秋の夜の來るのを待つて鳴いてゐるのを、待ち歡んでゐると歌つてゐる。寐るしるしなし 寐てもそのかひが無いの意。人が來ないで、一人寐るので、そのかひがないのである。蟋蟀は歡んでゐる秋の夜を、自分は慰まずに、過してゐる意である。枕と吾は 自分一人の意であるが、特に枕を相手に引き出したのである。枕に對して、一人寐の憂を語る意味の歌で、かういふ心持の歌は多くある。一例を上げると、「夕されば床のへ去らぬ黄楊枕いつしか汝主を待つは苦しも」(卷十一、二五〇三)

○花に寄す

戀ふる日の 日長くしあれば み苑生の 韓藍の花の 色に出でにけり

八〇二二七

【原文】 寄花

戀日之 氣長有者 三苑圃能 辛藍花之 色出爾來

【口譯】 戀をしてゐる日の長くありましたから、例へば、み苑生の韓藍の花のやうに、色に現れました。

【釋義】 日長くしあれば ケは、時間を云ふ。シは、助辭。時間が長くあるから、時が久しく経過したからの意。戀をして長い間になつたから。み苑生の 相手方の苑を云ふのであらう。或は、韓藍も染料植物なので、官で培養してゐる苑を、云ふかとも思はれる。韓藍の花の 今の鶏頭の事であると云ふ。この花は、秋になつて、赤く色が出るので五句の序に用ゐてゐる。三、四句は、五句の爲の序に過ぎない。色に出でにけり 表に現れ

たのを云ふ。戀が表面に出て、それと知られる様になつた事を云ふ。

五十二九

不來座は元曆校本等による

○黄葉に寄す

我が屋戸の 田葛葉日にけに 色づきぬ 來まさぬ君は 何情ぞも

【原文】 寄黄葉

我屋戸之 田葛葉日殊 色付奴 不來座君者 何情曾毛

【口譯】 私の家の田葛の葉は、日増しに色が付きました。それだのお出でにならぬあなたは、どういふお心でせう。

【釋義】 我が屋戸の ヤドは、家處の義であらう。家屋及びその周圍を指す時に、用ゐてゐる。田葛葉日にけに

日にけには、日毎に、時毎にの意。ケは、時間の意味のケである。何情ぞも 田葛の葉は、日増しに色づいて黄葉したのに、御出でにならないあなたの心は、まあ何と云ふお心でせうと、歎いた語氣である。

○月に寄す

君に戀ひ しなえうらぶれ 吾が居れば 秋風吹きて 月傾きぬ

【原文】 寄月

於君戀 之奈要浦觸 吾居者 秋風吹而 月斜焉

【口譯】 君に戀ひて、なえなえとし慰ますに、私が居りますと、秋風が吹いて、月が傾きました。

八十二九

舊は元曆校本による

【釋義】 しなえうらぶれ シナエは、なよなよと萎える意味。ウラブレは、心が樂まず慰まない意味。

【餘論】 君に戀をして鬱鬱として居ると、自分の身の上を叙し、さて下には、自然界の有様を、單に叙してゐるに留めてゐる。それで、秋風吹きて月傾きぬと云ふので、時が経過した心を表してゐる。心理上の描寫と自然の描寫とがよく融和して、そこに一種の妙趣を出してゐる。

○雪に寄す

思ひ出づる 時は術なみ 豊國の 木綿山の雪の 消ぬべく念ほゆ

【原文】 寄雪

思出 時者爲便無 豊國之 木綿山雪之 可消所念

【口譯】 念ひ出る時は致し方なさに、豊後の國の木綿山の雪のやうに、消えてしまひさうに思はれます。

【釋義】 豊國の 豊前、豊後の兩國を合せ云ふ。木綿山の雪の 木綿山は、豊後の國に在る山の名。その山の雪の意である。この歌の作者が、木綿山の見ゆるあたりに居たか、又は豊後の國にゐる人に贈つた歌かであらう。三、四句は、五句の消ぬべくを云はむが爲の、序である。消ぬべく念ほゆ 消えさうに思はれるの意で、上の雪を受けて、自分が死にさうに思はれると、はかなき心を寫してゐる。

八十三四

和射美の 嶺行き過ぎて 零る雪の 厭ひもなしと 白せその兒に

【原文】 和射美能 嶺往過而 零雪乃 厭毛無跡 白其兒爾

一四季の相聞

【口譯】和射美の嶺を越えて行つて、零る雪のやうに厭ふ事もないと、その兒に云つて下さい。

【釋義】和射美の これは美濃國不破郡に在る地名。和射美が原、和射美野など見えてゐる。嶺行き過ぎて作者自身が和射美の山を越えて行つて。零る雪の 和射美の嶺に雪の零つてゐるのを取つて、比喻に用ゐてゐる。雪は零るが、その雪をも厭はずに行く意に、四句の比喻となしてゐるのであらう。厭ひもなしと その自分の想ふ兒を厭ふ事もない、あきると云ふ事が無いの意で、遠い國の山を越えて行つても、猶忘れられないの意を歌つてゐる。白せその兒に 作者は遠國に在つて、誰か中に人を置いて、自分の想ふ人に傳言をする意味に歌つてゐる。その兒に云つて下さいの意である。

二 正述心緒

萬葉集の卷の十一と十二とは、相聞往來の歌の中に、更に正述心緒と寄物陳思との二つを立ててゐる。今これに依つて、まづ正述心緒の歌を記さう。正述心緒と云ふは、他のものを材料としないで、直に作者の心中を歌ひ出したものである。

六二三八

石すら 行き通るべき 健男も 戀とふ事は 後悔いにけり (人麻呂集)

【原文】石尙 行應通 建男 戀云事 後悔在

【口譯】岩石さへも行き通る事の出来る勇士も、戀と云ふ事は、後悔をした事である。

【釋義】行き通るべき 行きぬける事の出来る意。初二句は、如何なる困難にも打ち勝つ意で、男子の強い事を表してゐる。戀とふ事は 戀と云ふ事はの意。後悔いにけり 戀の道には、後になつて前の事を悔いる事であるの意。岩石をも突破する程の勇士でも、戀といふものは、しなければよかつたと後になつて悔ゆるといふ意である。

四二三九

朝影に 吾が身はなりぬ 玉かざる ほのかに見えて 去にし子故に (人麻呂集)

【原文】朝影 吾身成 玉垣入 風所見 去子故

【口譯】私は朝の影のやうに瘦せました。ほのかに見えただけで行つてしまつた人故に。

【釋義】朝影に 朝日の光でうつる影の意で、瘦せた比喻に用ゐてゐる。朝影のやうなあはれなものにの意である。玉かざる 枕詞であるが、何故ほのかに續くかはわからぬ。

【餘論】この歌は、卷十一では柿本人麻呂の集の歌とし、正述心緒に入れてあるが、又卷十二にも出て、それは寄物陳思の部に入つてゐる。昔でも、この二つの分け方に、はつきりした所が無かつたのであらう。

玉久世の 清き河原に 身被して 齋ふいのちは 妹が爲こそ (人麻呂集)

【原文】玉久世 清川原 身被爲 齋命 妹爲

【口譯】清い久世川の河原で身被をして、何事もなかれと祈るこの命は、あなたの爲とてであります。

三二四〇
川原は古
葉略類聚
鈔等によ
る。

【釋義】玉久世の 清らかな玉の様な久世川の意である。クゼは、山城の國の川の名。古語で瀬の意である。身被して 身被は、一切の不淨を被ひ捨てゝる爲に、水で身を洗ふのを云ふ。但し形式的に、河に流し捨てゝる意に、河邊で身被の行事をするだけである。齋ふのちは イハフは、不淨のものゝ近寄らぬやうに、身を守るを云ふ。もと言靈の力でなした事であるが、こゝでは、神を祀つて穢を寄せない心である。命の亡くなるのは、穢に犯される故と考へられてゐたので、齋をして命を保つ意味である。その目的の爲に、久世川の河原で身被をしたと云つてゐるのである。

誰ぞこの 吾が屋戸に來喚ぶ たらちねの 母に嘖ばえ 物思ふ吾を

七二五二
足千根乃
等は嘉曆本
による

【原文】 誰此乃 吾屋戸來喚 足千根乃 母爾所嘖 物思吾呼

【口譯】 誰ですか、この私の家に来て喚んでゐるのは。母に叱られて物を思つてゐる私ですのに。

【釋義】 誰ぞこの その人と承知してゐるのであるが、わざと誰ですかと詰問した形を取つてゐる。コノは屋戸を強く指定する爲に用ゐられてゐる。吾が屋戸に來喚ぶ 自分の家に来て喚んでゐるそれは誰かと云ふ心である。二句切れである。たらちねの 母の枕詞。母に嘖ばえ コロバエは、口で責められて叱られること。物思ふ吾を 母親に叱られて物思をしてゐる吾であるのの意で、さういふ場合をも考へずに、外に来て喚んでゐると詰つてゐる語氣。

【餘論】 この歌は、普通の相聞と違つて、餘程民謡風の内容を持つてゐる。恐らくは、口づから歌はれたものを、何人かと筆録して置いたものであらう。

二五三

吾が夫子が 其の名告らじと たまきはる 命は棄てつ 忘れたまふな

【原文】 吾背子我 其名不謂跡 玉切 命者棄 忘賜名

【口譯】 あなた様の御名前は申すまいとして、命は棄てました。御忘れ下さいますな。

【釋義】 其の名告らじと 吾が君の名は云ひますまいとしての意。何か想ふ男の名を云へと責められてゐる場合のやうである。何處までも、男の名を隠さうとする心である。社會上の問題となるやうな場合と見える。たまきはる 枕詞、魂の極まる意味であると云ふが確で無い。それで、命又は内等の枕詞となつてゐる。命は棄てつ 名を云へと責められるので、命を棄てて名を隠す強い心である。忘れたまふな 自分がこれ程までにあなたを爲に盡してゐるのを、お忘れ下さいますなと求めてゐる。

【餘論】 何か特殊の場合の歌のやうで、劇的な所がある。變つた歌と云ふべきであらう。

ぬばたまの 妹が黒髪 今夜もか 吾無き床に 靡けて宿らむ

【原文】 夜干玉之 妹之黒髪 今夜毛加 吾無床爾 靡而宿良武

【口譯】 私の想ふあなたの黒髪は、今夜も又私のゐない床に靡かして、寐てゐるでありませうか。

【釋義】 ぬばたまの 黒の枕詞。今夜もか モで、今夜もやはりの意味を表はしてゐる。別れて日を経た有様を云つてゐる。カは、疑問の辭。靡けて宿らむ ナビケテは、黒髪の主が、髪を床に靡かせての意で、婦人の寐る様を描いてゐる。髪を靡かせて寐てゐるであらうかと、推量してゐる語法。

二五六
四
今夜は嘉
曆本等に
よる

二二五七

【餘論】 自分のみない間の妻の夜床を思ひやつた歌であるが、黒髪を點出した所に、この歌の生命がある。

偽も 似つきてぞ爲る 何時よりか 見ぬ人戀ふに 人の死せし

【原文】 偽毛 似付會爲 何時從鹿 不見人戀爾 人之死爲

【口譯】 偽もありさうな事を云ふものです。人を見ないで戀をする爲に、人が死んだと云ふのは、何時からの事で御座いますか。

【釋義】 偽も似つきてぞ爲る 偽も似よつた事であるもの意。虚言も本當らしい事を云ふものであるの心。ニツキテは、似よつての意。何時よりか カは、疑問の辭で、戀の爲に、何時から人が死ぬやうになつたかと、詰問する意味に用ゐてゐる。見ぬ人戀ふに 見ない人を戀ふ爲に、まだ會つた事もない人を戀ふる爲の意である。人の死せし 人の死んだ事の意であるが、三句の疑問の力を受けて、人が死んだ事であるかの意になる。これは先方から、まだ見ぬあなたを戀ふる爲に、ほとんど死んでしまふと云ふやうな歌をよこしたものと見える。それに反抗して、まだ見ない人を戀ふる爲に、人が死んだ例は無いといふ意味を、強く何時からなつたかと問ふ形を以つて表はしてゐる。

【参考】 類句

偽も似つきてぞする、うつしくもまこと吾妹子吾に戀ひめや(卷四、七七一)

面忘れ だにも得爲やと 手握りて 打てども懲りず 戀といふ奴

四二五七

戀云は嘉
屏本等に
よる。

【原文】 面忘 太爾毛得爲也登 手握而 雖打不寒 戀云奴

【口譯】 せめて顔を忘れるだけでも出来るかと、打つけれども、戀と云ふ奴隷は、懲りない事である。

【釋義】 面忘れだにも得爲やと 顔を忘れるだけでもなし得るかとの意。面忘れだにもと、續く語法であるが、二句に跨つてゐるのは、やゝ新しい形である。手握りて 手を握つて、拳骨をこしらへての意。打てども懲りず 打ち擲くけれども懲りないで、やはり戀をしてゐるの意。本文に、寒の字を書いて、コリと讀ませたのは、寒い時は水が凍るので、その意味に、コリの音を借り用ゐたのである。戀といふ奴 戀を擬人法にして、奴に例へたのである。自分の戀は、打擲してもとまる事を知らないの意で、打つと云ふも譬喩で、どのやうにしてもの意に、用ゐたのである。奴は、奴婢階級の者を云ふ。この時代に、普通の人々よりは更に一段下の階級の人で、賣買の目的物ともなり、すべて主人の意のまゝに動かし得た人を云ふ。

めづらしき 君を見むとぞ 左手の 弓執る方の 眉根かきつれ

【原文】 希將見 君乎見常衣 左手之 執弓方之 眉根搔禮

【口譯】 珍しい方を見ようとして、左手の、弓を執る方の眉を、掻きました。

【釋義】 弓執る方の 左の手に弓を執るから、左の方の意に用ゐてゐる。眉根かきつれ これは、眉が痒いのは人に會ふ前兆であると云ふ諺に、基いてゐる。それで、眉を掻きましたから、珍しいあなたに會ふのでせうの心である。

五二五七

八二五七

朝宿髪 吾は梳らじ 愛しき 君が手枕 觸りてしものを

【原文】 朝宿髪 吾者不梳 愛 君之手枕 觸義之鬼尾

【口譯】 朝の寐起きの髪を、私は櫛梳りませぬ。愛する君の手枕が觸れたのでありますから。

【釋義】 朝宿髪 朝の寐起きの髪を云ふ。寐た爲に亂れた髪である。

一七二五九

人言の 繁き間守ると 逢はずあらば 終に奴等 而忘れなむ

【原文】 人事 茂間守跡 不相在 終八子等 而忘南

【口譯】 人の口のうるさいのを、隙を窺ふとして會はないで居たならば、終には、彼奴は顔を忘れてしまふであらう。

【釋義】 人言の繁き間守ると 人の言葉の繁くうるさくある、その隙を見守るとして。終に奴等 終にはあの奴

達はの意。自分の想ふ人を、奴と云ふのは、愛する餘りの戲稱である。あの人はの意に用ゐてゐる。幾らか親みの餘りに、罵り云ふ心である。此の句、もとは、ツヒニヤコラガと、讀んでゐたが、それでは、やがては自分か、かの兒の顔を、見忘れるであらうと云ふ意になつて、戀の心が弱められる。依つて讀み改めたのである。面忘れなむ 顔を忘れる事になるであらうと、將來を豫想した語法。

九二五九

驗無き 戀をもするか 夕されば 人の手枕きて 寐なむ兒ゆゑに

【原文】 驗無 戀毛爲鹿 暮去者 人之手枕而 將寐兒故

【口譯】 かひの無い戀をする事がありますよ。夕方になれば、他人の手を枕として寐るでせう兒故に。
【釋義】 戀をもするか 戀をもする事かなと、歎息してゐる。人の手枕きて マキテは、枕としての意。この句の人は、戀の競争者を指して居る。他人の許に行つてしまふ人を戀してゐる。

四二八七

慥なる 使を無みと 情をぞ 使に遣りし 夢に見えさや

【原文】 慥 使乎無跡 情乎曾 使爾遣之 夢所見哉

【口譯】 慥な使がございませんでしたので、私の情を使にやりました。夢に見えましたか。

【釋義】 使を無みと 使が無さにと。

五二八七

天地に 少し至らぬ 丈夫と 思ひし吾や 雄心もなき

【原文】 天地爾 小不至 丈夫跡 思之吾耶 雄心毛無寸

【口譯】 天地に少し足りない男子と思つてゐた私が、確りした心も無いのであるか。

【釋義】 天地に少し至らぬ 天地には少し及ばない意で、男子の自信を表した句である。天地には少し及ばないが、非常に大きな確りした男子の意である。思ひし吾や 上のやうに前は思つてゐた自分であるが、今や雄心も無き事かと、自嘲した語氣である。やは、疑問の辭で、自分を疑つてゐる。雄心もなき ヲゴヨロは、男性の心で、強い勇氣ある心を云ふ。上の疑問のヤを受けて、その男子としての心も無い事かと、みづから疑つて居る語法である。

【餘論】 この時代の男子は、みづから丈夫を以つて任じてゐたのであるが、殊にこの歌で、天地には少し及ばない丈夫と云つたのは、非常に強い言葉で、男子の自信の程が、よく窺はれる。その丈夫でも、戀の爲には雄心もなきまでになると云ふ點に、深き戀をする事よの意味が、よく表れてゐる。

七二八八

立ちて居て たどきも知らず 吾が意 天つ空なり 土は踐めども

【原文】 立居 田時毛不知 吾意 天津空有 土者踐鞞

【口譯】 立つても居ても、手のつけ所も知らずに、私の心は空にゐるやうであります。土は踐んで居りますが。

【釋義】 たどきも知らず タドキは、手著きで、手の着け所、どうしてよいかわからない意である。天つ空なり 心が空を飛んでゐるやうに、落ちつく所が無い意である。譬喩の句。土は踐めども 足は地上に著いてゐるけれどもの意で、上の心空なりを受けて對偶に土と云ふ語を持ち來つたのである。

【参考】 類句

たもとほり 往箕の里に妹を置きて心空なり土は踏めども(卷十一、二五四一)
吾妹子が夜戸出の光儀見てしより心空なり土は踏めども(卷十二、二九五〇)

四二八九

聞きしより 物を念へば 我が胸は 破れて摧けて 利心もなし

【原文】 從聞 物乎念者 我胸者 破而摧而 鋒心無

【口譯】 聞きましてから、物念ひをしますから、私の胸は破れて摧けて、確りした心もございません。

【釋義】 聞きしより 何か人の身の上に就いて、噂でも聞いたのであらう。當事者同志では、あの事とわかつてゐたのであらう。破れて摧けて 心の破れたのを強く表す爲に、破れて摧けてと、ほゞ同じ意味の語を用ゐてゐる。利心もなし トゴコロは、鋭い確りした心。それがなくなるので、心の萎え／＼となつたのを、表してゐる。

三二九〇

いとときて 薄き眉根を いたづらに 搔かしめにつつ 會はぬ人かも

【原文】 五十殿寸太 薄寸眉根乎 徒 令搔管 不相人可母

【口譯】 非常に薄い眉根を、無駄に搔かせながら、會はない人でございますね。

【釋義】 いとときて 原文、五十殿寸太とある。このまゝでは、イトノキテと讀まれないので、太は、天の誤りかと、云はれてゐる。イトノキテの句は、山上憶良の貧窮問答歌に、伊等乃伎提短物乎(卷五、八九二) 又同人の老身重病云々の歌に、伊等能伎提痛伎瘡爾波(卷五、八九七)の例がある。語義は未詳であるが、非常に、格別に等の意味のやうに思はれる。薄き眉根を 作者自身の眉を、薄いと云つてゐる。いたづらに搔かしめにつつ 前に眉の痒いのは、人に會ふ前兆であると云ふ事を記したが、ここでは、無駄に、眉を搔かせて、而も人に會はないと云ふ事を、歌にしてゐる。搔かしめにつつ 先方の人が眉を搔かせると云ふやうに述べてゐる。

六二九〇

他國に 結婚に行きて 大刀が緒も いまだ解かねば さ夜ぞ明けにける

【原文】 他國爾 結婚爾行而 大刀之緒毛 未解者 左夜曾明家流

【口譯】 他の國に、結婚に行つて、大刀の緒もまだ解かないのに夜が明けてしまった。

【釋義】 結婚に行きて ヨバヒは、もと男子が女の家の外に立つて、これを喚ぶよりして起つた語。婚姻の意に用ゐられる。大刀が緒も 腰に帯びた大刀の緒で、解いて大刀を置くのである。いまだ解かねば 此のネバは、ヌニと云ふ意の語法である。まだ解かないのにと云ふ意である。

【餘論】 この歌は、極めて古風な歌で、やはり民間に、歌ひ物として傳はつてゐたのであらう。古事記の上卷にある八千矛の神の歌に、同様の内容を持つたのがある。その八千矛の神の歌は、長歌であるが、それを短く讀み改めたものであるとも云はれてゐる。しかしかやうな内容の歌は、上代の風俗から云つて、幾つにも歌ひ傳へられる事は、有り得るのであるから、必かの歌が、短歌に改められたと云ふには及ばぬであらう。今参考として、八千矛の神の歌を録して置く。

八千矛の神の命は、八島國妻求ぎかねて、遠々し高志の國に、賢し女を有りて聞かして、麗し女を有り聞かして、さ婚ひに在り立たし、婚ひに在り通はせ、大刀が緒もいまだ解かずて、襲をもいまだ解かね、處女の寐すや板戸を、押そぶらひ吾が立たせれば、引こづらひ吾が立たせれば、青山に鴛は鳴きぬ、眞野つ鳥雉は響む、庭つ鳥鷄は鳴く、うれたくも鳴くなる鳥か、この鳥も打ちやめこせね。いしたふや天馳使、事の語り言もこをば。

二九五

海石榴市の 八十の衢に 立ち馴らし 結びし紐を 解かまく惜しも

【原文】 海石榴市之 八十衢爾 立平之 結紐乎 解卷惜毛

【口譯】 海石榴市の道の寄り會つて來る處に立ち馴らして結びました衣の緒を、解かうとするのは惜しうございます。

【釋義】 海石榴市の 大和の國の初瀬の近くの地名。此の地では、古くから歌垣の催された事が傳へられてゐる。日本書紀の武烈天皇の卷に、皇子と平群鮎とが、この地の歌垣で婦人を争つた事が傳へられてゐる。この歌でも、この土地の歌垣の場に立ち馴らした事を、歌つてゐるのである。八十の衢に ヤソは、數の多い事。チマタは、道の股で、道の兩方に分れる地形を云ふ。ヤソノチマタは、四方への分れ路を云ふ。海石榴市に、諸方から道が來り會してゐるのである。そこで歌垣が行はれる。歌垣は、男女多數が集つて、歌を掛け合ふ行樂で、性的關係の伴はれるものと考へられる。立ち馴らし その歌垣の場に立ち馴らしての意。タチは、馴らしの意を強めるが主である。結びし紐を 解いて又結んだ紐である。解かまく惜しも マクは、ムコトの意。解かむ事が惜しくあるよの意で、つまり或る人からの求婚を拒絶した意味になる。

三 寄物 陳思

正述心緒に對する語で、何か物に寄せて思を述べる歌を云ふ。集中明にこの語の見えてゐるのは、卷の十一、十二の兩卷であるが、事實上の寄物の歌は、他の卷にも見えてゐる。

三二四三

水の上に 數書く如き 吾が命を 妹に逢はむと うけひつるかも (人麻呂集)

【原文】 水上 如數書 吾命 妹相 受日鶴鴨

【口譯】 水の上に數を書くやうな私の命を、吾が妻に逢はうと、神に誓つた事であります。

【釋義】 水の上に數書く如き 佛教語から出た句で、涅槃經に「是身無常、念念不住、猶如電光暴水幻炎、亦刻するを云ふので、數字を書く意味ではない。うけひつるかも ウケヒは、心に誓つてする事。人の命は、はかなきものであるのを、それを吾が妻に逢はうと、誓をたてたと歌つてゐる。

七二四八

奈良山の 小松が末の うれむぞは 我が思ふ妹に 逢はず止みなむ (人麻呂集)

【原文】 平山 子松末 有廉叙波 我思妹 不相止者

【口譯】 奈良山の小松の末の、うれむぞ、私の思ふ妹に逢はないで止みませうや。

【釋義】 奈良山の小松が末の ウレは、植物の成長してゐる枝先きを云ふ。以上の二句は序で、次のウレムゾハの句を起す爲に、ウレと同音を重ねて來たまでである。うれむぞは どうしてか、如何ぞ等の意。うれむぞは、次の用例がある。「海若の奥に持ちゆきて放つともうれむぞこれが生き返りなむ」(卷三、三二七)。逢はず止みなむ 上のうれむぞはを受けて、逢はずに止みませうか、逢はないでは止められないの意になる。

一二四九

妹に戀ひ 寝ぬぬ朝明に 鴛鴦の ここゆわたるは 妹が使か (人麻呂集)

【原文】 妹に戀ひ 寝ぬぬ朝明に 鴛鴦の ここゆわたるは 妹が使か

【原文】 妹戀 不寐朝明 男爲鳥 從是此度 妹使

【口譯】 妹に戀ひて、寐ない夜の明け方に、鴛鴦が、ここを通つて飛び渡るのは、妹の使でせうか。

【釋義】 寝ぬぬ朝明に 眠られない、その朝明に。ここゆわたるは ユは、其處を通つて。作者の見てゐる前を飛び渡るのを、ココユワタルと歌つてゐる。

六二四九

肥人の 額髪結へる 染木綿の 染みにし心 我忘れめや (人麻呂集)

【原文】 肥人 額髮結在 染木綿 染心 我忘哉 忘日八方

【口譯】 肥人の前髪を結んでゐる、色に染めた木綿のやうに、深く染みついた心を、わたくしは忘れませうや。

【釋義】 肥人の 九州の肥の國を根據とした民族の名。他にウマヒトノ、コマヒトノ、クマヒトノ等に讀む説があるが、今は岩橋小彌太氏の訓による。ただし早く平田篤胤は、ヒノヒトノと讀む説を出してゐる。額髪結へる 染木綿の 肥人の變つた風俗として、その前額を、色に染めた木綿で結んでゐることを寫してゐる。ユフは、楮の皮の纖維を晒したもの。以上三句は、同音を利して次のシミニシと云はむが爲に置いた序である。染みにし心 深く染みついた戀の心の意である。

七二四九

隼人の 名に負ふ夜聲 いちじろく 吾が名は告りつ 妻と恃ませ (人麻呂集)

【原文】 早人 名負夜音 灼然 吾名謂 壻恃

【口譯】 隼人の名に背かない夜聲のやうに、はつきりとわたくしの名は申しました。妻として、恃みに思つて下

さいませ。

【釋義】 隼人の 九州の南方、大隅薩摩の地を根據とする民族の名。名に負ふ夜聲 名に負ふは名前として負ひ持つてゐる、名に背かない、有名な。夜聲は、夜中に發する音聲。隼人は、古代から宮中に仕へて警衛の任に服して居た。夜番をする時に、高聲で名告るので、隼人の名に背かない夜聲といふのである。以上二句は序で、次のいちじろく名を告るを起してゐる。いちじろく 著明に、明白に。吾が名は告りつ 名は申しました。女子が名をいふことは、配偶者として身を許す意味である。妻と恃ませ 既に名を云つたから當然妻となるものとして安心して下さいの意。妻として恃みをかけておいて下さい。

【餘論】 前の肥人の歌と、この歌とは、當時の大和民族とは變つた民族として認められてゐた人々の風俗を歌つて、序としてゐる。相聞の歌に序歌が多いのは、もと／＼、相聞の歌は、作者の誠心を先方に通ずるにあるので、その誠心は普通に單純なる内容を持つものである。しかも單純なる内容では相手方を刺戟する力が弱いで、眼前の事物、又は何か緣故のあるものを提示して序とし、先方の注意を惹かうとするのである。まづ注意を惹いておいて、然る後に誠心を味はせようとするのだから、序はしば／＼奇抜なものを用ゐる。こゝに異風俗の民族を用ゐ來つたのも、またその目的からである。歌の内容からいふと、前の肥人の歌は男の歌で、後の隼人の歌は、それに答へた女の歌であるらしい。肥人を序とした歌に對して、同じく異風の隼人を序として、これに答へたものであらう。

六二五〇

言靈の 八十の衢に 夕占問ふ 占正に告る 妹はあひ依らむ (人麻呂集)

【原文】 事靈 八十衢 夕占問 占正謂 妹相依

【口譯】 詞の精靈の活躍する、この諸方への別れの道に立つて、夕占を聞きました。その占は、正しく、妹は寄り來るであらうと云ひます。

【釋義】 言靈の 言語に靈魂があつて、靈妙な活動を爲すといふ信仰を、コトダマといふ。道の合ふ處などでは、諸方から人々が入り來つて多く言語を出すので、言靈の八十の衢といふ。八十の衢に 既出。諸方への別れ途。夕占問ふ ユツケは、夕方、路傍に立つて、道行く人の言を聞いて、占ひをするをいふ。言語によつて吉凶を卜するは、すなはち言靈の活躍の一である。句切。占正に告る 夕占は正しく示したの意。ノルは、卜占の面に現はれるをいふ。句切。この句は、古くは、ウラマサニノレ、ウラマサニイへ等、命令法に讀んでゐたものである。それならば、五句を「妹はあひよらむと」の意に解すべきである。妹はあひ寄らむ わが思ふ女は、自分に許すであらうの意で夕占は正しく吉兆を示したのである。

摺衣 著たりと夢見つ うつつには 誰しの人の 言か繁けむ

【原文】 摺衣 著有跡夢見津 寤者 執人之 言可將繁

【口譯】 摺衣を著てゐると夢に見ました。現實の世界では、どの方から言ひ寄る詞が、多いでございませうか。

【釋義】 摺衣 染料にて摺りつけて、文様を出した衣服。うつつには ウツツは、現實の世界。夢に對して、目の覺めてゐる世をいふ。誰しの人の シは接尾語。古の狭織の帯を結び垂れ誰しの人も君には益さじ(卷十一、二六二八)。言か繁けむ 言ひ寄る言の繁くあらむかの意。人の噂についてでは無い。

二六二 寤は類聚 古集による

【餘論】この歌は、夢を信ずる婦人の生活がよく表れてゐる。摺衣を著た夢を見て、これを人に言ひ寄られる前兆と見たのである。

劍刀 諸刃の上に 行き觸りて 所殺かも死なむ 戀ひつつあらずは

【原文】 劍刀 諸刃之於荷 去觸而 所殺鴨將死 戀管不有者

【口譯】 劍刀の兩刃の上に進んで觸れて、殺されて死にませうか。戀をして居ないで。

【釋義】 劍刀 鋭い刀。諸刃の上に 諸刃は、刀身の兩面に刃あるをいふ。行き觸りて こちらから進んで觸れて。所殺かも死なむ 死にか死なうの意。シナムを爲なむの意であるとなす説もあるが、さうではないであらう。同卷、柿本人麻呂の集から出た歌に、劍刀諸刃足踏死公依(二四九八)と書いてある歌がある。これも同じく、「劍刀諸刃の利きに足踏みて死にかも死なむ、君に依りては」と讀んで、今の歌と互に参照すべきものであると思はれる。戀ひつつあらずは 戀をしてあらず、進んでの意。ハは軽く助辭として添へたもの。

梓弓 引き見弛へ見 來ずは來ず 來ば來其を何ぞ 來ずは來ば其を

【原文】 梓弓 引見弛見 不來者不來 來者來其乎奈何 不來者來者其乎

【口譯】 梓弓を引いたり弛めたりして、來ないなら來ないでよい。來るならばおいでなさい。それが何でせう。來ないにしろ來るにしろ、それが。

【釋義】 引き見弛へ見 引いて見たり弛めて見たりして。以上二句は序で、次の來る來ないの枕にしてゐる。來

六二六三
戀管は嘉
曆本等に
よる。

二六四
弛は代匠
記による
來者來は
古葉略類
る。鈔によ

ずは來ず 來ないなら來ないで、それだけである。來ば來其を何ぞ 原文もと來者其乎奈何とあつて、コバゾツヲナゾとやうに讀まれる文であつた。今古葉略類聚鈔によつて、改める。この校異は孤立性のもので危険であるが、意味はよく通ずる。來るならいらつしやい。それを何として、梓弓を引いたり弛べたりするやうに、來るとも來ないともはつきりしないのは、何としたことですかの意。來ずば來ば其を 上の意を更に短句で繰り返したものである。

【餘論】この歌は、同語を重ねて、相手をして或る惑亂に陥らせ、これによつて注意を惹かしめる手段に出たものである。一種の頭韻で、遊戯氣分の多いものであるが、相聞の歌としては、かういふ形式のものも許容する必要があらう。

燈の かけに耀ふ 現身の 妹が咲狀し おもかけに見ゆ

【原文】 燈之 陰爾蚊蛾欲布 虛蟬之 妹蛾咲狀思 面影爾所見

【口譯】 燈火の光に耀いてゐる生ける身の妹の笑顔が、面影に見える。

【釋義】 かけに耀ふ カゲは光である。カガヨフは、照り輝く。「見渡せば近きものから石がくりかがよふ珠を取らずは止まじ」(卷六、九五二)。現身の この世に實體のある身の。妹が咲狀し エマヒは、笑める姿。シは助辭。面影に見ゆ オモカゲは、實體無くして見ゆる幻影。妹と離れ居て、その燈火のもとに笑める姿が幻に見えるのである。「みちのくの眞野の草原遠けども面影にして見ゆとふものを」(卷三、三九六)

二六四

一〇二六五

難波人 葦火焚く屋の 煤してあれど 己が妻こそ 常めづらしき

【原文】 難波人 葦火燎屋之 酢四手雖有 己妻許増 常日頗次吉

【口譯】 難波人が、葦火を焚く家のやうに、煤けて居るけれど、自分の妻こそいつもではやすべきものではある。

【釋義】 難波人 難波に住んでゐる人。葦火焚く屋の 葦を焚いて火にする家。葦火は煤の多いもので、家が眞黒に煤けてゐるので、以上の二句を以て、次の煤してあれどの序となしてゐる。煤してあれど スシは、煤を動詞にしたもの、煤けて黒くなつてゐるけれどもの意。常めづらしき 永久に賞美すべくある意。コソを受けて、形容詞のキ活で結ぶのは、古格である。

三〇二六五

馬の音の とどともすれば 松蔭に 出でてぞ見つる 蓋し君かと

【原文】 馬音之 跡杼登毛爲者 松陰爾 出會見鶴 若君香跡

【口譯】 馬の足音が、とどともすれば、松の木蔭に出て見ました。もしあなたでありませうかと。

【釋義】 馬の音の 馬の足音の。足の音せず（安能於登世受）行かむ駒もが（卷十四、三三八七）ともあつて、音はオトと讀むがよい。ただし「風の音の」（可是乃等能、卷十四、三四五三）の例もあるから、トとのみ讀んでも誤ではない。とどともすれば トドは、馬蹄の擬音。蓋し君かと ケダシは、推量するにの意の副詞。

一〇二六六

靈ちはふ 神も吾をば 打棄てこそ しゑや命の 惜しけくも無し

【原文】 靈治波布 神毛吾者 打棄乞 四惠也壽之 悵無

【口譯】 わたくしの守り神も、まうわたくしをば棄てて下さい。ええまう命も惜しくはございませぬ。

【釋義】 靈ちはふ 神の枕詞。チハヤブルが神の威力ある方面を表してゐるに對して、これは、人の靈魂を護持する方面を表してゐる。しかしこの歌一つだけで、他に用例は無い。チハフは、神力を垂れて助け守る意。「女神もちはひ給ひて」（卷九、一七五三）の用例がある。打棄てこそ 打ち棄てよと希望する語法。ウツテは、ウツテで、上のウチは強める爲の接頭動詞。下のウテは下二段の動詞、棄つての連用形。しゑや命の シエヤは、間投的の感動詞。興奮を表す語氣である。「あらかじめ人言しげし、かくしあらばしゑや我が夫子奥も如何にあらも」（卷四、六五九）。「秋萩に戀盡さじと思へどもしゑや惜し、また逢はめやも」（卷十、二二〇）。

【餘論】 神に對して絶望の意を表してゐるのは、この時代の相聞の歌として珍しい。表現法も非常に力強く、よく内容と一致してゐる。

七〇二六九

妹が名も 吾が名も立たば 惜みこそ 富士の高嶺の 燃えつつ渡れ

【原文】 妹之名毛 吾名毛立者 惜社 布仕能高嶺之 燒乍渡

【口譯】 妹の名もわたくしの名も立つたら、惜しいので、あの富士の高嶺のやうに、心が燃えながらも、日を過してをります。

【釋義】 富士の高嶺の 譬喩に用ゐる來つた句である。當時富士山は噴火して居つたので、燃えることの例に用ゐた。燃えつつわたれ 戀の思の高調するのを燃えるといふ。ワタルは、日を送ること。上のコソを受けてワタ

レと結んでゐる。

【参考】 別傳

君が名も妾が名も立たば惜みこそ不盡の高嶺の燃えつつも居れ(卷十一、二六九七或歌)

あしひきの 山澤廻具を 採みに行かむ 日だにも逢はせ 母は責むとも

【原文】 足檜之 山澤廻具乎 採將去 日谷毛相爲 母者責十方

【口譯】 山の澤の廻具を採みにおいでになる日だけでも、お逢ひ下さいませ。お母さんはお叱りになりますとも。

【釋義】 あしひきの 枕詞。山澤廻具を 山の澤に生えてゐる廻具。エグは草の名。實物未詳。烏芋の一名なり

ともいふ。しかし葉を食用とすると思はれるから、烏芋としてはどうであらうか。芹の一名なりともいふ。君

が爲山田の澤に恵具採むと雪消の水に裳の裾濡れぬ(卷十、一八三九)。採みに行かむ 連體法。日だにも逢は

せ 原文もと日谷毛相將とあつて、ヒダニモアハムと読み、廻具を採みに行くは女子のわざであるから、せめ

てその日だけでも逢ひませうの意に、女子の歌として解してゐた。今嘉曆傳承本等の古本によるに、相將は相

爲になつてゐる。よつてヒダニモアハセと読み、その日だけでもお逢ひなさいと解しておく。さうして男子の

作とも女子の作とも、いづれにしても意は通するが、しばらく男子の作としておく。アハセは、逢ふの敬語法

アハスの命令法。

【餘論】 この歌は、廻具を詠み入れてはゐるが、廻具に托して本心を叙したものではないから、内容から云つて

は、寄物陳思の歌では無いであらう。今は本集の部類に従つて、こゝに收めておく。

二七六

蘆垣の 中の似兒草 にこやかに 我と咲まして 人に知らゆな

【原文】 蘆垣之 中之似兒草 爾故余漢 我共咲爲而 人爾所知名

【口譯】 蘆垣の中の似兒草のやうに、にこやかにひとり笑ひをして人に知られなさいますな。

【釋義】 蘆垣 葦を編んだ垣。似兒草 草の名、實物未詳。ハコネサウの古名等いふが、臆測に過ぎない。或は、

荒草に對する語で、葉や莖の柔軟なる草をいふか。以上二句は、ニコの音を重ねて、次のニコヨカニを起す序

を爲してゐる。「秋風になびく川邊のにこ草のにこやかにしも思ほゆるかも」(卷二十、四三〇九)。にこやかに

にこやかに、笑める形容である。我と咲まして ワレトは、自分から、ひとりで。エマシテは、お笑ひになつ

て。人に知らゆな 人に知らるなに同じ。我々の中を人に知られるなの意。

【参考】 類句

青山を横ぎる雲のいちじろく吾と咲まして人に知らゆな(卷四、六八八)

二七九

住吉の 濱に寄るとふ うつせ貝 實なきこと以ち 我戀ひめやも

【原文】 住吉之 濱爾縁云 打背貝 實無言以 余將戀八方

【口譯】 住吉の濱に寄るといふうつせ貝のやうに、實の無い詞を以つて、戀を致しませうや。

【釋義】 うつせ貝 代匠記に、空虚になつた貝をいふとあり、萬葉考、古義等に、空石花貝で、石花(かめので)

の空になつたのをいひ、後一般の空の貝を總稱することとなつたと云つてゐる。石花は蔓脚類で、その殻が特に、ウツセガヒの語を爲に至る程、古人の注意を惹いたとは思はれない。思ふにうつし貝で、現し身をウツセミといふと、同じ語格であらう。ウツシは、實體あるものをいふ形容詞だから、ウツセガヒは、生きてゐる實のある貝の義となる。さて以上の三句で次の實の一語を起す序に用ゐたものと思はれる。ただしウツセミを、露命といふやうな物はかなげな言語感情に移して用ゐられると共に、ウツセガヒもやはりはかなき實體なき心に變つて、後には實なし貝の意に轉用せられたのであらう。實なきこともち 眞實の無い事を以つて、原文コトに言を宛ててゐるのは、假字である。

二七八〇

念へども 念ひもかねつ あしひきの 山鳥の尾の 永きこの夜を

【原文】 念友 念毛金津 足檜之 山鳥尾之 永此夜乎

【口譯】 思へども思ひあきらめかねました。この山鳥の尾のやうな長い秋の夜を。

【釋義】 念へども念ひもかねつ 正しい思案を爲しようとしても爲しかねたの意。戀に悶ゆる心を、思ひ鎮めかねたのである。あしひきの山鳥の尾の 以上は永きといはむが爲の序で、アシヒキノは枕詞。

二七八〇

○或る本の歌に曰はく

あしひきの 山鳥の尾の しだり尾の 長き永夜を ひとりかも寝む

【原文】 或本歌曰 足日本乃 山鳥之尾乃 四垂尾乃 長永夜乎 一鴨將宿

【題意】 この歌は、前の歌の次に或本歌曰として載つてゐるので、萬葉集の編者は、類歌と見たのであらうが、ただ序が同物を用ゐてゐるだけで、内容の全く別な獨立した歌なので、こゝに別掲することゝした。なほこの歌の作者も知れない。後世柿本人麻呂の作と傳ふるものあるは、根據なきことである。

【口譯】 山鳥の垂れてゐる尾のやうに、長いこの永夜を、わたくしは一人で寝ることごさいませうか。

【釋義】 あしひきの山鳥の尾のしだり尾の 以上は長きといはむが爲の序である。しだり尾は、垂れてゐる尾。

長き永夜を 原文、長永夜乎とあるので、またナガナガシヨとも讀んでゐる。長々し夜は、「遠々し越の國」(古事記上卷)の例もあつて誤ではない。本居宣長以後ナガキナガヨと讀み改めたので、今もこれに従ふ。

二九九

たらちねの 母が養ふ蠶の 繭隠り いぶせくもあるか 妹に逢はず

【原文】 垂乳根之 母我養蠶乃 眉隠 馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿 異母二不相而

【口譯】 お母さんの飼つてゐる蠶が、繭に籠るやうに、氣の晴れないことありますよ。妹に會はないで。

【釋義】 たらちねの 枕詞。母が養ふ蠶の カフコは、カヒコ(蠶)に同じ。蠶が繭を作つて、その中に隠れること。以上三句は、いぶせくと云はむ爲の序である。いぶせくもあるか 鬱陶しく氣の晴れぬことであるよの意。アルカは、あるかなに同じで、詠嘆の語氣である。

【餘論】 この歌は、用字法が變つてゐる。馬聲蜂音石花蜘蛛と書いて、イブセクモを表してゐるのは、いはゆる戲書である。作者自身かやうに書いたか、又は編者が書き改めたかはわからないが、或は、相聞の歌として女子のもとに書きやる時、先方の興味を喚び起す爲に、かやうな戲書が用ゐられたものでもあらう。この歌の場

合としては必しも固執は爲さないが、戲書といふ用字法は、さういふ分子を多量に含んでゐるものと考へられる。妹に異母の字を宛てたのも、何物かを暗示してゐるであらう。例へば大伴宿奈麻呂や大伴旅人が、大伴坂上郎女に對する場合などを、語つてゐるのであらうか。妹の語によつては、男女間の情事と速断すべきで無いことは、勿論である。

ひさかたの 天つみ空に 照る月の 失せなむ日こそ 吾が戀ひ止まめ

四三〇〇
照月之は元曆校本による。

【原文】 久堅之 天水虚爾 照月之 將失日社 吾戀止日

【口譯】 あの大空に照る月の、失せて無くなる日にこそ、わたくしの戀は止むでございませう。

【釋義】 ひさかたの 枕詞。天つみ空に 天空に。ミソラは、廣い空。照る月の 原文もと照日之とあつた。この前後、皆月に寄する歌であり、古本に月とあるのでこれに従ふ。代匠記もはやく月の誤であらうと云つてゐる。日にしても通ずるし、歌柄は大きく強くなるが、月の方が、月光のもとに戀をしつつこの歌を詠んだ情景も思はれて、詩趣に富んでゐる。

九三〇〇

橡の 衣解き洗ひ 眞土山 もとつ人には なほ如かずけり

【原文】 橡之 衣解洗 又打山 古人爾者 猶不如家利

【口譯】 橡で染めた衣を解き洗つて又打つといふ眞土山、昔馴染の人にはやはり及ばないこととございます。

【釋義】 橡の衣解き洗ひ ツルバミは、櫛の實、すなはちドングリ。その實の椽を煮た汁で染めた衣が橡の衣で、

鈍色をなし、下賤の者の著る衣である。その衣服の著穢したのを解いて洗ふ意である。眞土山 大和から紀伊へ行く途中にある山の名であるが、古衣を解き洗つて又打つて柔くするといふ、マタウチに山の名のマツチを懸詞にしてゐる。橡の衣解き洗ひの二句は、眞土山の序となり、更に以上の三句を以つて、山の麓といふ義から次のもつ人の語を起す序となつてゐる。もとつ人には もとつ人は舊人で、前からの親しい人。馴れて久しくなつた夫、又は妻をさしてゐる。恐らくは男子の歌で、年を経た妻をさしてゐるであらう。なほ如かずけり 新しい人はなほ舊き人には及ばないの意である。

【餘論】 衣服を洗濯して縫ひ返すことは、婦人の務であつたので、上三句は、もとつ人なる舊妻の爲事を叙して下句の背景となしてゐるやうである。代匠記に、古樂府の詩に類想のあるを擧げてゐる。上山採菲蕪、下山逢故夫、長跪問故夫、新人復何如、新人雖云好、未若故人妹、共色似相類、手爪不相如、新人從門入、故人從閣去、新人工織練、故人工織素、織練日一疋、織素五丈餘、持練將比素、新人不如故。」

妹が門 去き過ぎかねて 草結ぶ 風吹き解くな 又顧みむ

【原文】 妹門 去過不得而 草結 風吹解勿 又將顧

【口譯】 妹が門を、行き過ぎかねて、草を結びます。風よ吹き解いて下さるな。又立ち返り見ませう。

【釋義】 去き過ぎかねて 行き過ぎ得ずして。素通りにしかねて。草結ぶ 草の葉を結ぶのは、再其處に立ち歸らうとするまじなひである。例歌等は前に出てゐる。句切。風吹き解くな 風よ、わが結んだ草の葉を吹き解く勿れの意。結んだのが解けると、まじなひの破れる心である。

六三〇五

【餘論】 この歌は寄物陳思の類に入れてあるが、内容上、物に寄せた歌とは云ひ難い。

赤駒の い行き憚る 眞田葛原 何の傳言 直にし吉けむ

【原文】 赤駒之 射去羽計 眞田葛原 何傳言 直將吉

【口譯】 赤駒の行くに憚むところの眞田葛原よ。そのやうに行き惱んで何を傳言などをしてゐるのですか。直接に會ふやうになさつたらよいでせうのに。

【釋義】 赤駒の 馬は赤いのが多いので、ただ馬といふに同じである。い行き憚る イは接頭語。田葛の蔓で、馬の行くに難澁する意である。眞田葛原 マは接頭語。以上三句は、何の傳言の序である。何の傳言 馬が葛原を行き惱んで躊躇してゐるやうに、人傳に言を寄せてゐるが、それは何だつてそんなことをしてゐるの意。傳言に満足しない意を表してゐる。直にし吉けむ シは助辭。直接にこそ宜からめの意。

【餘論】 この歌は、日本書紀に、天智天皇の崩ぜられた時の童謡として、政治上の諷諭の心あるものとして載せてある。しかし古史に見える童謡といふものは、もとく男女間の情事を歌つたのがもとで、それを政治上に意味あるが如く、當時の御幣をかつぐ輩が解釋を附したものであらうと思はれる。

さ檜の隈 檜の隈川に 馬駐め 馬に水飲へ 吾外に見む

【原文】 左檜隈 檜隈河爾 駐馬 馬爾水令飲 吾外將見

【口譯】 さ檜の隈の檜の隈川に馬を駐めて、馬に水をお飲ませなさいませ。わたくしもよそながら見て居りませう。

う。

【釋義】 さ檜の隈 地名の檜の隈に接頭語サを添へたもの。さ檜の隈での檜の隈川の意に次の句に冠してゐる。

かういふ云ひ方は、み吉野の吉野の宮(卷三、三一五)の例がある。大和の國の地名。吾外に見む 馬に水を飲ましめるのを、自分は、よそながら見ようの意で、人目を憚る心である。

【餘論】 この歌は、古今集卷二十に、神あそびの歌として採録せられてゐる。それには、
ひるめのうた

さゝのくま檜の隈川に駒とめてしばし水かへかけをだに見む
となつてゐる。前に出した赤駒のい行き憚るの歌などと共に、これらの歌は、實際に歌はれてゐたものであることを語つてゐる。

四 譬 喩 歌

歌全體が、ある品物に就いて叙述して居り、作者の本心は、少しも歌の表面に表れず、内面にのみ潜んでゐる表現形式の歌を、譬喩歌といふ。歌全體が、譬喩で成つてゐるのである。男女間の情事は、露骨なることを忌むので、自然この形式を生じたものと思はれる。必しも相聞往來の本義に適ふもののみでは無いが、今便を以つて此處に若干を録しておく。

七二三一

○玉に寄す

海の底 しづく白玉 風吹きて 海は荒るとも 取らずは止まじ

【原文】 寄玉

海底 沈白玉 風吹而 海者雖荒 不取者不止

【口譯】 海の底に沈んでゐる白玉を、風が吹いて海が荒れても、取らないでは止みませうまい。

【釋義】 しづく白玉 シツクは、沈んでゐる意。白玉は、眞珠を云ふが、それでもなくとも、一般に白い美玉と解してもよい。この歌では、婦人を白玉に譬へて、如何なる困難を冒しても、必得ようとする決心を、歌つて居る。

八二八二

くれなゐの 濃染の衣を 下に著ば 人の見らくに にほひ出でむかも

【原文】 紅之 深染乃衣乎 下著者 人之見久爾 仁寶比將出鴨

【口譯】 くれなゐの濃色の衣服を下に着たならば、人が見るに現れ出るでありませうか。

【釋義】 紅の濃染の衣を クレナキは、紅草の根から取つた染料。コソメは、濃く染める事。戀の心を、紅の濃い衣に譬へてゐる。人の見らくに 人の見るにの意で、人目にはと云ふ程の事。にほひ出でむかも 色が映り出るであらうかの意。濃い紅の衣を下に着たならば、人目にはそれと知られるであらうかの意で、心に戀の思を持つと、それと人に見られるであらうかの意を喩へてゐる。

九二八二

衣しも 多くあらなむ 取り易へて 著なばや君が 面忘れたらむ

右の二首 衣に寄せて思を喩ふ

【原文】 衣霜 多在南 取易而 著者也君之 面忘而有

右二首 寄衣喩思

【口譯】 著物が多く欲しい事です。取り替へて来たならば、あなたの顔を忘れてもゐるでせうか。

【釋義】 多くあらなむ 希望の語法。句切。著なばや君が ヤは、疑問の辭。著たらばか、君の面を忘れてゐるだらうの意である。面忘れたらむ 君の顔が忘れられないが、若し著物を替へて著たならば、面忘れをしてゐられるだらうかの意に、上の疑のヤを受けてゐる。

【餘論】 この歌は、譬喩歌の中に入つてゐるが、他の譬喩歌と違つてゐる。衣に異性を喩へてゐると見れば見られぬ事もないが、恐らくはさうでなくして、たゞ著物を著替へたならば、思ふ人の顔も忘れられるだらうかと云ふだけの歌と思はれる。

六二八三

三島菅 いまだ苗なり 時待たば 著すやなりなむ 三島菅笠

【原文】 三島菅 未苗在 時待者 不著也將成 三島菅笠

【題意】 以下二首は、草に寄せて、思を喩へた四首のうちの二首である。表に菅のことばかり云つてゐて、本心

はその中に隠されてゐる。

【口譯】三島菅はまだ苗です。しかし時を待つてゐたら、菅笠として著ないでしまふかもしれません。

【釋義】三島菅 攝津の國三島の菅で、同地は菅に名ある所である。女子を菅に譬へてゐる。いまだ苗なりその女子がまだ若いといふことを譬へてゐる。時待たば 菅の生育するのを待たば。その女子の妙齡に達するのを待たばの意を譬へてゐる。著すやなりなむ 他人に取られてしまふだらうかの疑懼の念を、菅笠を著ないでしまふだらうの詞を以つて譬へてゐる。三島菅笠 その三島の菅を以つて製した笠といふ意で、やはりその女子を譬へてゐる。

【餘論】古人は、菅に就いて女子を連想すると見えて、しばし婦人を菅に譬へてゐる。古義にその例歌を擧げて、古事記の仁徳天皇の御製歌がもとを爲してゐるであらうと云つてゐるが、これは承けられない。

【参考】女子を菅に譬へた歌

眞珠つく越の菅原、吾刈らす人の刈らまく惜しき菅原(卷七、一三四一)

杜若佐紀沼の菅を笠に縫ひ著む日待つに年ぞ經にける(卷十一、二八一八)

押し照る難波菅笠置き古し後は誰が著む笠ならなくに(同、二八一九)

階立つ筑摩狭額田、息長の遠智の小菅、編まなくにい刈り持ち來、敷かなくにい刈り持ち來て、置きて吾を偲

ばす、息長の遠智の小菅(卷十三、三三三三)

八田の一本菅は、子持たす立ちか荒れなむ、あたら菅原、言をこそ菅原と云はめ、あたらすがし女(古事記下卷)

二八三

河上に 洗ふ若菜の 流れ來て 妹があたりの 瀬にこそ寄らめ

右四首(二首略)は草に寄せて思を喻ふ

【原文】河上爾 洗若菜之 流來而 妹之當乃 瀬社因目

右四首 寄草喻思

【口譯】川上で洗ふ若菜が流れて來て、わが妹の居るあたりの瀬に依るであらう。

【釋義】洗ふ若菜の 若菜に作者自身を寓意してゐる。妹があたりの瀬にこそ寄らめ 自分が妹の居る近くに行

かうと思ふ心を喻へてゐる。

五問 答

相聞の歌の本質が、元來贈答の歌であるから、いはゆる問答の意が十分入つて居る筈であり、また實際、問と答との歌として適當なもののあることも認められる。しかし本集には、別に特に贈答と題し、又問答歌の項を立てて主として一問一答の形の歌を載せてゐる。これによつて、特に問答といふ點に味のあるものを出しておく。

○妻に與ふる歌一首

雪こそは 春日消ゆらめ 心さへ 消え失せたれや 言も通はぬ (人麻呂集)

【原文】與妻歌一首

五問 答

二七八

雪已曾波 春日消良米 心佐閉 消失多列夜 言母不往來

【題意】 妻に與へて、久しく音信の絶えたのを詰つた歌。人麻呂集所出で、或は人麻呂の作でもあらうか。

【口譯】 雪こそは、春の日に消えるであらうが、心さへ消え失せたからか、音信も通はないのである。

【釋義】 消え失せたれや 消え失せたればにやの意。言も通はぬ そちから言葉も通つて來ないことである。上の句のヤを受けて、又と結んでゐる。

○妻の和ふる歌一首

松反り しひてあれやは 三栗の 中上り來ぬ 麻呂と云ふ奴 (人麻呂集)

【原文】 妻和歌一首

松反 四臂而有八羽 三栗 中上不來 麻呂等言八子

【題意】 前の歌に對する妻の答の歌である。

【口譯】 鷹の松反りのやうに、通じないことがありませうや。途中に上つて來ない、麻呂といふ奴さん。

【釋義】 松反り 鷹に關する語で、鷹の羽毛の抜け替るのをいふのでもあらうか。(六八六頁參照) この歌では、次の語の枕詞となつてゐる。しひてあれやは シヒは、目しひ、耳しひのシヒに同じで、感覺到支障ある意。

(橋本進吉氏談)。アレヤハは、反語で、無い意になる。支障は無い事であるの意。三栗の 中の枕詞。中上り來ぬ ナカは、半途、中途の意で、男が地方に赴いて、それきり中の上つて來ないといふのであらう。麻呂といふ奴 麻呂は男の名、人麻呂の略稱か。奴は、戲に男をさして呼んでゐる。考説欄參照。

【考説】 麻呂といふ奴

右の二首の歌の、初のは、よく意味が通ずるが、後の方は、解き難い歌として、昔から問題になつてゐる。但し、上半に就いては、卷第十七、大伴家持の、放逸せる鷹を思ひ、夢に見て感悦して作れる歌の反歌に、

松反りしひにてあれかもさ山田の爺がその日に求めあはずけむ(四〇一四)

といふ歌があるので、これと照し合せて、鷹に關していふ事であらうとは想像されてゐた。下句に就いて疑があつたのである。

まづ仙覺鈔には「マツカヘリシヒニテアレヤハトハ、人ノアルキタルヲ、マツニヲソククルヲ、シヒニテアレヤハトヨメリ。イソキカヘラントモセテ、心緩怠スルヲ、シヒタルトイフ也。ミツクリナムトノヤウニ、ナカニキテコストモ、マロライハ、コトヨメル也。マロトイフコトハモ、男女ニカヨヘトモ、コレハ妻ノ和歌ナレハ、女ノマロトイヘル也。拾穂抄に「松かへりて椎にてとそへて、三栗なとよめり(中略) 見安云、まるといは、こは、いは、こよ也云々。但見安には、松かへりしひてあれやはとよめり。しひてはしひて待也云々。あれやはのはの字は、心なきに也。此哥思惟すへし。」代匠記に「此ハイト意得カタキ歌ナリ。今試ニ釋セハ、先下句ノ點叶ハサレハ、改テ、ナカウヘコヌヲマロトイヘヤコト讀ヘシ。松反トハ、色モカハルト云ヒナスハ、誣タル詞ナリ。依テ誣ト云ハム爲ニ松反トハ云歟。第十七ニ家持モ此ツ、キヲヨマレタリ。誣トハ人ヲ欺クナリ。ニハ助語ナリ。シヒテトモ讀ヘシ。但家持ノ歌ニモ之比爾底トアレハ今モニヲ加ヘタル歟。サテシヒニテアレヤハトハ思ハヌヲ思フト欺ムキテ申ツルニアラムヤハナリ。三栗ハ中トツ、ケムタメナル事、上ニ云カ如シ。中上コストハ假令一月ニ付テイハ、初後ノ十日ハ中ノ十日ニ對シテ上ナリ。麻呂ト云ハ麻ハ眞、呂ハ助語

ニテ、眞人ト云意歟。繼體紀云、七年十二月辛巳朔戊子、詔曰、懿哉麻呂古、示朕心於八方、盛哉勾大兄、光ニ我風於萬國。又云、朕子麻呂古、汝妃之詞深稱ニ於理。此麻呂古ハ勾大兄ノ御名ニハアラヌヲカクノタマフハホメサセ給フ御詞ナルヘシ。然レハ我言ハ君ヲ諷タルニハアラス。今來ムト憑メテ人ヲ待セ置テ中上皆過レト來ヌ人ヲ麻呂ト云ハムヤ君トナリ。終ノ子ノ一字ハ男女五ニ背子吾妹子ナト云詞ナリ。上ニ人丸集ニ出ル歌トテ麻呂歌一首ト云ヘル事アリ。今ノ落句ヲ思フニ彼麻呂カ妻ノ夫ノ名ニ當テ和セルニヤ。萬葉集疑條奉問に「松反四臂而云々、此歌すべて心得ず、いかによみときたまふぞや。待てぞ久しく不來に女わびて音信をもせぬ時男よみて贈りしこたへとみゆ。然れば我待つは却て強ことにてあればや、一年の内半の日數過て不來人なればそは待といはんやもとよめるならん。」萬葉考に「今本呂は追の誤、末の子は毛の誤ならんとして暫字を改。其據は卷十七に大伴家持思放逸騰夢見感悅作歌に麻追我弊里之比爾而安禮可母佐夜麻太乃乎治我其日爾母等米安波受家牟。此歌は今の歌の意をとられしと見ゆれば、もとの句の意は明らかにしらる。これによりて今本の末句の字の誤もしらる。さて歌の意はまたはかへりこんといひたるは強言にて、其時も過てきまさぬからは、まつといふ事ははじめのぞとらめらるなり。麻呂、與人按に今本呂と有を追と改もいかゞ。なるべきだけは有こそまゝにしたがふぞよかる。麻呂とありては三ぐりの中すぎても來ずしてかへりて心さへ消うせたりと丸が事をいはむやしかいふべきにあらずといへる心なり。」略解に「按に、あれやはなといふ時は、やはは返語なれば、しひにてはあらぬといふ意に成ていよ、解がたし。卷十七の哥を合せ考るにこゝもやもといふべし。さらは羽は母などの誤ならんか。猶考べし。」古義には羽を物の誤とし、呂を追の誤として、「歌意は我君を待と云は強言にてあれやは嗚呼さらに強言ならず。わが音信もなきとの給ひおこせたれども中々に君こそわが思ふ如

くにわれを思ひたまはざらめ。月の半過にまで來まさぬ君なれば待はことわりにあらずや、我待居と君にいへや子等よと使にいひつくる意なるべきか」と見えてゐる。

今按するに集中に八を「は」と讀ましめた例は極めて少い。

茅渚廻より雨ぞ降り來る、四八津の漁人網手綱干せり、沾れあへむかも(卷六、九九九)

この歌の四八津は、普通に四極と書いた地名と同一であるとされてゐるから、これに従へば八を「は」と讀むことになる。その外、

神さぶと否にはあらず、八也多八かくして後にさぶしけむかも(卷四、七六二)

この小川白氣結瀧至八信井上爾辭上せねども(卷七、一一一三)

わが紐を妹が手もちて結八川又還り見む萬代までに(同、一一一四)

妹が紐結八川内乎古之井人見きとこれを誰知る(同、一一一五)

の數首にては或は八をハとも訓むべきやうであるが、結八川は當然ユフヤカハと訓むべく、前の二首はなほ定訓を得がたき字面であつて確證とは爲し難い。さればこの歌に於ける二個のハも、他の例に従つてヤと訓む方に従ひたい。同時に、八はヤと訓むと共にヤツとも訓まれ得べき字である事に注意したい。八をヤツと訓んだ例は他には無いが、三をミにもミツにも借りて用ゐ、五をイツの訓に借りた例がある故である。

丈夫と念へる吾をかくばかり三禮二見津禮片思をせむ(卷四、七一九)

かぐはしき花橘を玉に貫きおくらむ妹は三禮でもあるか(卷十、一九六七)

この二首に於いてはいづれも三禮をミツと訓むのであつて、三をミツの借訓に用ゐてゐる。

道の邊の五柴原の何時も何時も人のゆるさむ言をし待たむ(卷十一、二七七〇)

この歌に於いては、五をイツの訓に借りてゐるのである。さらばこの歌の第五句を字のまゝにマロトイフヤツコと訓まれぬわけは無い。その意は「麻呂といふ奴」の義で、おのが男を罵つて賤奴に比したのであらう。婦人よりして戯に男子を奴と稱したことは、卷第八、

紀の女郎大伴宿禰家持に贈る歌二首

戯奴氣といふが爲吾が手もすまに春の野に抜ける芽花ぞ食して肥えませ(一四六〇)

晝は咲き夜は戀ひ宿る合歡木の花君のみ見めや和氣さへに見よ(一四六一)

が最よい例である。即、男子を戯奴と稱してゐる。これに對して男子みづからも和氣といひ、また他の男子に對してもみづから戯奴と稱してゐる。他を侮蔑していふ場合、またみづから卑下していふ場合は、宣命、正倉院文書等に澤山の例がある。この集の一例

堅さにもかにも横さも奴とぞ吾はありける主の殿門に(卷十八、四一三二)

こゝにいふ奴とは奴婢階級のものゝ意味で、奴婢とは萬葉時代に、奴隸として取り扱はれた階級の者をいふのである。婦人が男子を奴といふのは親愛のあまり、戯にわざと賤しき詞をもちゐるのである。

人事茂間守跡不相在終八子等面忘南(卷第十一、二五九一)

この歌の如きも、第四句をツヒニヤコラガと訓んでゐるのを破して、人事の茂き間もるとあはずあらば終にやつこ等面忘れなむ

と訓んで、舊訓によれば會はなかつたら終には自分が思ふ子等の面を忘れるだらうといふ氣の弱い態度である

のに對して、改めて、もし會はなかつたら、終には自分の面を忘れてしまふだらうといふ義に解し得ることである。

今問題としてゐる歌は柿本人麻呂の歌集から出てゐるのであるから、たゞ麻呂と言つても、直に柿本人麻呂の事になるであらう。

松反四臂而有八羽は前にも言つたやうに鷹に關する術語のやうである。松反といふのは、鷹の羽毛の抜け替ることをいふのであらうか。四臂を、古くは譯、強の意に解してゐたが、これは上記のやうに感覺の障害と解するがよい。ヤは反語、ハは軽く添へた助辭であらう。第四句の中は、みつぐりの下にある語として、同卷の「みつぐりのなかに向きたる」古事記中卷の「みつぐりのそのなかつにを」みつぐりのなかつえの」等の例によつて、やはりナカとよむのであらう。上不來は男子を奴に譬へてゐる關係から「ノポリコヌ」と訓んで、地方官として赴任したきりで上京して來ない意か、または同地にあつても自分のもとに出仕して來ない意に取る。妻に對して雪は春日に消えるだらうが、お前は心までも消えてしまつてか、手紙もよこさないと云つたに對し、妻から、言や聾でも無いのに、上京もしてこない、この奴はと云つて答へたのであらう。

吾妹子に 戀ひて術なみ 白細布の 袖反ししは 夢に見えきや

【原文】 吾妹兒爾 戀而爲便無三 白細布之 袖反之者 夢所見也

【口譯】 吾が妻に戀ひて致し方なさに、私の袖を瀧したのは、夢に見えましたか。